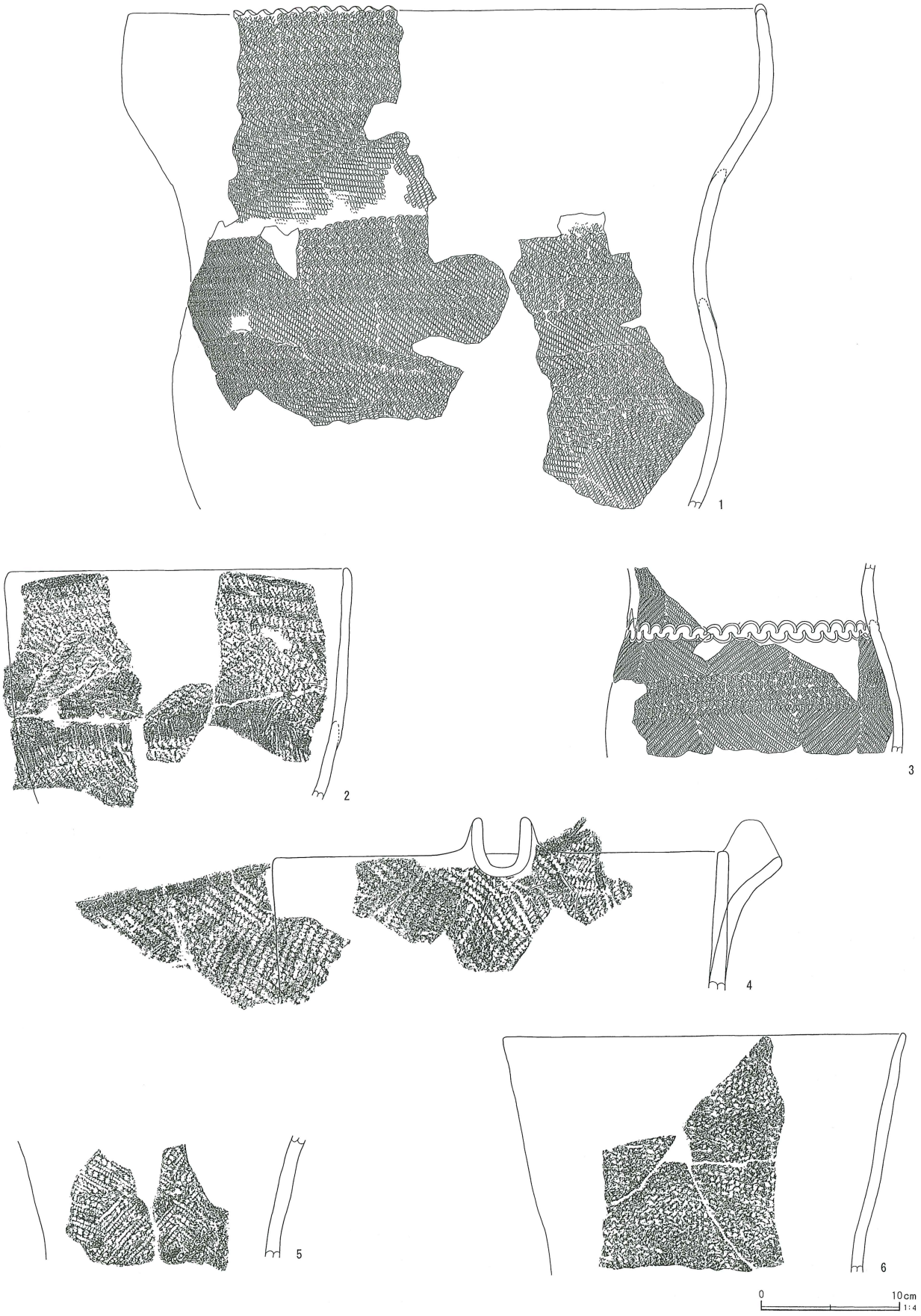
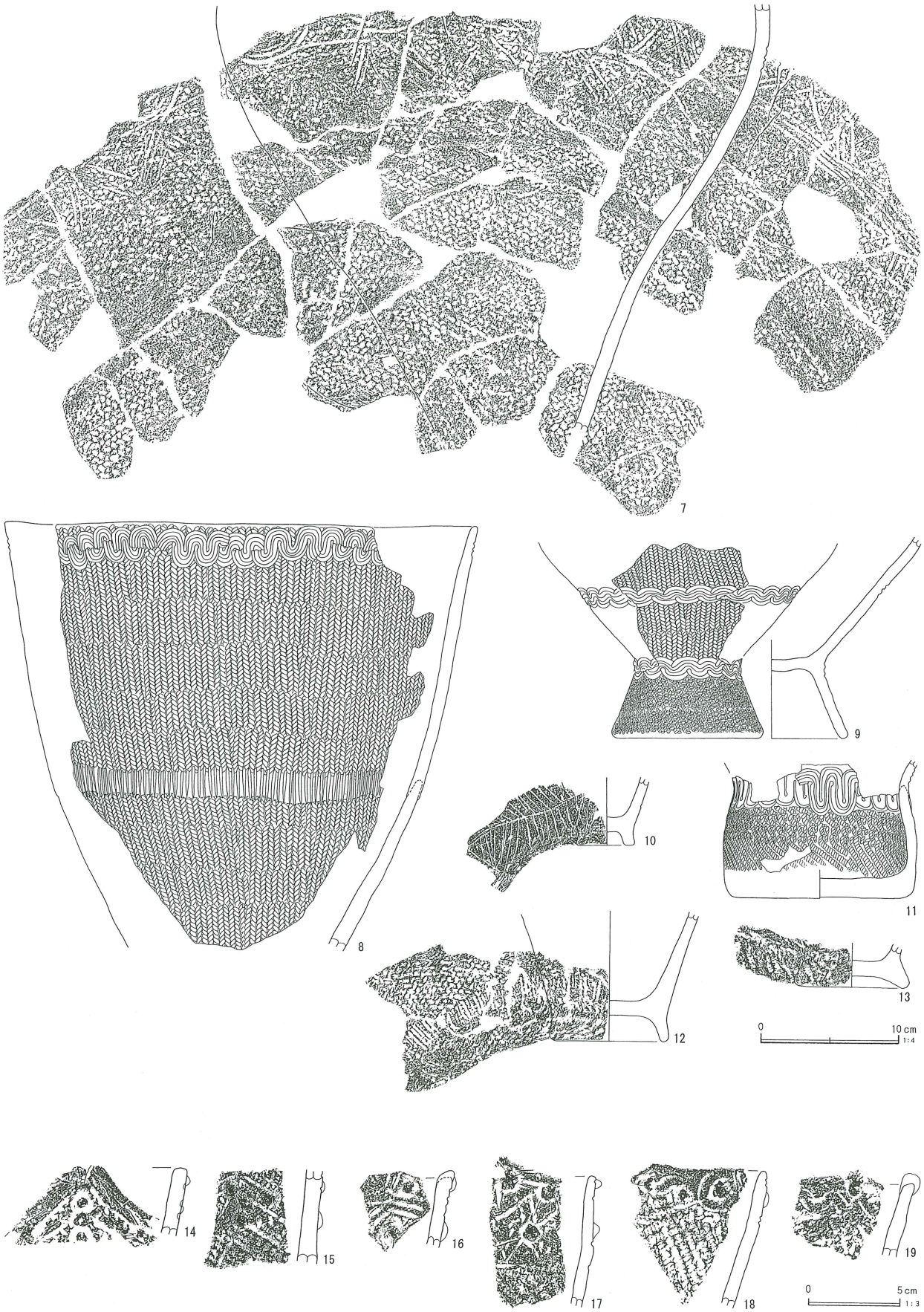
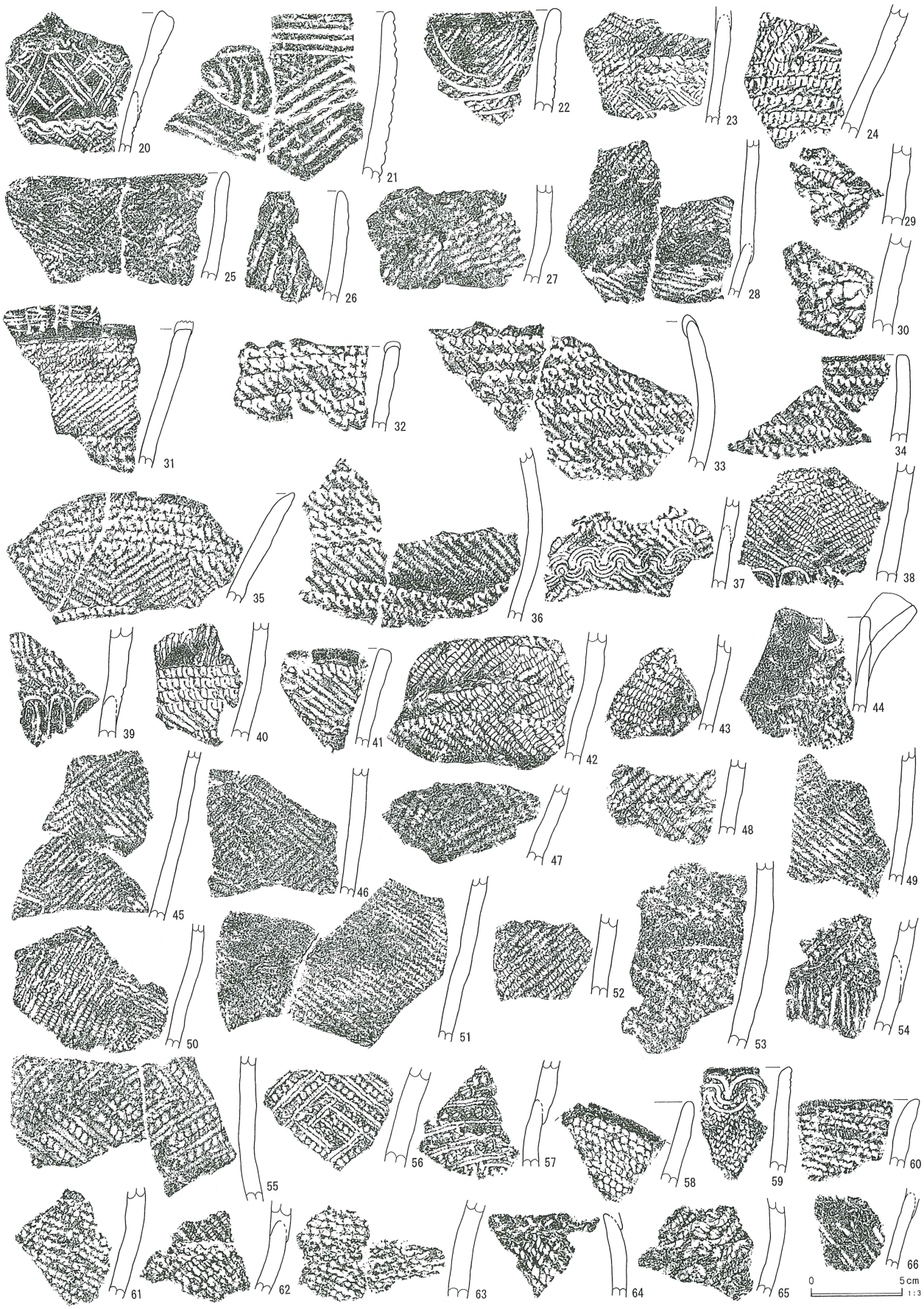


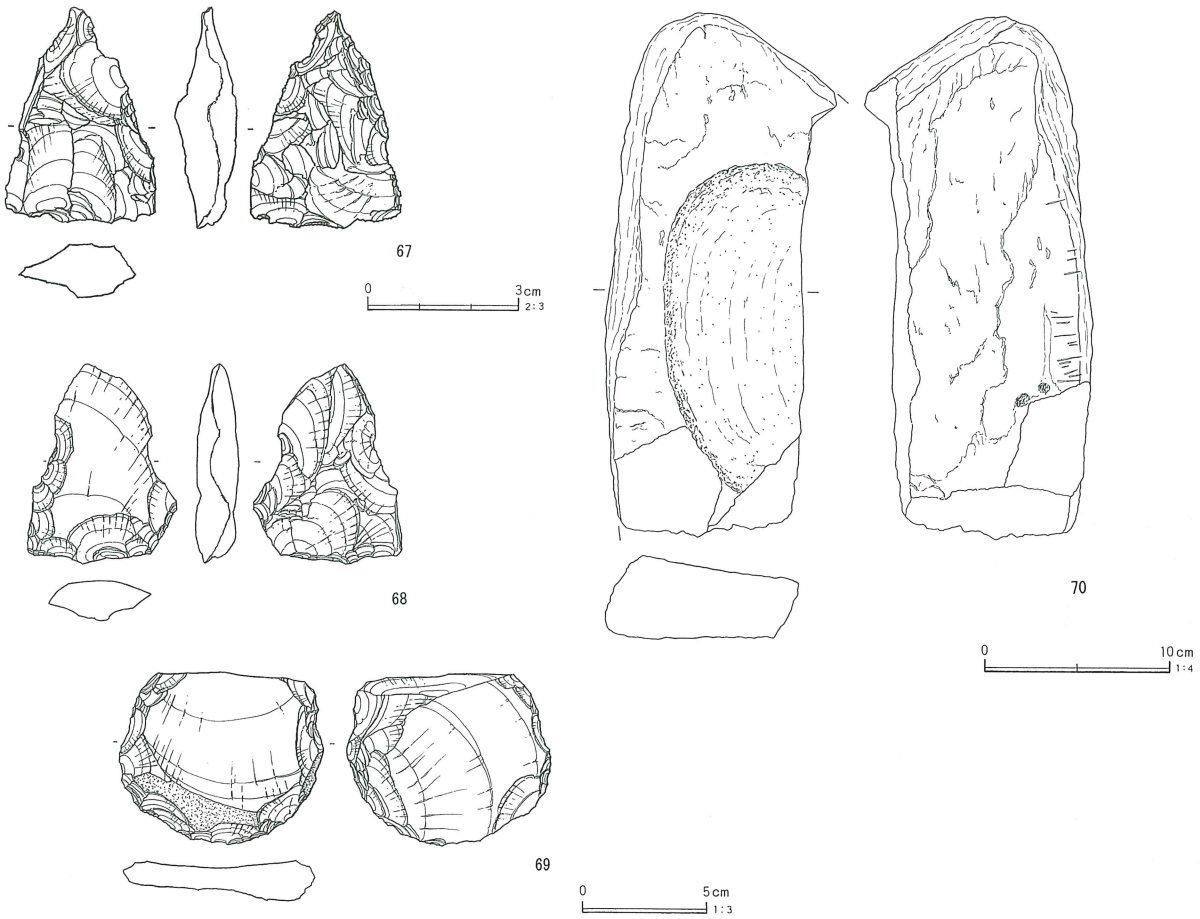
第433図　第298号住居跡出土遺物（1）



第434図　第298号住居跡出土遺物（2）



第435図　第298号住居跡出土遺物（3）



第436図　第298号住居跡出土遺物（4）

第303表　第298号住居跡出土石器観察表

番号	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材	備考・出土位置
67	石鏃？	4.3	3.0	1.1	10.6	チャート	
68	打製石斧	7.9	6.0	1.6	68.6	ホルンフェルス	
69	礫器	6.8	8.1	1.6	105.9	黒色ガラス質安山岩	
70	石皿	27.7	12.2	4.3	2239.7	片岩	裏面砥石として使用か？（一部砥面）

る環状末端のみを連続して施文し、幅狭の横帯区画が繰り返される。二つの構成法は本住居跡の主体期よりは先行する単節斜縄文の構成法である。

単節の構成法で最も多いのが多段ループ帯と斜縄文帯のちがいを強調する構成で1～3・11・31～40が相当する。なかには1・2・36のように多段ループ帯で鋸歯状文を描出し、これを2帯にわたってめぐらせるもの（1）もある。

主としてこれらに附加される構成要素に口縁部の突起とコンパス文があるが、前者は臼歯状（31）と集合角状（32・33）の2種が存在する。また、コンパス文は支点を平行にずらす「真正」と称される手法が多いが、2・11・39のように上下移動をくり返す後出的な手法も存在する。施文具も半截竹管（3・11）と櫛状工具（37）が共存している。

単節の構成法は、他に単段のループ文を介在させる幅広の横帯区画（41～43）、帯間線強調をせず、長い原体を用いて単純施文を繰り返すもの（4・44～54）がある。いずれも0段多条原体を使用していることから、本住居跡の主体期に伴うものと考えて大過ないだろう。また、一部では羽状構成も見られ、54ではコンパス文に代えて短沈線の連続を成形接合部にめぐらしている。43は、破片内では単段ループのみ残るが、施文帯が斜方向になることから、多段

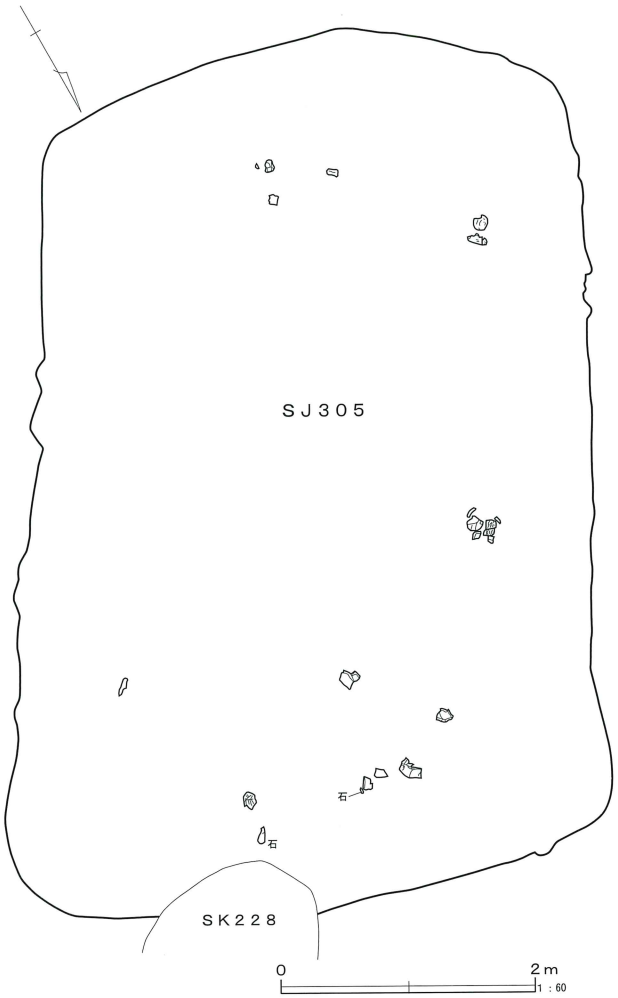
ループによる鋸歯文構成の一部かも知れない。

既述の原体を除く使用原体には「正反の合」（5・55～57）、組紐の組み違え（6・58～65）、組紐（8・9・12）がある。使用原体別の比率は組み違えが19％と最も高く、「正反の合」8％、組紐5％の順となる。

組紐を施文する8には上下で異なるタガ状加飾が施されている。口縁部のタガ状加飾は、成形接合部へのそれが本来の目的から離れて転化したものであるが、両者のちがいより、短沈線がより粗的な文様要素として認識されていたことがわかる。

さらに、9は明確な脚部を作り出す台付鉢で、台部と鉢部で使用原体を替えている。また、12の底部は施文組紐原体と短沈線施文の特徴から、8と同一個体となる可能性もある。

この他、66は条間が広い0段縄の痕跡が観察できるのみで、原体が附加条手法、撚糸手法によるものかわからなかった。また、10の小型土器底部に残る1本引きの沈線文は、上位の全面に広がるのか一段目の成形帯にとどまるのか判断できなかった。



第437図　第305号住居跡（1）

第305号住居跡（第437・438図）

CC・DD－45グリッドで発見・調査した。北方の一部を新期住居跡のために破壊されているが、他に重複遺構はなく、ほぼ全体の様相が把握できる。

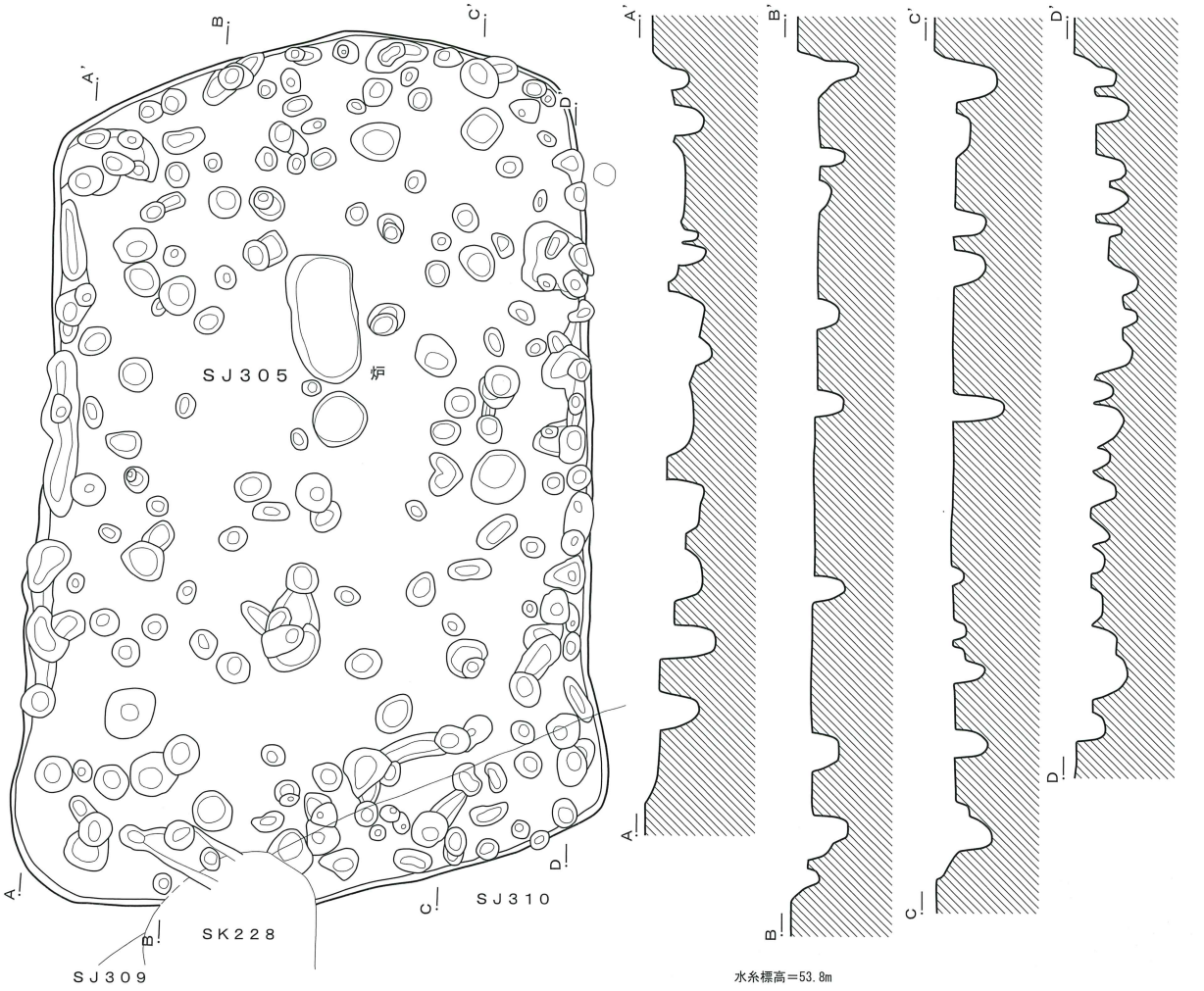
竪穴の形態は南北に長い長方形であるが、諸施設の配置から想定できる主軸方向は通常の方位指向とは逆の南方を指している。また、短軸方向の南北壁はやや弧を描くように掘削されている。

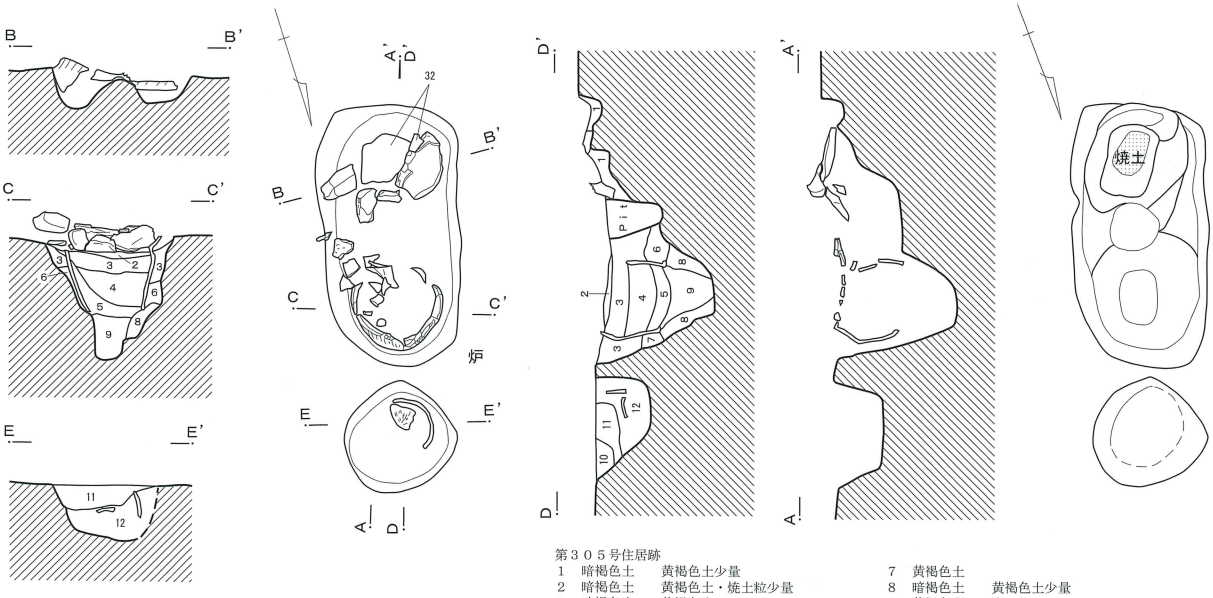
覆土は黒褐色系土が主体で、下層ほど明るみを増す。床面はほぼ平坦だが、全面に柱穴類が穿たれていた。柱穴類のうち最も明確なのは壁際にめぐる柱穴列で、密に分布する上に一部が溝で連結されている。また、他の柱穴類に紛れてはっきりしないが、一回り内側にも竪穴形態と相似形となるように同じような軸方向と密度の柱列が並ぶ。したがって、本住居跡においては少なくとも1回の拡張作業が行われていると推定できる。

拡張前の壁柱穴列のさらに内側に想定できるはずの主柱穴は、はっきりとしたものが存在せず、確定はできなかった。だが、居住空間の規模からして、この期に典型的な6本が想定される。壁柱穴内に4穴、中央やや南寄りに中軸線をはさむように2穴が設けられ、上屋を支えていたと考えられる。

炉跡、および付属施設は、中央やや南寄りで発見できた。3箇所の構造部があり、長楕円に掘り込まれた主施設の南側には下方を断ち切られた土器（1）が埋設されていた。ちなみに、この土器は、波状の口縁を呈することから、利用に不適な波頂部も打割されていた可能性がある。

これに対し、主施設の南側は最上層に礫が置かれていた。さらにその下には周囲の覆土を断ち切るよ

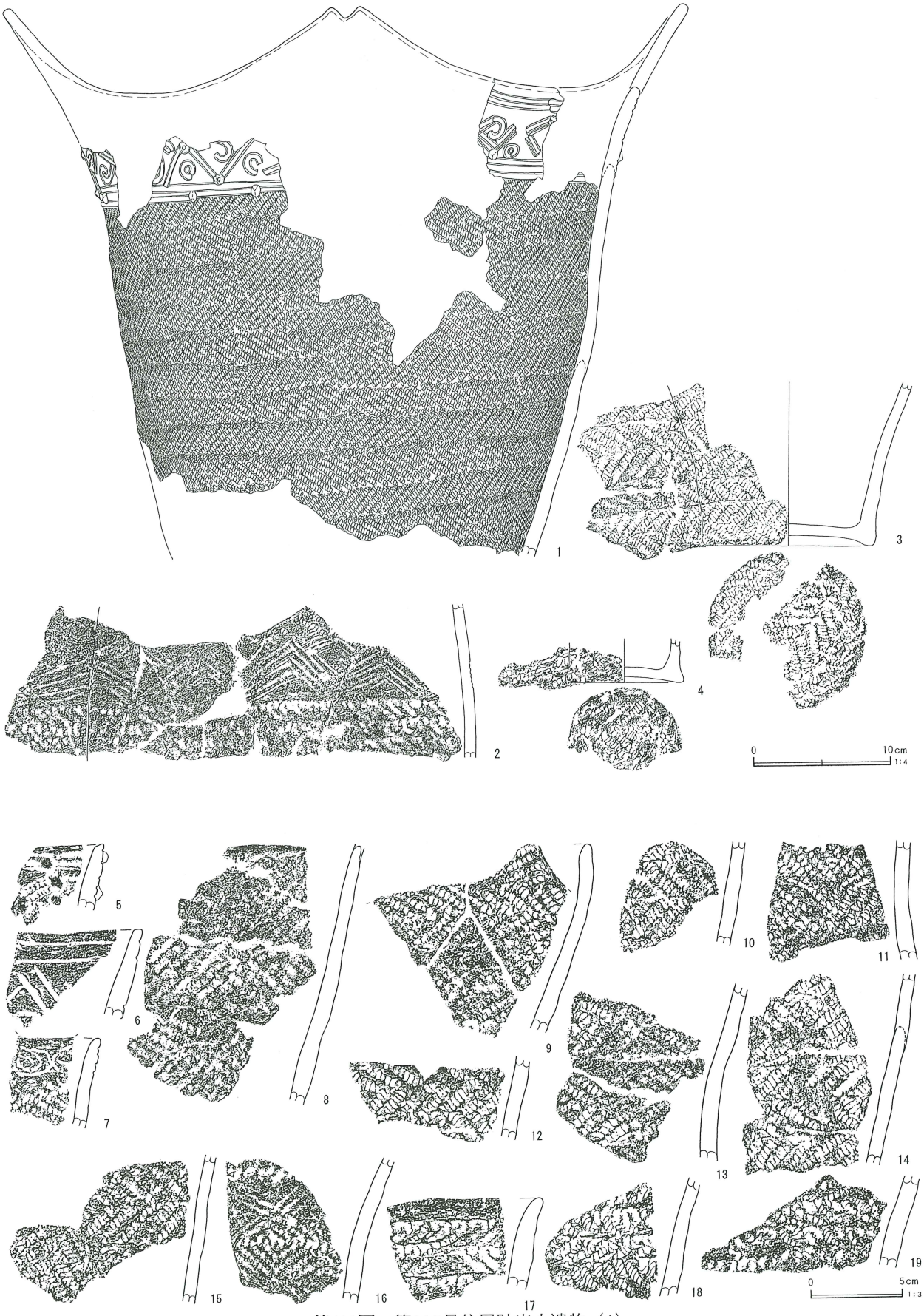




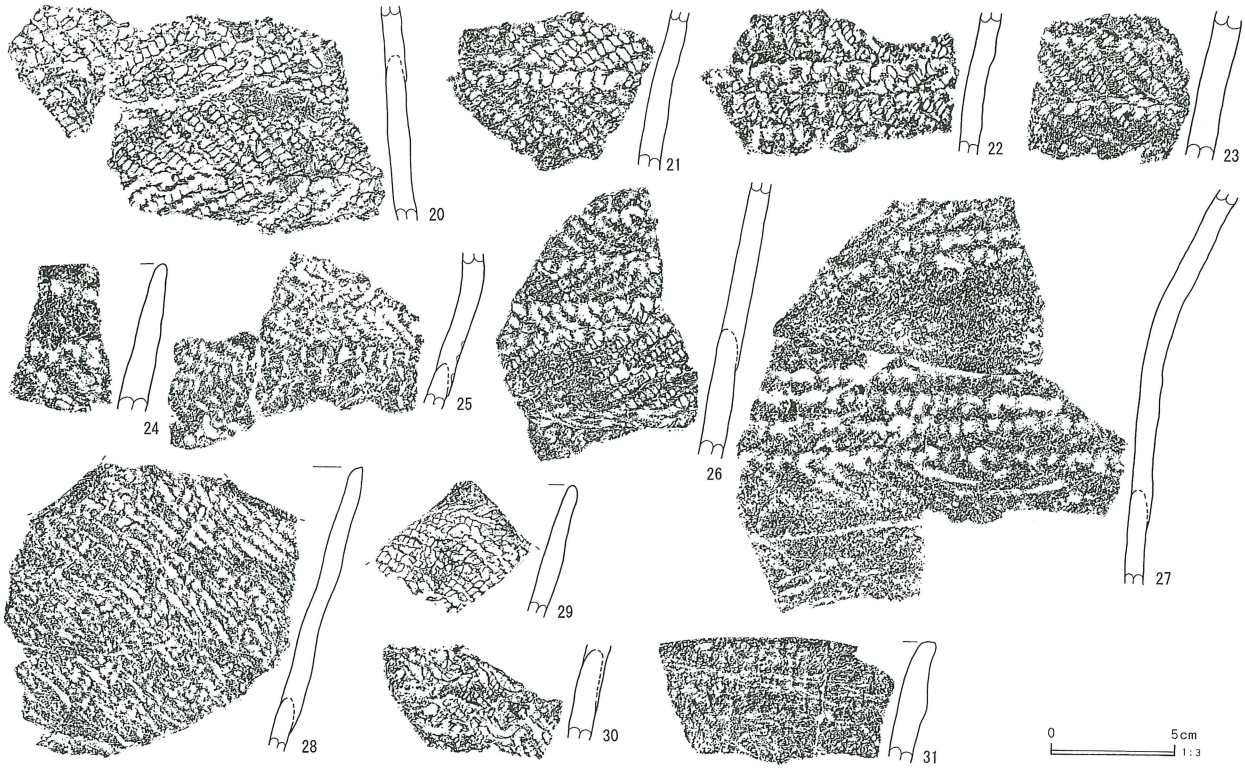
第３０５号住居跡

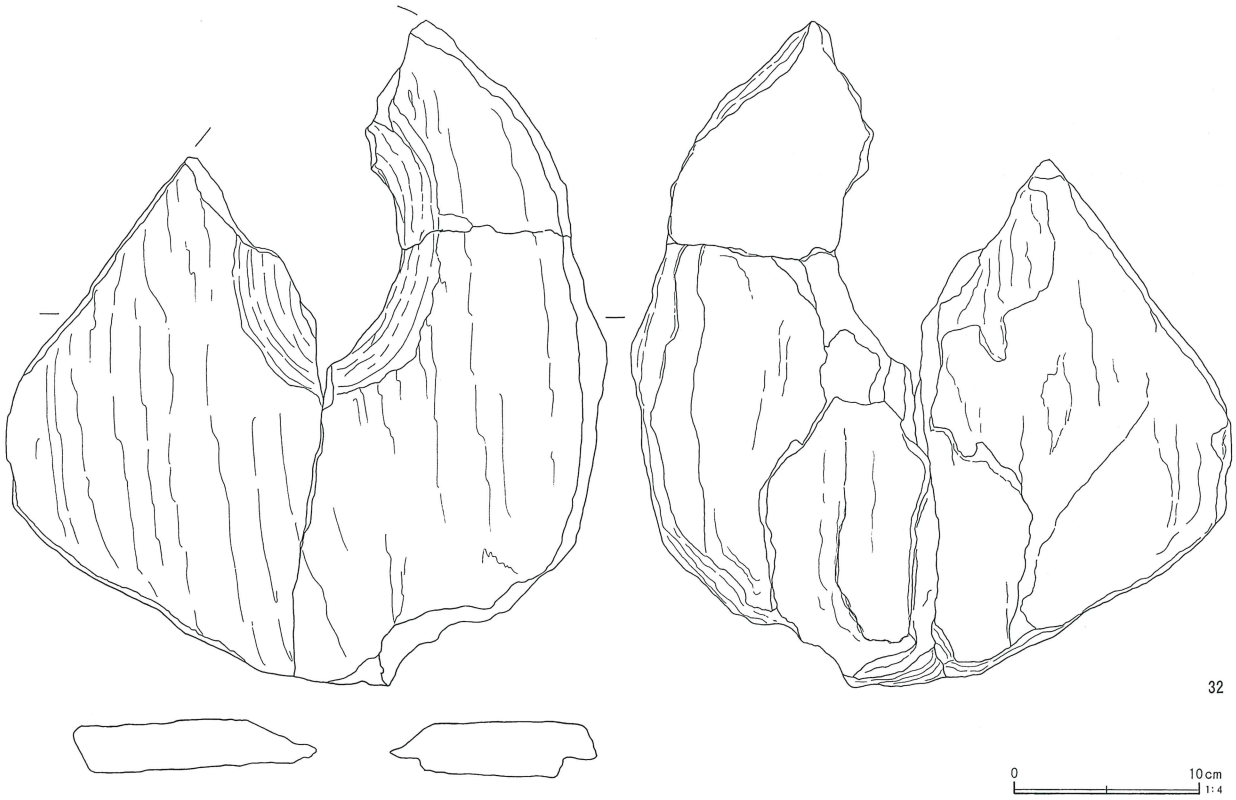
1	暗褐色土	黄褐色土少量	7	黄褐色土	
2	暗褐色土	黄褐色土・焼土粒少量	8	暗褐色土	黄褐色土少量
3	暗褐色土	黄褐色土	9	黄褐色土	炭化物粒
4	黒褐色土	炭化物粒、黄褐色土	10	暗褐色土	
5	黒褐色土	炭化物粒多量	11	黄褐色土	ロームブロック主体
6	暗褐色土	黄褐色土	12	黄褐色土	

第438図　第305号住居跡（2）・遺物出土状況



第439図　第305号住居跡出土遺物（1）





第440図　第305号住居跡出土遺物（2）

第304表　第305号住居跡出土石器観察表

番号	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材	備考・出土位置
32	石皿	(35.2)	32.2	3.0	4454.8	片岩	炉　石皿を炉壁に転用　被熱箇所あり

うに小穴が穿たれていた。住居跡の廃棄時に何かしらの行為を行ったのかも知れないが、それ以上の所見は得られなかった。

一方、北側の付属施設は主施設とは掘込みを異にし、主施設側を縁取るように2の土器中位大片が埋め込まれていた。両施設を拡張前後の炉跡にそれぞれあてる考えもあるが、付属側の埋土は埋め戻し主体であり、最上層の分布範囲と深度からみた生活時の開口規模では燃焼部の面積を確保できない。

遺物は、埋設土器以外に石皿や土器破片が出土している。原因はわからないが、土器片は大きいものが多い。埋設土器二個体より、本住居跡は関山Ⅰ期に造営されたものと判断できる。

第305号住居跡出土土器（第439・440図1～31）

埋設土器を含め31点を図示したが、埋設と覆土中出土品の文様要素や構成に大きなちがいはない。

口縁部および胴部に特別な文様帯を設定するのは、埋設されていた1・2と5～7である。いずれも無文地に半截竹管で鋸歯や蕨手などの主幹線を描く。貼付文は主幹線の結節点に限って加えられており、点状文様本来の施文位置から逸脱していない。

縄文を施すものの大部分は単節原体を利用しており、3・8～15は帯間線強調を伴わない幅狭の羽状縄文を施文している。また、16は帯間線強調のため第一種結束手法を用いた原体を押捺し、羽状縄文を作出している。

さらに、ループ文を用いた構成は、幅狭の等間隔（17～23）、多段ループ帯を強調帯とする異間隔（24～27）に二分される。いずれも環部が大きめで、26・27の多段ループ帯も間隔が圧縮しきれてない。

28～30は第二種結節部の回転痕を施文しているようだが、具体的な原体となると判断がつかない。また、31は無文の口縁部である。

第317号住居跡（第441図）

ＣＣ－49・50グリッドで検出した。新しい時期の竪穴住居跡とわずかに重複し、北東側の壁面は検出できなかったが、柱穴類の配置によっておおよその規模・形態を推定できる。

想定される竪穴形状は長方形が基調だが、両短辺が弧状に広がり楕円に近くなる。覆土は床面直上に暗褐色土がわずかに残るのみであった。床面はほぼ平坦、散発的ながら壁際に柱穴列がめぐる。内部の柱穴類は皆浅く、主柱になり得るものはない。

また、明確な火床面はもたないが、中央やや東寄りに結晶片岩の炉辺石を埋め込んだ炉が検出できた。炉跡の掘方や炉辺石の方向から算定できる主軸方向は、今回調査の他住居跡と異なり、めずらしい短辺方向になる。

遺物は、1の土器がまとまって出土した他は散発的だが、石器製品類は石斧類をはじめ4点が出土している。住居の埋没期は、1の土器より判断すると、大宮台地の黒浜期に相当すると考えられる。

第317号住居跡出土土器（第442図1～6）

1は大きく開口する直線器形の深鉢で、器面のうねりが目立つ。口縁直下の1帯を除き、無節斜縄文が施文されているが、成形単位に構成法をかえているようである。

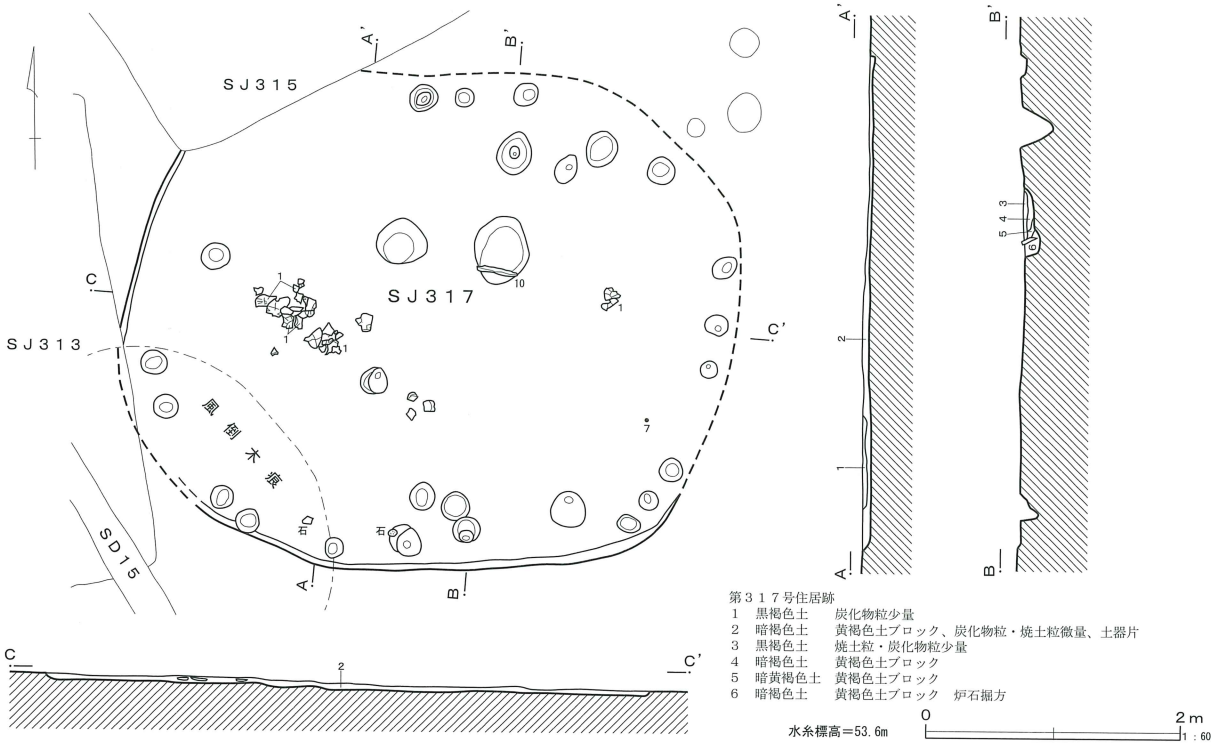
これに対し、2～6は関山式土器で、多段（2・3）、単段（4）のループ文を施文するもの、縦位の短沈線をめぐらすもの、組紐施文などがある。

第318号住居跡（第443図）

ＣＣ・ＤＤ－46・47グリッドで検出した。古墳時代以降の竪穴住居跡6軒とすべての範囲で重複していたが、これらの掘込みは本住居跡の床面まで到達しておらず、全容が把握できる幸運に恵まれた。

竪穴の平面形は長軸に秀でた長方形で、南壁が若干弧状になる他はきわめて直線的である。覆土は、上層が黒褐色、下層が暗褐色と、通常の自然堆積の様相を示す。

床面はほぼ平坦で、壁際には径の小さい壁柱穴列



第441図　第317号住居跡

が密にめぐる。この他、東西壁際にはもう一列ずつ壁柱穴列が存在したようにも見えるが、確定できるものではない。したがって、この竪穴住居跡は初期よりこの規模で構築されたものと判断できる。

内部の柱穴類のなかでほぼ中央に対となる２穴が存在している。B断面に見るように細いものであるが、位置的関係と均質な掘込みより、南北壁側の４穴は特定できなかったものの、６本主柱穴の中央部分と解釈できる。

これに対し、炉跡は、中央やや北寄りに検出できた３重の浅い掘込みがこれにあたると考えられる。それぞれが順に軸線上で移動を繰り返したと思われるが、調査時の断面観察が行き届かず、先後を判定するに至らなかった。土器や石が埋設された痕跡は発見できなかった。これらは、一見したところ３期にわたると考えがちだが、中央の一段深い掘込みと最南の掘込みが主要火床面ではなく、土器が埋設されることが多い付帯施設の痕跡であると解釈すると、炉の変遷は２期になる。

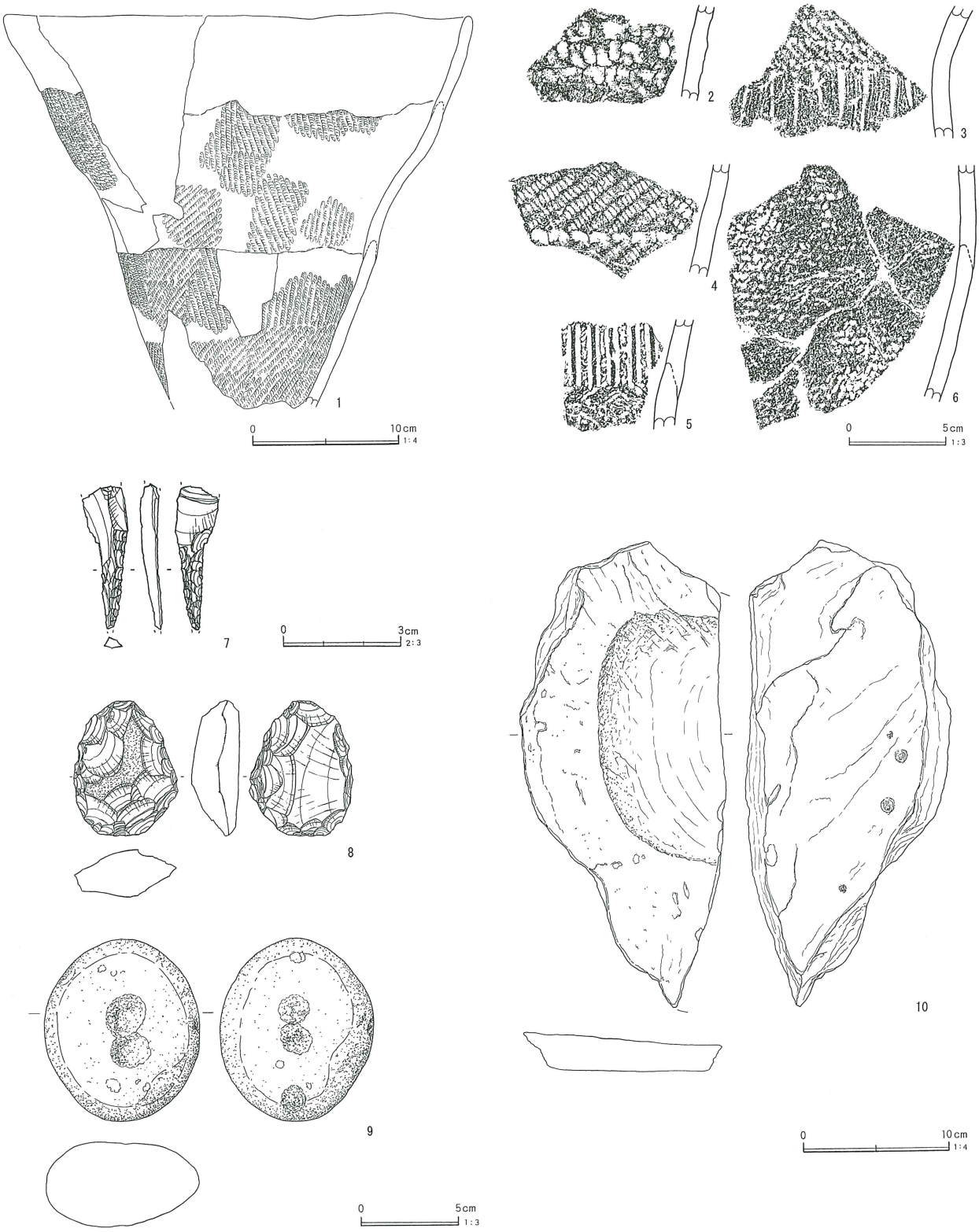
遺物は、掻削器などの小型剥片石器と粉砕具製品が５点など、石器が比較的多く出土している。また、土器は破片類を中心に接合後336点が出土している。出土土器の主体期から、本住居跡は関山Ⅱ期に埋没したものと考えられる。

第318号住居跡出土土器（第443・444図１～56）

出土土器は56点を示したが、器形が推し量れる資料は比較的少ない。全体の出土層は関山Ⅱ期に相当するが、一部先行するものが含まれている。例えば、口縁部文様帯を設定するもののうち４～７は一本引きの沈線によって主幹線を描き、円形竹管文を充填するなど、この類に含まれる。また、10なども蕨手状文の大きさから、その可能性が強い。対して、１・２・11～13は貼付文を集中させる構成法や文様描出法から、本住居跡の主体期に含まれるものと考えられる。

縄文施文原体として最も多いのは、他住居跡とかわらず単節斜縄文で、原体種の64％を占めるが、14は鋭い１本引きの沈線のみで文様を描いている。また、15は無節斜縄文を施文している。

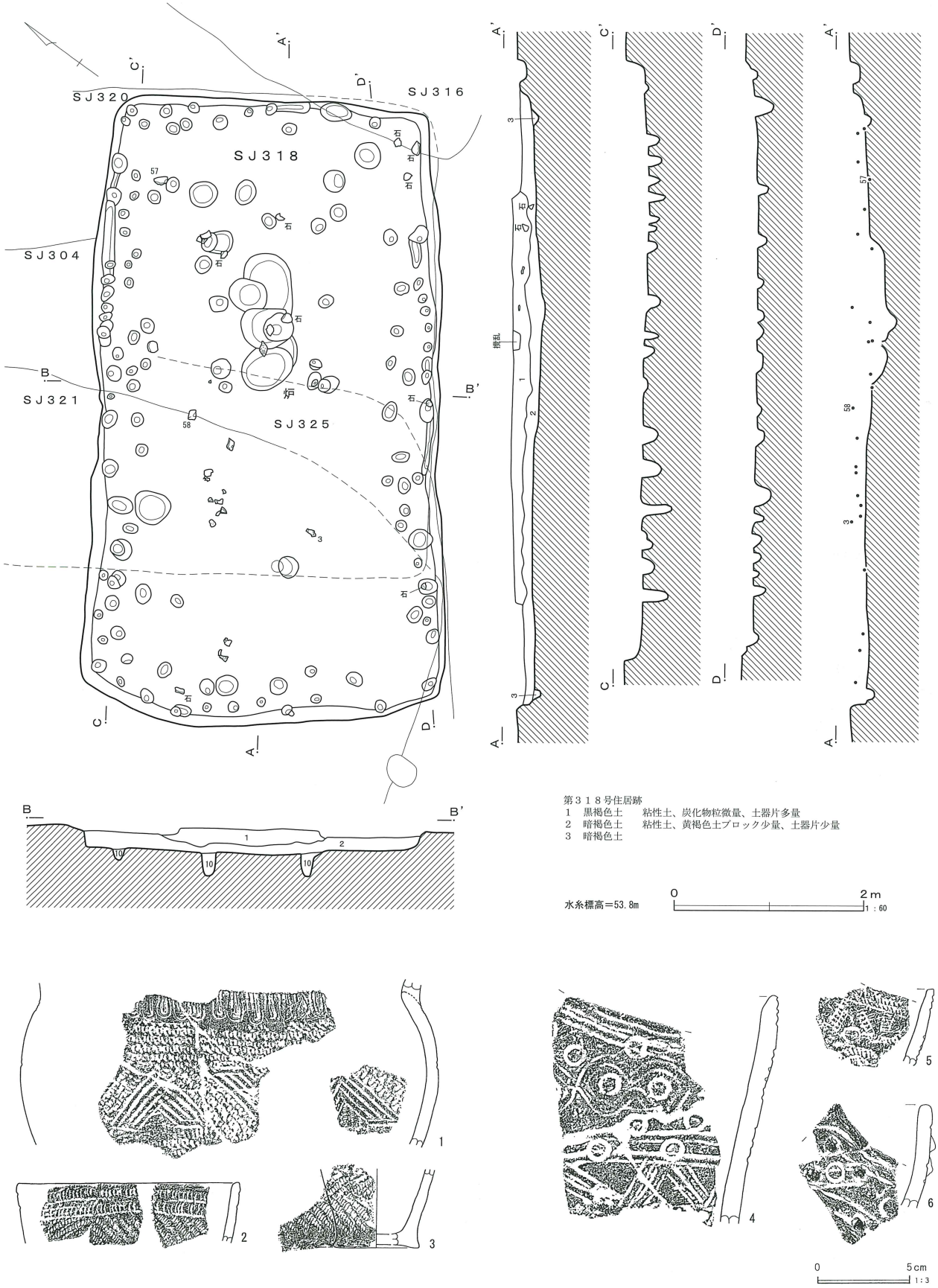
単節斜縄文の構成は、第一種結束（16）、幅狭等間隔のループ（17・18）が先行する構成法で、多段



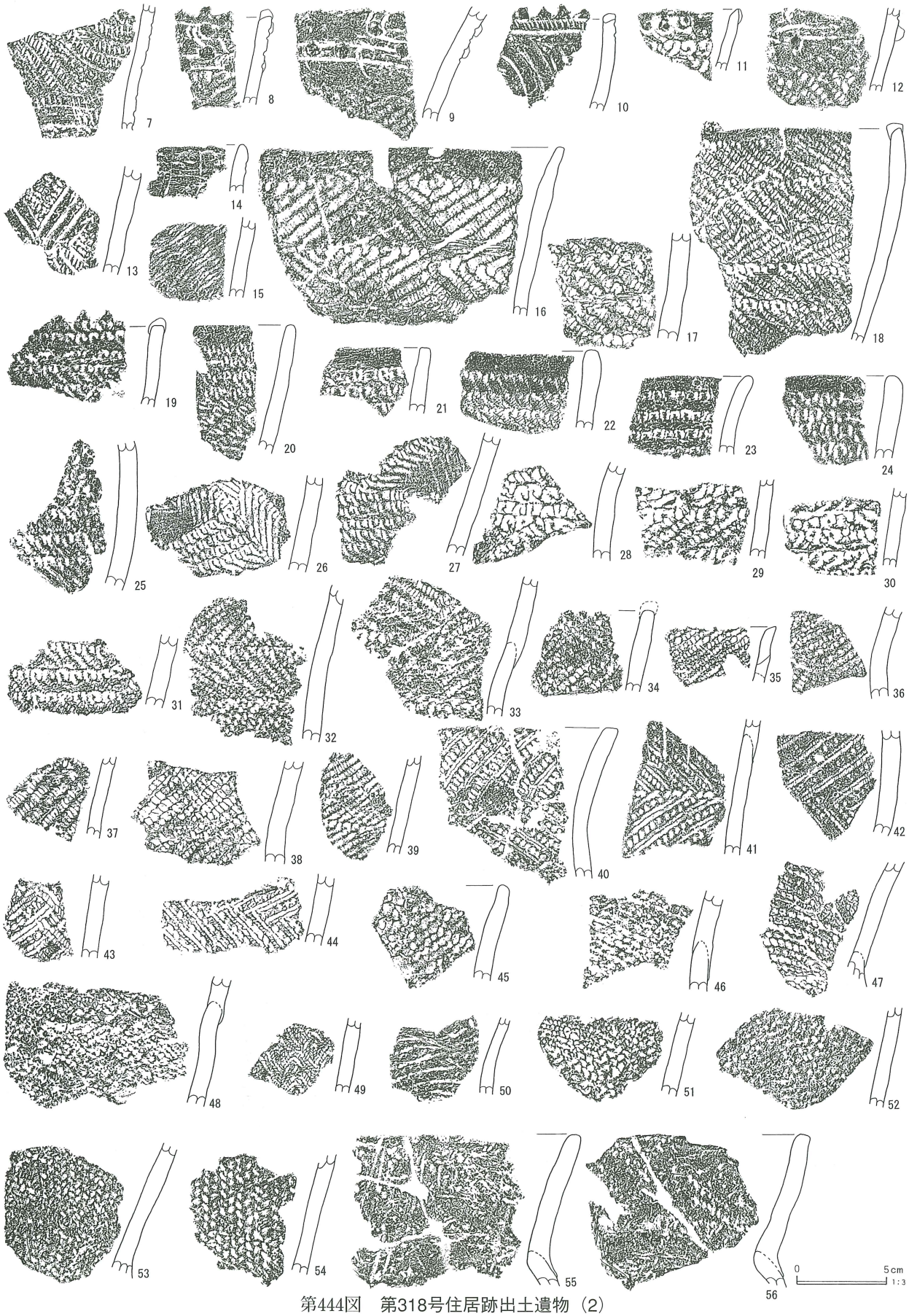
第442図　第317号住居跡出土遺物

第305表　第317号住居跡出土石器観察表

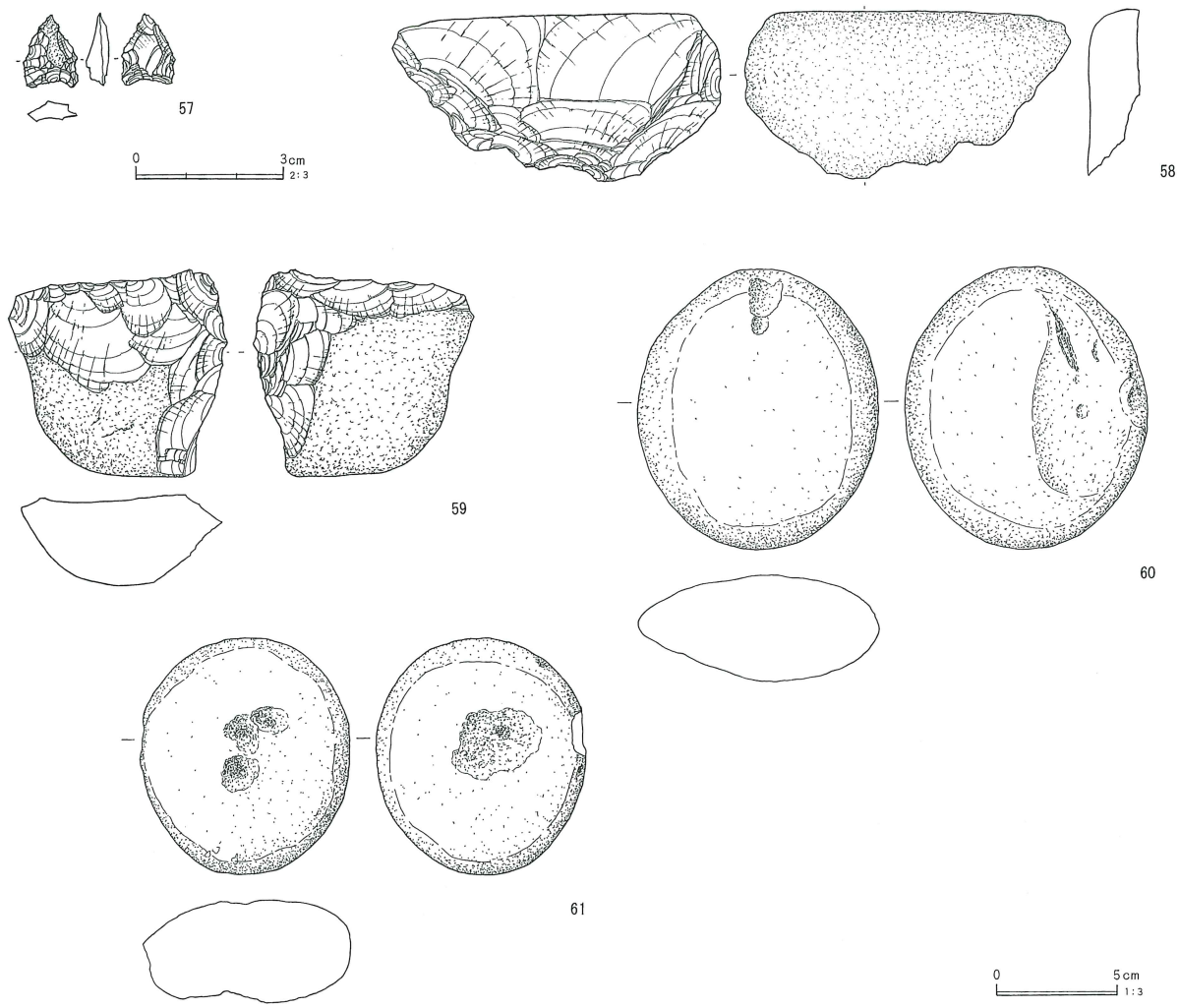
番号	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材	備考・出土位置
7	石錐	3.6	1.2	0.3	1.4	チャート	
8	打製石斧	6.8	5.2	2.4	89.0	頁岩	
9	磨石	9.2	7.9	4.3	397.7	安山岩	表裏面敲打による凹みあり
10	石皿	31.3	14.0	2.8	1604.3	片岩	裏面に敲打による凹みか



第443図　第318号住居跡・出土遺物（1）



第444図　第318号住居跡出土遺物（2）



第445図　第318号住居跡出土遺物（3）

第306表　第318号住居跡出土石器観察表

番号	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材	備考・出土位置
57	石鏃	1.5	1.1	0.4	0.5	黒曜石	
58	礫器	6.7	13.2	2.2	246.0	ホルンフェルス	
59	石核	8.3	8.9	3.7	337.4	頁岩	
60	磨石	11.3	9.8	4.2	628.8	安山岩	表裏面磨面
61	磨石	9.5	8.5	4.1	423.9	安山岩	表裏面に凹みあり

異間隔（19～31）、単段（32・33）、帯間線強調なし（34～39）などが主体期に伴うものだろう。23・24などは幅狭等間隔と区別が付きにくいが、施文原体の太さが弁別の目安となる。

異条斜縄文（40～44）は原体比の５％を占める。図示した破片はいずれも整然と撚り込まれた原体が想定でき、附加条法を彷彿させるものはない。

45～48は組紐の組違いの圧痕、49は第二種結束部の回転痕、50は附加条原体の圧痕が観察できる。このうち第二種結束は先出的要素であり、覆土埋没時に混入したものだろう。

この他、組紐文が残る51～54、うっすら縄文が観察できるものの原体を特定できなかった屈曲の強い深鉢口縁部片（55・56）などがある。

2. 土壙

第10号土壙（第446図）

Y－57グリッドで発見した。第４号溝跡と重複する位置で検出したが、土層による両者の先後は、判断つかなかった。不整楕円形の一端を第４号溝跡に破壊され、かつ、一部本壙の範囲を把握しきれず、掘りすぎてしまった部分がある。断面形はほぼ鍋底状で、覆土は暗褐色系土が主体である。

遺物は羽状縄文系関山Ⅰ式土器２点が出土している。いずれも比較的大きな口縁部片で、縄文施文破片を欠くことは、恣意的な選別も想定できるが確証はない。土壙の構築期は同式期と考えられる。

第10号土壙出土土器（第447図１・２）

図示した２点の土器は、いずれも竹管施文の基本線で構図を描き貼付文を追加する。１は沈線間に刻みを追加し、２は刻みのない４本１単位（竹管３回）の集合線が主幹線となっており、関山Ⅱ式土器の手法へと移行しつつある。

第66号土壙（第446図）

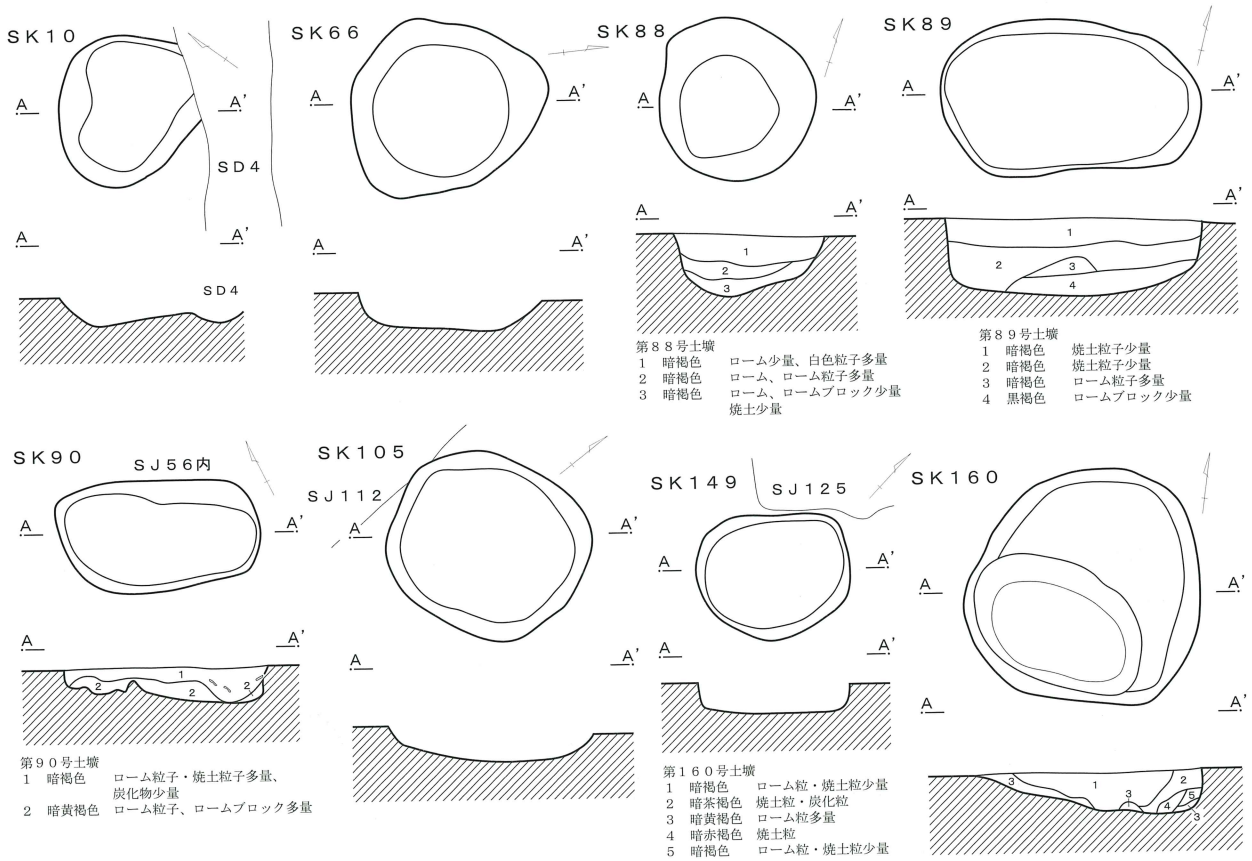
X－55グリッドで検出した。他と切り合うことなく単独で遺存していた。平面形はほぼ円形、断面は鍋底状である。遺物は深鉢形土器の上半がまとまって出土したが、投棄か遺棄かは判断がつかなかった。

第66号土壙出土土器（第447図３）

図示し得たのは３の無文深鉢形土器の上半のみである。粘土質感残る胎土中に大きめの砂粒が混じる特徴は、後期曽谷式土器とその周辺の無文粗製深鉢の特徴と類似するが、確定はできない。

第88号土壙（第446図）

Y－46グリッドで発見した。平面形は円形で、断面形は鍋底状に近いが、やや一方に傾斜している。



第446図　土壙

水糸標高＝53.6m

0　2m　1:60

第447図　土壙出土遺物

第307表　第160号土壙出土石器観察表

番号	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材	備考・出土位置
13	石鏃	1.4	1.2	0.3	0.3	黒曜石	
14	石錐	2.4	0.7	0.3	0.6	黒曜石	

覆土は暗褐色系土が主体となり、ローム粒子・ブロックが混入する。出土遺物はないが、覆土の特徴などから縄文時代に構築されたものと判断した。

第89号土壙（第446図）

Y－46グリッドで検出した。平面形は楕円で、単独での発見である。垂直に落ち込む壁とほぼ平坦な壙底は倒木痕の可能性を否定している。覆土は暗褐

色系土が主体で、下層でやや黒みを帯びる。

遺物は、関山式土器５点、諸磯ａ式土器９点、第66号土壙と同じ特徴を持つ無文土器片が16点とばらつきがある。口縁部片である第447図４を図示してしまったが、遺構の構築期は、最も新しく多くの破片が出土した後期と見なすのが妥当だろう。

第89号土壙出土土器（第447図４）

本壙で唯一図示し得たのは関山式土器の口縁部片である。正反の合を横位施文するが、おそらくこの下で羽状構成となるだろう。

第90号土壙（第446図）

Ｙ－46グリッドの第56号住居跡内で発見した。同住居跡に上位を破壊されているが、床面での発見後の深さもある程度あり、出土遺物も採集できた。平面形は楕円形で、壙底はやや起伏がある。

遺物は、関山Ⅱ式、もしくは黒浜式土器が14点、古墳時代の土器38点が出土しているが、後者は上層住居跡覆土に含まれた遺物の混入であろう。

第90号土壙出土土器（第447図５～８）

図示した４点は、いずれも単節縄文のみが印された破片で、一部で羽状を構成する。羽状は、観察できる範囲では左右の関係のみであるが、施文位は横位である。５～７は原体の特徴から同一個体と考えられるが、８は特定できない。

第105号土壙（第446図）

Ｙ－52グリッドで検出した。平面形はほぼ円形で、壙底は緩い鍋底状となる。遺物は、関山Ⅱ式土器が２点出土したのみである。

第105号土壙出土土器（第447図９）

２点が出土した土器片のうち１点を図示したが、９は組紐文が施文された胴部片である。

第149号土壙（第446図）

Ｗ－44グリッドで発見した。平面形は小規模な楕円で、断面形は急斜の壁面を経て鍋底状となる。覆土は暗褐色系の土が主体であった。遺物は、関山Ⅱ式期の破片が９点出土した。

第149号土壙出土土器（第447図10・11）

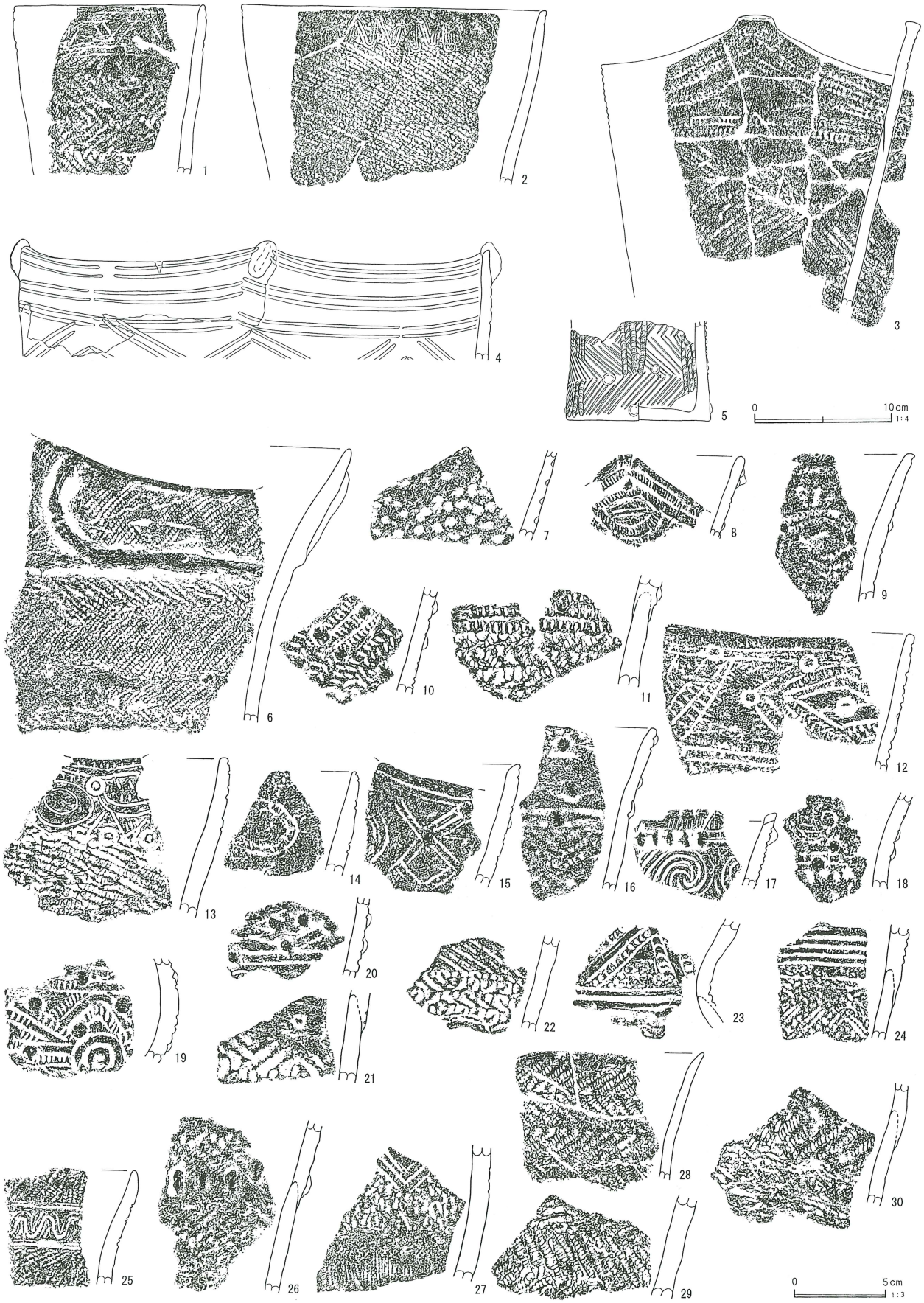
出土した９点のうち、図示し得たのは２点である。10は口唇部に臼歯状突起を配し、櫛状工具で描かれた口縁直下のコンパス文上に集合化した貼付文を追加する。また、11は、正反の合原体で羽状縄文を構成する。下位施文原体の末端が環状痕として印されている。

第160号土壙（第446図）

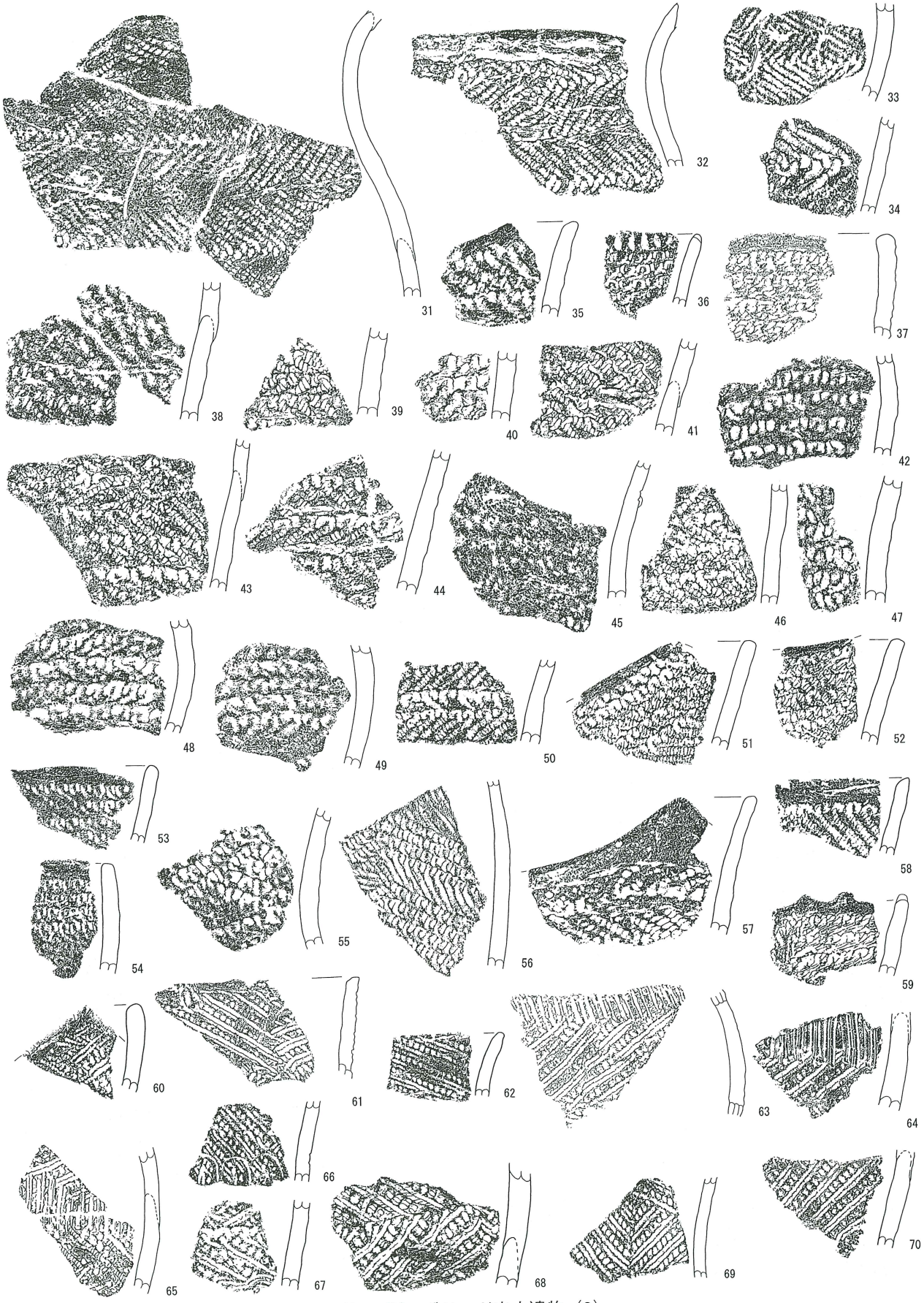
Ｖ－47グリッドで検出した。径２ｍ内外の比較的大型の土壙である。平面形はほぼ円形となるが、壙内は東方に傾斜する片流れとなる。覆土は、暗褐色系の土が主体だが、深い方では焼土・炭化物が目立った。そして、第447図12の同一個体大型破片をはじめ、二ツ木期の土器の出土量が62点と多いことから、同期の竪穴住居跡の炉跡、あるいはそれに類するものである可能性が強い。

第160号土壙出土土器（第447図12）

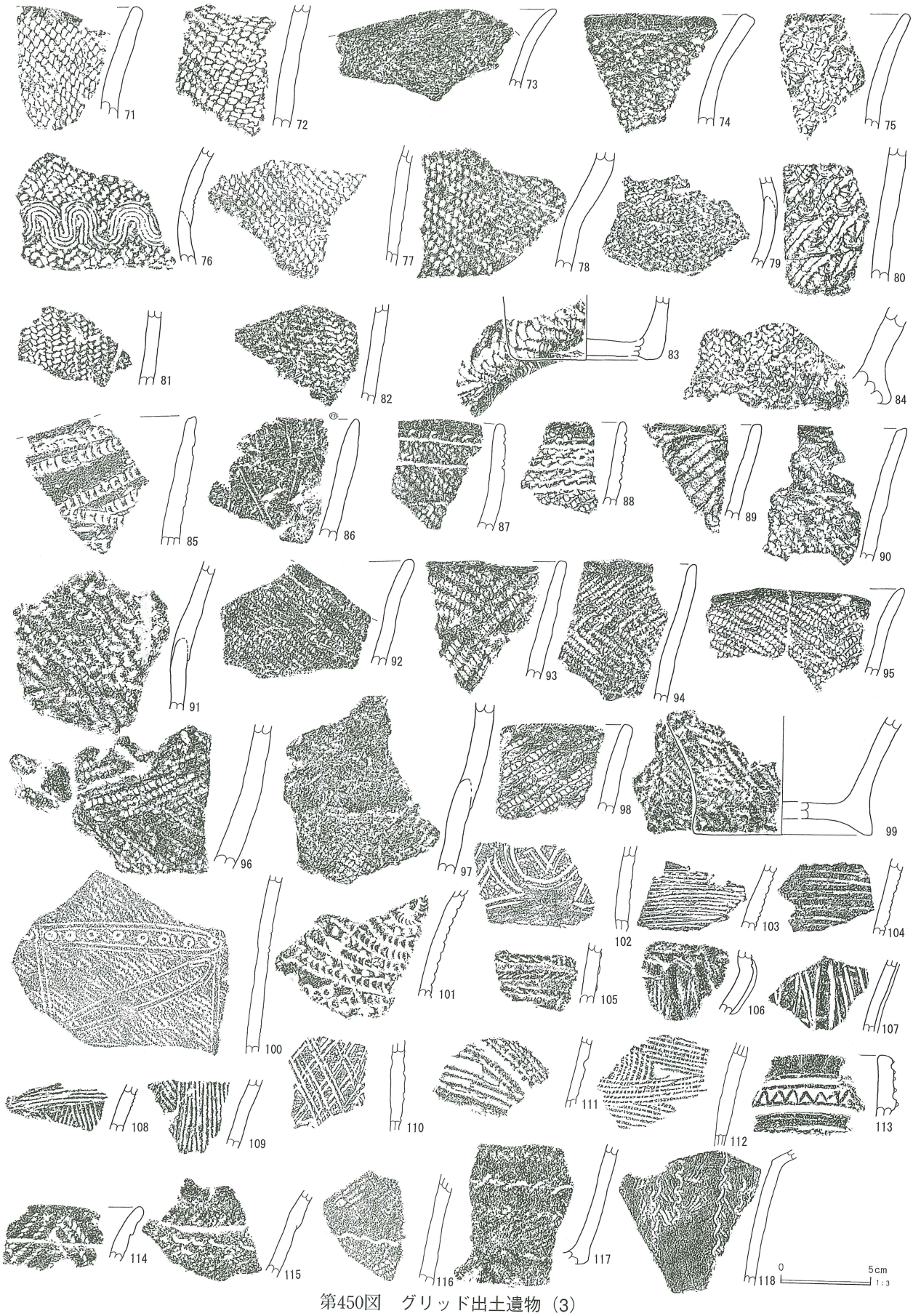
土器は第447図12の１点を示した。同番は、口縁直下と文様帯加減の区画線を２～３本の細隆帯で表現する個体である。波頂は双頂となり、器形線にあまりくびれは見られない。点状文様は、細隆帯区画線上に貼付文、文様帯内の一本引き梯状沈線の余白に円形竹管文と使い分けられている。胴部文様は左右撚りの環状末端が交互に押捺され、目立たないが帯間羽状を成している。



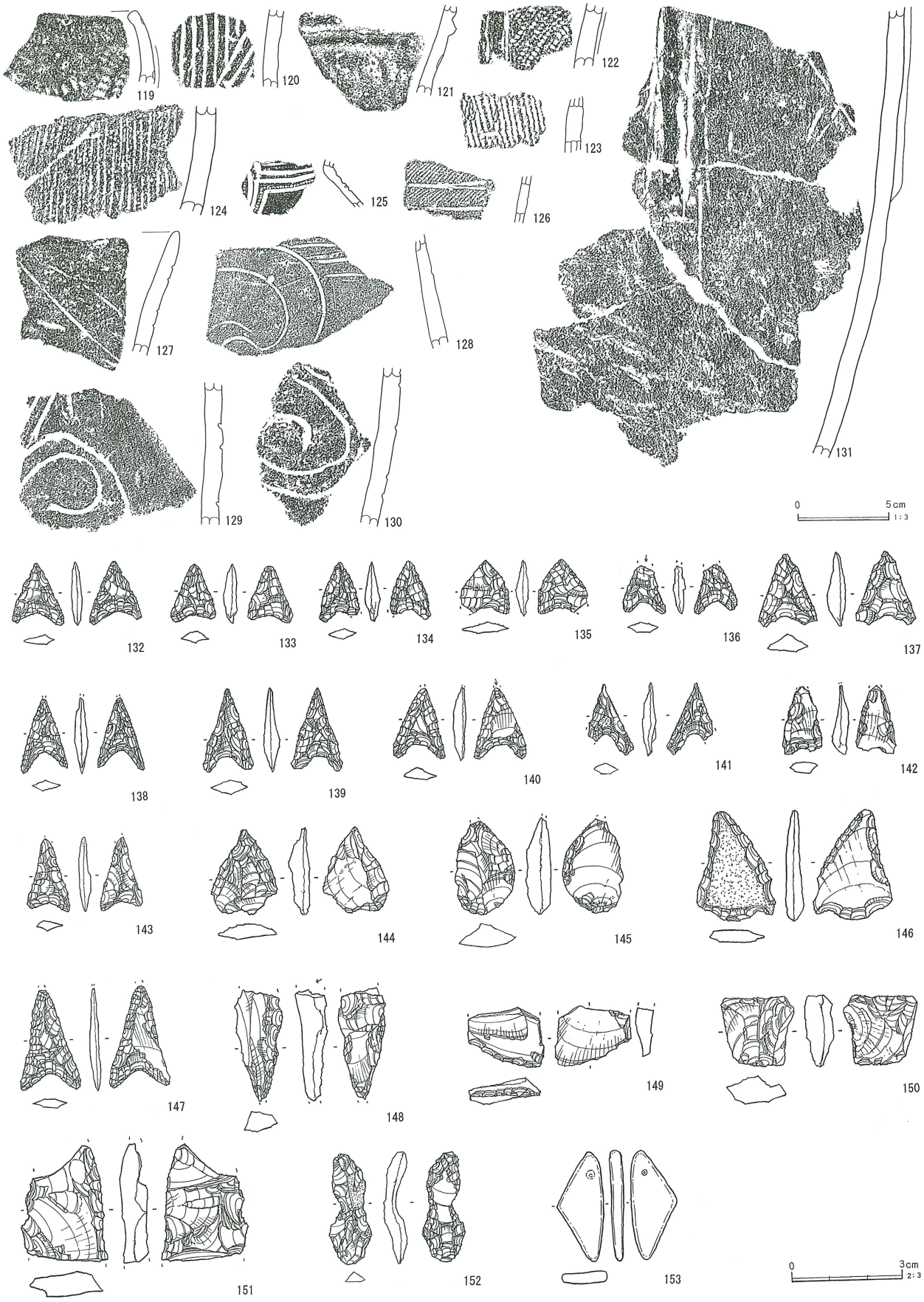
第448図　グリッド出土遺物（1）



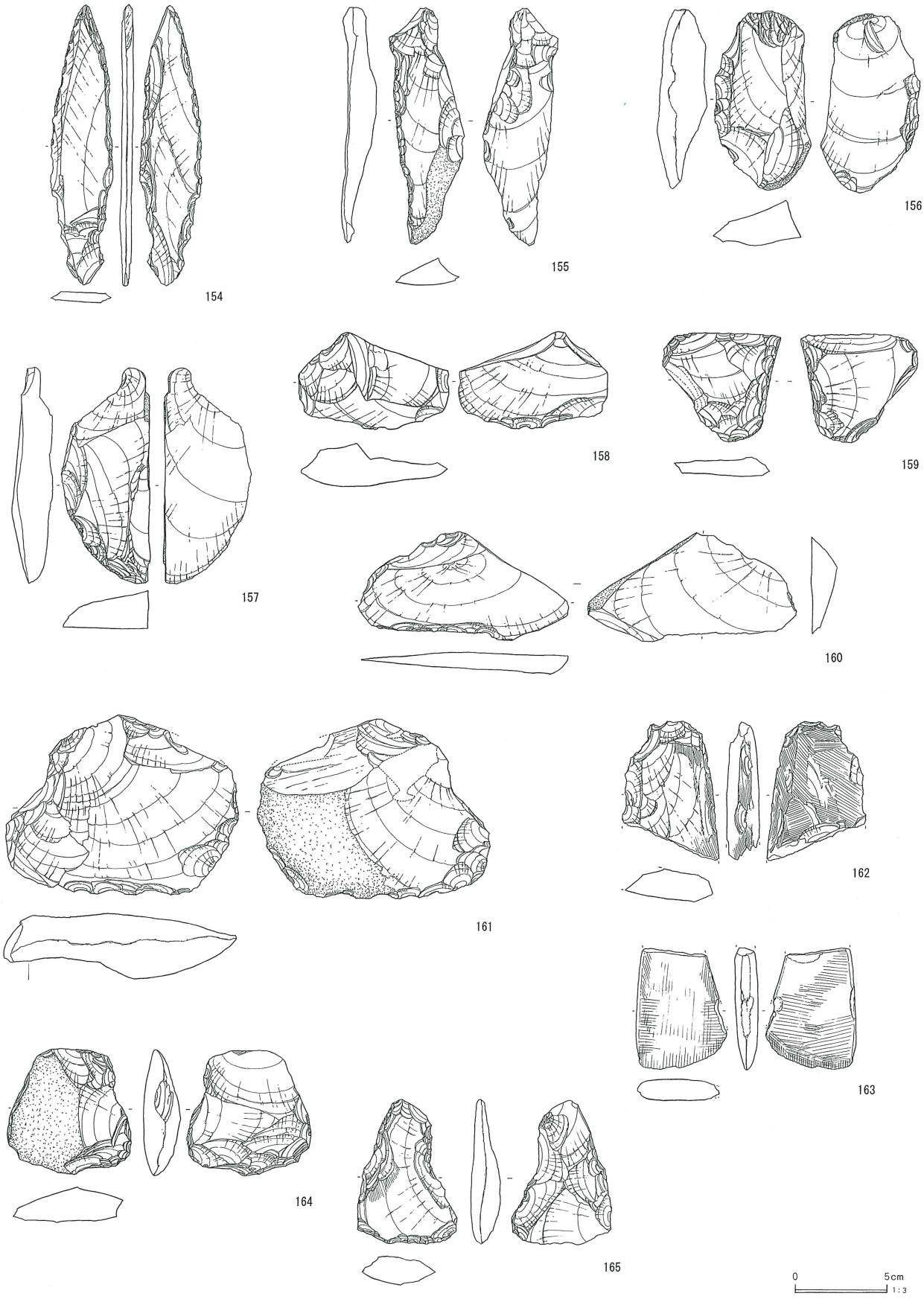
第449図　グリッド出土遺物（2）



第450図　グリッド出土遺物（3）

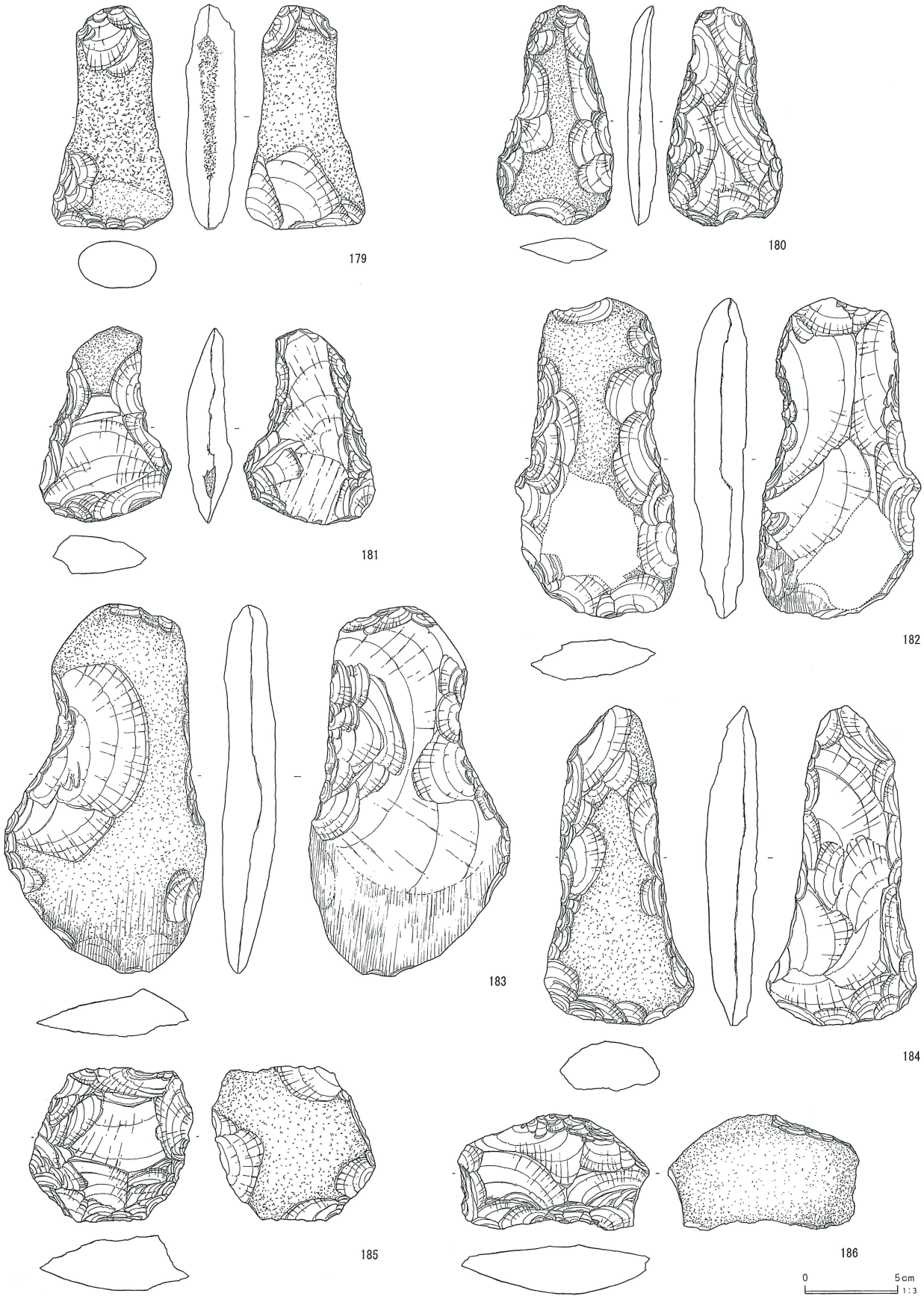


第451図　グリッド出土遺物（4）

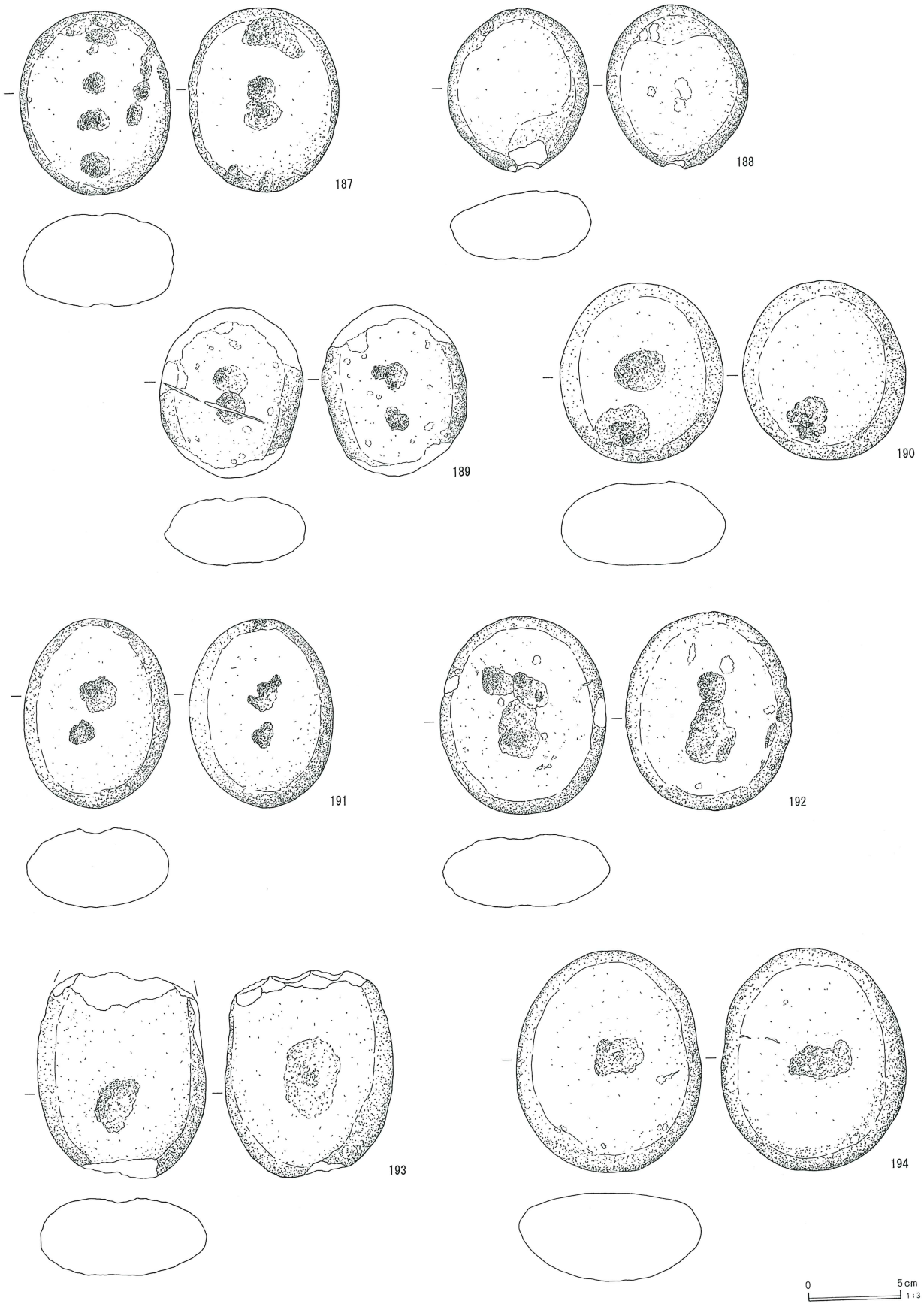


第452図　グリッド出土遺物（5）

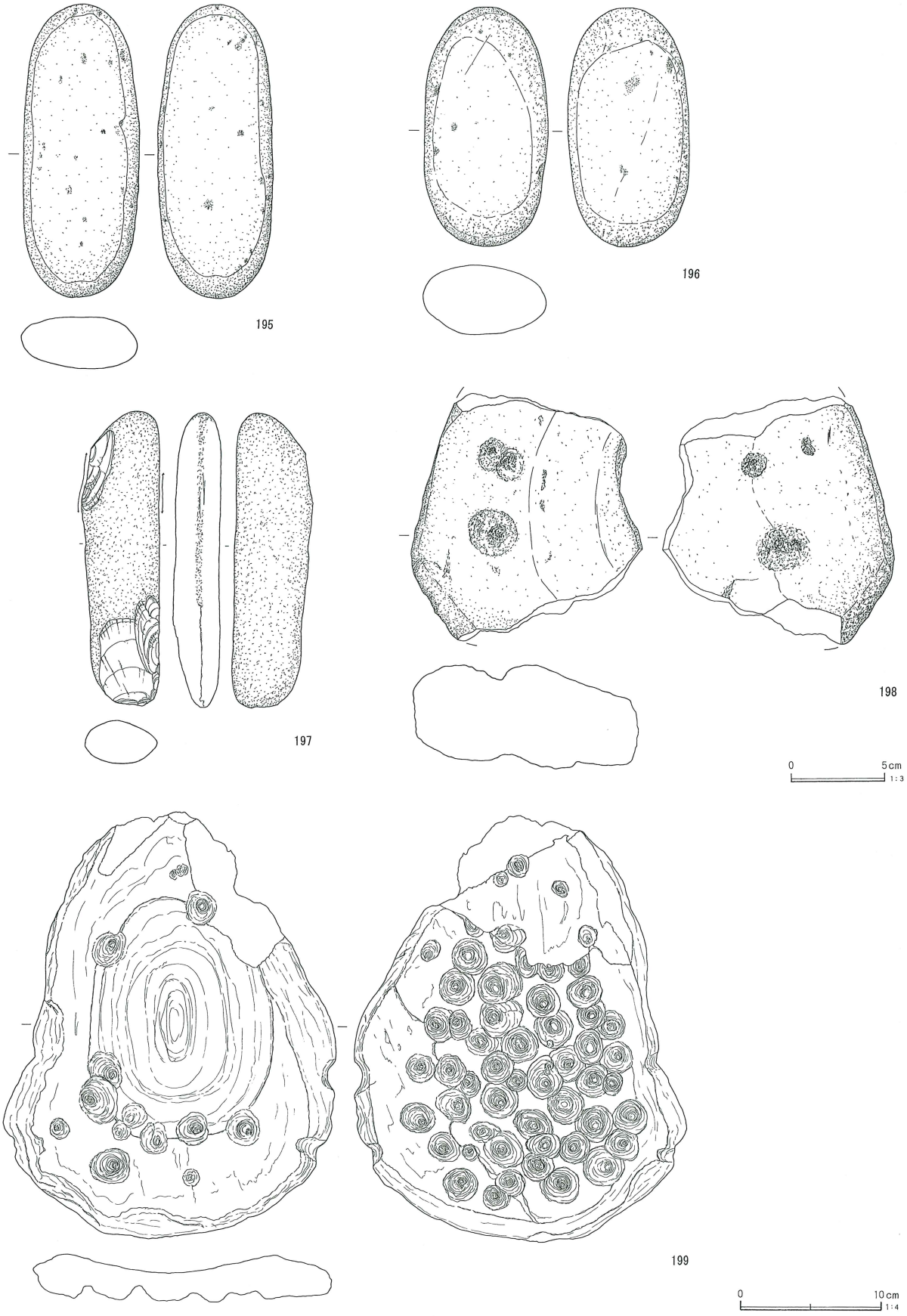
第453図　グリッド出土遺物（6）



第454図　グリッド出土遺物（7）



第455図　グリッド出土遺物（8）



第456図　グリッド出土遺物（9）

第308表　グリッド出土石器観察表

番号	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材	備考・出土位置
132	石鏃	1.7	1.4	0.3	0.5	黒曜石	ＳＢ5Ｐ-4
133	石鏃	1.6	1.2	0.3	0.5	チャート	ＳＪ168
134	石鏃	1.6	1.1	0.3	0.5	チャート	ＳＪ159・160・176
135	石鏃	1.5	1.4	0.3	0.5	黒曜石	ＳＫ163
136	石鏃	1.3	1.2	0.3	0.3	黒曜石	ＳＪ159・160・176
137	石鏃	2.0	1.6	0.5	1.1	チャート	ＳＢ5Ｐ-4
138	石鏃	2.0	1.3	0.3	0.6	チャート	ＳＪ266
139	石鏃	2.2	1.4	0.4	0.8	メノウ？	ＳＪ280
140	石鏃	1.9	1.4	0.4	0.6	赤色チャート	ＳＪ195
141	石鏃	2.0	1.2	0.3	0.4	黒曜石	ＳＪ175
142	石鏃	1.8	1.0	0.3	0.7	黒曜石	ＳＪ162・164
143	石鏃	2.0	1.6	0.3	0.5	頁岩	ＳＪ89
144	石鏃	2.3	1.8	0.4	1.8	チャート	ＳＪ197
145	石鏃	2.5	1.6	0.7	2.4	黒曜石	ＳＫ204　未製品か？
146	石鏃	3.0	2.1	0.3	3.1	黒色頁岩	河川跡ＣＣ41　未製品か？
147	石鏃	2.7	1.6	0.3	0.9	黒曜石	ＳＪ168
148	石錐	2.9	1.3	0.5	2.7	チャート	ＳＪ101
149	スクレイパー	1.6	2.0	0.5	1.7	黒曜石	ＳＤ52ＥＥ50
150	ピエス	1.9	2.0	0.8	9.1	チャート	ＳＪ263床下土壙
151	スクレイパー？	3.2	2.4	0.7	6.0	チャート	ＳＪ290
152	異形石器	3.0	1.2	0.3	1.5	黒曜石	ＳＪ303
153	装飾品	3.0	1.3	0.3	1.7	片岩	ＳＥ5
154	尖頭器？	14.8	3.3	0.6	40.5	頁岩	Ｖ56
155	スクレイパー	12.5	4.0	1.4	54.4	頁岩	表採
156	スクレイパー	9.5	5.1	2.5	124.1	ホルンフェルス	ＳＪ62Ｐ-1
157	スクレイパー	11.4	4.7	2.2	114.7	頁岩	ＳＪ32
158	スクレイパー	5.1	8.0	2.3	74.5	ホルンフェルス	ＳＪ89
159	スクレイパー	5.7	6.3	1.1	47.8	頁岩	ＳＪ103
160	スクレイパー	6.7	11.3	1.0	86.6	安山岩	ＳＪ111
161	スクレイパー	9.5	12.4	3.5	364.8	頁岩	ＳＪ1
162	磨製石斧	7.3	5.2	1.7	93.1	緑色岩	ＳＪ227
163	磨製石斧	6.4	4.9	1.2	42.2	安山岩	ＳＪ135
164	打製石斧	6.7	6.6	1.9	96.4	頁岩	Ｗ44
165	打製石斧	7.7	5.4	1.5	53.8	頁岩	ＳＪ52
166	打製石斧	8.7	5.1	1.8	103.3	安山岩	ＳＴ1
167	打製石斧	8.9	5.3	1.9	88.5	頁岩	方形区画溝
168	打製石斧	8.1	5.5	2.2	98.7	頁岩	ＳＪ82
169	打製石斧	8.6	5.6	5.1	124.1	頁岩	ＳＥ5
170	打製石斧	8.1	5.6	1.5	79.1	砂岩	ＳＫ107
171	打製石斧	10.8	5.4	1.6	116.9	ホルンフェルス	ＳＪ197　未製器
172	打製石斧	8.6	5.2	1.9	105.6	頁岩	ＳＪ82
173	打製石斧	10.5	5.8	2.9	218.5	ホルンフェルス	ＳＪ30
174	打製石斧	9.1	4.3	2.3	105.3	頁岩	Ｓ55
175	打製石斧	10.6	6.3	1.5	130.3	安山岩	ＳＪ1　ＳＴ1
176	打製石斧	8.9	7.8	2.5	165.5	黒色ガラス質安山岩	表採
177	打製石斧	9.5	5.9	2.6	235.0	頁岩	ＳＤ20
178	打製石斧	11.0	7.9	1.8	208.4	頁岩	ＳＪ87
179	打製石斧	11.8	6.4	2.7	260.9	片岩	方形区画溝
180	打製石斧	11.6	6.3	1.3	114.3	頁岩	Ｙ56
181	打製石斧	10.3	7.0	2.0	162.9	頁岩	ＳＪ223・224
182	打製石斧	16.9	8.7	2.6	483.0	ホルンフェルス	方形区画溝
183	打製石斧	19.5	10.8	2.6	656.0	安山岩	方形区画溝
184	打製石斧	16.9	8.0	2.7	377.0	片岩	Ｘ51
185	礫器	8.1	8.8	2.9	219.0	ホルンフェルス	ＳＸ33・34・35(粘土採掘坑)
186	礫器	6.1	10.2	2.6	161.3	頁岩	Ｘ51
187	磨石	9.7	8.0	4.8	547.2	安山岩	ＣＣ42　表裏両側面に敲打による使用痕あり
188	磨石	8.7	7.5	3.5	173.8	安山岩	方形区画溝

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考・出土位置
189	敲石	9.0	7.7	3.5	338.3	安山岩	ＳＪ230　磨面、表裏面中央敲打による凹みあり　側面敲打による剥離か？
190	磨石	9.4	8.7	4.4	459.9	安山岩	ＳＪ182　表裏面に敲打による凹みあり
191	磨石	10.0	7.7	4.3	462.7	安山岩	ＳＪ185　表裏面に敲打による凹みあり
192	磨石	10.4	8.8	3.8	394.3	安山岩	ＳＥ12　表裏面に敲打による凹みあり
193	磨石	10.8	8.9	4.0	535.5	安山岩	ＳＪ92　表面に敲打による凹みあり
194	磨石	11.7	9.8	4.7	749.3	安山岩	Ｖ54　表裏面中央に敲打による凹みあり
195	磨石	15.3	6.1	2.6	383.5	砂岩	ＳＪ210
196	磨石	12.5	6.5	3.6	414.8	安山岩	ＳＪ26
197	敲石	15.4	4.2	2.5	236.0	片岩	W44
198	敲石	13.0	12.2	5.2	1016.6	安山岩	ＳＪ18　石皿を転用か？
199	石皿	29.9	23.5	3.3	2809.8	片岩	ＩＩ50　表面石皿と凹み石に使用、裏面凹み石として使用

3．グリッド出土遺物

グリッド出土土器（第448～451図１～131）

遺構外および古墳時代以降の遺構中より出土した。縄文時代の遺物は土器が主体である。製作時期は、前期前半羽状縄文系から後半の竹管文系、中期の勝坂・加曽利Ｅ系、そして、後期前葉の堀之内系までばらつきがあるが、竪穴住居跡の主体期である前期前半の所産が抜きんでており、他の時期は少数が出土したにすぎない。

主体の羽状縄文系は、１～４・６～99で、６・７が住居跡構築期より先行する花積下層期の様相を色濃く残すもの、また、３・４・85～99が黒浜式および同期の上越地域の特徴を示す土器である。

６は、横帯幅の広い帯間羽状構成縄文を地文とし、口縁部に太い隆帯を貼付し上位を区画する。口縁部は低く波打ち波頂は単頭となるものである。また、７は円形刺突文を全面に施すもので、刺突に規則性は見られない。

一方、１・２・８～84は、広義の関山式に含まれるもので、１・８～19は口縁部文様帯を設定する器種である。主幹線は細隆帯（８～11）、一本引き沈線（１・12～14）、竹管施文沈線（15～20）で描かれており、細隆帯は区画線上に貼付文、一本引きは主幹線の結節点に円形竹管文、そして、竹管では結節点を中心に貼付文が追加されるものが多い。

口縁部以外に特殊な文様帯を設定するのが21～27である。25の口縁下を除き、成形接合部の違和感を覆い隠すために設けられたもので、23～25は関山Ⅱ式の工具施文法を用いている。

単節縄文をもっぱら施す破片（28～58）のうち、28～30は、羽状を成しながらも帯間強調の末端変化が印されないもので、31～34は第一種結束によってつながれた左右撚りの原体痕が羽状を構成する。

これに対し、35～58はループ文を印すもので、その構成法から、幅狭等間隔（35～50）、異間隔（51～56）、幅広単段（57・58）に細別できる。異間隔の大部分は器面の一部に鋸歯状ループ帯を設定するものであり、水平区画となると、三者の見分けがつかないものも存在する。ここでは環部の大小も分類の目安とした。また、59は環状部を撚った後に反方向に撚り戻した原体の圧痕である。これが意図的に行われたのかどうかは判断できない。

60～70は、いわゆる正反の合原体の圧痕を集めたつもりだが、反縄がより深く印された破片も多い。これは正反縄を合する作業時の力加減にもよるので附加条法との分離は困難である。ここでは紛らわしいものも一括している。

２・71～79は、組紐の意図的な組み違え原体を回転したもので、71・72は北東北で「ピッチリ縄文」と称される圧痕と類似する。その他は、関東的な疑異節であり、複節、あるいは０段多条単節に類する圧痕はない。

80は第二種結節部、81・82は組紐の回転痕で、83

は第一種結束羽状縄文、84は組紐文が印された底部片である。

黒浜式土器、およびこれに並行する大型菱形文系列の土器は4・85～99が相当するが、大型菱形文系の構成が認められるのは爪形文の85と平行沈線の4に限られる。前者は波頂に合わせた4単位構成となるだろうが、後者は多単位となる菱形に加え、緩やかな波頂下に縦位貼付文が加えられるなど、大型菱形文系構成の後葉に相当する。

工具文が加えられるのは他に86～88がある。86は鋸歯文が関山式からの系譜をひく手法であるものの、口縁下の縦位線列帯は信州系の構成を彷彿させる。また、87・88は、縄文地に前者が爪形文、後者が支点移動を繰り返す平行線が口縁下にめぐるもので、括れ部にもう一帯平行線帯を設ける平縁土器と考えられる。

縄文のみを施すものは89～99を示したが、89～91は無節斜縄文を施文している。92～97の単節斜縄文と同様、素材とした繊維、原体の太さや撚りの程度、そして、0段の条数もまちまちである。98は順方向に細い繊維束を附加した原体を使用しており、99はこの期にしてはしっかりとした上げ底の底部である。

一方、前期後半の資料は、100の諸磯a初頭期から中期初頭にさしかかる118まで、時期のまとまりがなく出土している。100は黒浜期の枠状文の変形で、沈線が楕円構図化している。また、101は諸磯a後半の爪形文土器、102は同期の木の葉文系の構成である。103・104は、線間が密なことから105の浮線文系構成と共存する諸磯b期の平行沈線系構成キャリパー形深鉢と考えられる。

前期末ではおおよそ3種類の様相が認められる。5・106～110は諸磯c期の所産で、106・107は縦位貼付文を加える上位部分、108・109はその下位部分か貼付文がない個体と考えられる。また、5はみみず腫れ状とボタン状の貼付を併用する双渦巻き構成の下位だろう。対して、110は、粘土の特徴などからして、これらと並行する東関東系の格子文と思われる。

111～113は十三菩提系の系列で、前二者はそれぞれ爪形・スリットを加えた平行線文で渦巻きを主構図とした文様を描く。集合線間の余白は印刻されている。113は細隆線で口縁下の横位文様帯を描出する。胴上半がふくらむ器形となるだろう。

114～118は縄文のみが施文されるもので、114は1段の縄を輪積み痕残る口縁下に押圧し、鋸歯文帯を作り出す。また、115～117は横位施文単節縄文に第一種結節部の回転痕を加えている。118も同じ結節回転文が印されるが、こちらは縦位施文である。破片上位の外折は内面に稜線が認められるほどはっきりしており、五領ヶ台期に至ってからの製作と考えられる。

前期土器にくらべ、中期・後期の所産は極端に少なく、出土したほぼ全点を図示した。119～124が中期の土器で、119は隆帯脇をまばらな爪形で飾った鋸歯文帯の口縁部である。また、120はパネル文系の器種の充填文と思われる。121は阿玉台系土器で、断面三角の横位隆帯と下位の刻みが残っている。122～124は加曽利E系前半の土器で、122はキャリパー形土器の縦位隆帯部、123・124は撚糸文のみが破片内で観察できる。

後期は堀之内系が中心で、125は注口土器か小壺、126は単純開口の精製深鉢である。対して、127～131は称名寺系の名残をとどめる粗製系大型深鉢で、雑な線引きで渦巻きやX字を描く。131はX字だけでなく、器面単位を分割する縦位隆帯が加えられている。また、128は、上位の横線帯を加味すると、外反する口縁が無文となる甕形土器の肩部かも知れない。

Ⅵ 結語

1．縄文時代

1．縄文時代前期の集落について

今回の調査で発見された縄文時代の住居跡18軒は、すべて前期の前半に構築されたと判断した。調査区と周辺地形から推すると、住居跡集中域は検出できたものの、より東南部には、さらにいくつかの住居跡が埋もれていると考えられる。

埼玉県で発見されている前期前半の遺跡は、貝塚群の形成に象徴されるように、主に古東京湾域の県南部に偏り、北部ではわずかな例が知られているにすぎなかった。

そのような中、本遺跡周辺は報告例が多く、同じ遺跡で関山Ⅰ期の住居跡が岡部町教育委員会により報告されている（佐藤1983）。また、本遺跡と一連の開発地内に所在する大寄遺跡Ⅰ区では関山Ⅰ期の住居跡が（富田2000）、そして同遺跡Ⅱ区と沖田Ⅰ遺跡では黒浜前葉期の住居跡が１軒ずつ発見されている（福田2002）、（木戸1998）。

しかし、同町内では、本遺跡から北東２㎞に所在する四十坂遺跡で関山Ⅱ期の住居跡が４軒検出されたにすぎない（今村2003）。また、近隣域に転じても、今回の調査に匹敵する集落の発見は熊谷市三ヶ尻林遺跡で黒浜中葉期の集落が12軒（昼間1984）、小谷を挟み20を超える黒浜前葉期の住居跡が調査された寄居町むじな塚・東原遺跡（今関1990他）など、黒浜期に偏っていた。

近年、大宮台地でも北端に近い行田市馬場裏遺跡で関山Ⅱ期の住居跡10軒が調査され、遺構の密度から、短期間に数十軒規模まで拡大した集落跡が想定されている（西井2004）。

たが、利根川を隔てた群馬県側の太田市間之原遺跡（宮田1981）・賀茂遺跡（藤巻1984）など、さらに広域に目を向けても、縄文時代前期前半の集落は、小川町八幡台（黒坂1999）や群馬県赤堀町五目牛南組遺跡（山口1992）など少数の例外を除き、その後半が圧倒的であった。

それらの点からすると、今回の調査は、縄文時代前期前半の埼玉県北部に関する限り、最大規模の発見といえるだろう。

今回発見された住居跡の構築期は、花積下層末期から黒浜期まで、幅が広い。各住居跡については、出土土器がない第173号・第196号を除き、本文中で想定される構築期を示した。

さらに詳しく確認すると、埋設土器から花積下層末期と判断できる第129号住居跡、重複するが近い時期と考えられる第131号を皮切りにこの地の利用が始まり、埋設土器を備えた二ツ木期の第148号・第193号・第202号・第269号を経て、同じく土器が埋設された第305号の関山Ⅰ期に至る。

二ツ木期の住居跡は覆土の遺存が悪く、埋設土器が唯一の検討材料である。第148号の炉埋設土器は頸部刺突列が前代の手法を残すことから、大宮台地南部の貝崎第１段階（黒坂1984：註）と認められる。そして、他の住居跡の埋設土器はループ文の構成法からみて、貝崎第２段階、また、第305号は、結束・結節縄文が残るなど、関山Ⅰ期でも古相の貝崎第３段階に位置づけられる。

二ツ木期の中でも貝崎第１段階に先行する新田野段階に相当する住居跡は発見されなかった。しかし、第129号住居跡埋設土器の施文手法は新田野段階のそれに近く、同住居跡の住民が訪れた後、第305号の廃絶まで、この土地は同じ景観のもとに利用されていたと見なしてよいだろう。

また、次の貝崎第４段階の住居跡も、確定できるものがない。最も近い様相を示す住居跡には第126号があげられるが、地文を有し工具文が単独で施文される口縁部主幹文様や、組紐系の原体が占める比率から、関山Ⅱ期初頭、すなわち貝崎第５段階でも前半にあたると考えられる。

加えて、第５段階では第270号・第273号・第318号住居跡があげられる。第273号などは出土点数が少ないものの、地文をもつ口縁部文様帯における主幹文様の構図、組紐系施文の出現率などからして、大きな誤りはないだろう。

広義関山期集落の最後となるのが貝崎第６段階にあたる第33号・第298号である。この２軒は今回発見した前期住居跡のなかでも遺物の出土量が多く、この廃屋に遺物を投棄した住民の行先が問題になる。至近で発見され、時期判定が困難な第173号が候補の一つだが、確定できない。

いずれにせよ、これ以後、ループ文を伴わない菱形縄文構成の完形土器が出土した黒浜期の第118号住居跡・第317号住居跡が造営されるまで、この地は空白となる。ちなみに、もう一軒の黒浜期住居跡と判断した第203号住居跡は、波頂下に縦位区画が加わる横位工具文構成の個体から、黒浜期でも中段階に構築されたと考えられる。

集落としての継続性を持つ広義関山期に戻ると、前述の通り、時期判定が困難な２軒の住居跡に対する憂いはあるものの、今回発見の広義関山期を中心とする集落は、花積下層末期から関山Ⅰ期初頭までの第一期と関山Ⅱ初頭から中葉に至る第二期があるということになる。

両者の間隙はわずかだが、これを境として炉に完形土器が埋設されなくなる。また、少数ながらも集落の継続期間に多くの土器変化を経験した第一期に対し、第二期は変化が少ない間に多くの住居跡が営まれ、急減した集落形成の特徴がある。

これら前期住居跡群の分布は、一見したところ、径70ｍほどの円形か楕円形に分布するようにみえる。しかし、出土土器をもとに位置関係をたどると、広義関山期の第一期と第二期、そして黒浜期では、その占地に大きなちがいが見てとれる。

宮西を訪れた前期の人々は、先ず調査区の北側に居住を開始する。その後、貝崎第２段階に至るまで、漸次西に移動する。初期の住居跡のほとんどは、結果的には直線的な分布となっている。

ところが、同じ第２段階ながらもこれらとは離れて第269号が、そして、第３段階の第305号は、一転、調査区の南部に進出している。

第269号は、埋設土器の文様構成を見る限り、北群の第193号や第202号と同段階に思える。しかし、炉の掘込みが主軸を意識しつつ、長方形の竪穴の一方に偏り、逆に埋設土器は炉の反対側にずれている。これは、第193号・第202号やそれ以前の炉が、竪穴内でも不安定な位置にあり、しかも埋設土器が炉跡の中心に据えられているのとは異なり、むしろ次に続く第305号と共通する。

広義関山期に典型的な長方形住居跡の確立過程からすると、第269号は、貝崎第２段階の３軒の住居跡のなかでも最後に構築されたと判断できる。

今回調査区での住居構築は第305号住居跡を最後にここで一旦幕を閉じる。さらに、調査区の東端から50ｍほど離れた岡部町教育委員会の調査区域で同じ段階の住居跡が発見されている。つまり、第一期の末には今回の調査区域から脱するような居住地の拡散化が見てとれるのである。

今回の調査で欠けていた貝崎第４段階の住居跡は、500ｍ離れた大寄遺跡Ⅰ区で発見されている。調査区の範囲と地形からみて、この住居跡は単独で終始したと考えられる。居住者が宮西集落を祖とするかの保証はないが、採集・消費資源の独占領域の問題も加味すれば、その可能性は高い。

となると、前段階に生じた遺跡内での拡散指向が高じ、宮西遺跡を離れたとも想定できる。その点では貝崎第４段階の住居跡が今回の調査区で発見できなかったのは当然なのかも知れない。

次いで、関山Ⅱ期の貝崎第５段階になると、今回の調査区域で安定した居住が再開される。だが、住居跡の分布は今度は調査区でも南西に偏り、結果的には弧状に近い分布となる。

第一期と展開域が違うのは、前代の拡散化と絡め、環境変化などで拠り所とする傾斜地をかえた

とも想定できる。この分布差と、住居跡の形態的特徴からすると、出土土器がなく、廃絶期が不明であった2軒の住居跡は、第196号が第一期、第173号が第二期に相当する可能性が強い。

第二期の集落は、土器編年上は短期間で膨張・縮小を経験する。その後しばらくは、一連の遺跡群が所在する榛沢地域では、その行方を見ることができなくなる。だが、前述したとおり、直後にあたる井沼方段階の集落は、2㎞ほど北東に離れた四十坂遺跡で見つかっている。

こちらも宮西集落の系譜とは限らないが、井沼方段階を迎えて急激に膨張し、すぐに終焉を迎える集落の消長は、馬場裏遺跡や井沼方遺跡、間之原遺跡などに共通する。このような展開は、古東京湾域でも多くみられ、宮西遺跡や、似かよった集落の消長をたどる富士見市打越遺跡（小出1978他）などの長期継続型集落を継承する普遍的な類型として留意しつつ、広義関山末期における生活・社会の変化を紐解く必要があるだろう。

2．縄文時代前期の土器について

今回の調査では、多くの前期住居跡を調査したが、覆土の遺存状況に恵まれなかったものが多い。なかでも、前項で第一期とした広義関山前半期の住居跡の大半は、埋設土器だけがかろうじて遺存している状態のものが多く、廃棄土器を包含する覆土がほとんど存在しなかった。

したがって、出土量が多く、文様要素比などの対比ができるのは関山Ⅱ期の住居跡に限られている。また、この期の住居跡の調査例が多い奥東京湾域に比較すると各遺構での混在率も高い。やっかいなことに、混在品の時期が住居の埋没期に比較的近いだけに、本来の帰属品を見極めづらい。

関山Ⅱ式土器のなかで特徴的なのが、第433図1のような、多段ループによる鋸歯状の文様構成である。この構成は、貝崎第3段階に普遍化した異なる縄文施文帯の配列を背景に南東北地方から移入されたものである。

福島県双葉町宮田貝塚（竹島1975）や福島市獅子内遺跡（鈴鹿1999他）の一部に見られるように、関東の二ツ木期に相当する時期に多段ループ文の一部を磨り消すことから開始されたこの手法は、次の時期には鋸歯文化した上で、胴部から口縁部文様としても転化し、工具文に置換される。

これに対し、関東への波及は、ほとんどが発生の経緯を色濃く残す胴部に終始するものの、ループ帯間の斜縄文を磨り消さず、地文としている。当初は多段ループと斜縄文帯の交互配置のなかに、斜縄文帯の横帯幅を崩さぬ範囲で移封されたが、後に独立し、胴部の特殊文様帯として扱われる。

本遺跡の資料も同様で、第403図7・第433図2など、鋸歯帯の幅が広いのが特徴である。第443図1のように、鋸歯施文で不揃いとなる斜縄文部を覆うため集合竹管文を加え、文様帯を形成する発展型も存在する。また、第429図5のように、集合竹管沈線とともに口縁部に転化することもあるが、横位区画線を設ける例はなく、あくまで関東在来の口縁部文様とは区別されている。

同じく、奥東京湾域との大きな差は、単節斜縄文の構成法のちがいである。単節構成の比率は、例えば、同じ段階でも武蔵野台地の方が大宮台地にくらべてループ文による施文帯間強調が少ないなど、古東京湾域でも微妙な差異が認められる。

しかし、宮西遺跡では、武蔵野台地をさらに増幅した傾向が現れた。これは、関山Ⅱ期の住居跡だけでなく、関山Ⅰ期にあたる第305号住居跡や岡部町調査の住居跡、大寄遺跡Ⅰ区の住居跡でもその傾向があることから、関東西部域の地域相と認めることができる。ループ文を好まなかった神ノ木式土器の縄文構成を加味すれば、その分布圏に近づくほどに傾斜を強めるのは自明である。

さて、今回の調査では、第33号住居跡からその神ノ木式土器も出土している。類似の文様が施文された資料は、これまで県内でも数点出土したことはあるが、小片か、主分布域である松本平付近の資料とは異なる趣を漂わせるものであった。

あくまで肉眼観察の限りだが、今回の出土資料は、繊維の有無・混和砂粒などの点で、直接の搬入とはいわないまでも、同式土器製作の伝統を継承する圏内からもたらされたと考えている。

神ノ木式土器の主分布域では、その成立まで、関東の繊維土器を補完しつつも、東海・関西方面と連携するいわゆる中越式とその直系の土器を主体的に製作していた。西日本系の土器は、無文地に点と線で横位展開の文様を描く。東日本の縄文施文土器とは、文様の構造的なちがいから、相互交換は不可能であり、容易に識別できる。

中越系列の土器の出土例は関東では希であり、その疑いがある破片が貝崎貝塚で報告されているにすぎない。つまり、関山Ⅰ期までの土器移動の方向は、東から西に限られていたことになる。

その圧倒的な影響下で、従来の成形法を保ちつつも、縄文施文を模倣したのが神ノ木式土器である。当然、東日本の縄文施文土器が共有する追加成形施文法は存在しない。以前より多くの土器が流入し、関東との頻繁な交流はあったはずである。それでも、文様施文法が東日本型に近づきはじめて、要素次元の相互交換が可能となった。

相互交換で象徴的なのは、櫛状工具と束の縄の利用である。描画の頻度、また、前代の土器群が点や線列による構成が基本であったことは、神ノ木式が櫛状工具を主体的に保持した裏打ちとなる。これにより、関山Ⅱ式土器の一要素である同工具によるコンパス文は、神ノ木式の描出手法で既存の構成を置換したことが証明できる。

また、第33号と第298号住居跡の接合帯にめぐる刺切文は、その描出線の多さと視覚的に上下方向を強調する意図から、支点を大きく上下移動させる櫛状工具によるコンパス文の代替えとして施文されたものと類推できる。

逆に、神ノ木式に特有とされる束の縄による施文は、関東の組紐系原体利用の影響のもと、その擬似施文具として考案されたことが縄文施文の伝統的経緯を背景に説明できる。

関山Ⅱ期を端緒に成立した「櫛状工具圏」に対し、櫛状工具を欠く常磐地域では、ループ文の比率が高く、奥東京湾域が組紐系施文に傾斜した後も単節斜縄文を主体に多段ループ文による文様構成を長く保持しつづける。

このような土器文様にみる地域圏の再編は、「櫛状工具圏」では土壙の普遍化や乳棒状磨製石斧をはじめとする石器の定形化などと共に進み、前期後半以降にみる地方圏の固定化へと進む。

そのような経緯を加味すれば、同時期の遺跡が数多く分布する古東京湾域と、関東北西部から上信州地方を対比する中間相を示す地理的位置において、大がかりな地方圏再編の胎動期にあたる時期の資料を数多く追加できたことも、今調査での成果としてあげることができるだろう。

（註）　貝崎貝塚での細分は、羽状縄文系土器の単節縄文の構成が花積下層期に特有の幅広等間隔から幅狭化した段階を広義関山式の初頭とし、「新田野段階花積下層式土器」（下村1981）を主体とする時期にあてた。この期を含め、幅狭等間隔の構成を主体的に保持する期間を二ツ木期とし、新田野期を含めて３細分した。しかし、同貝塚で新田野期の住居跡は発見されず、続く中段階から順次段階名をあてた。つまり、新田野期から貝崎第２段階までが二ツ木期ということになる。さらに、関山Ⅰ期は貝崎第３・第４、関山Ⅱ期初頭を第５、そして、次の第６段階をさいたま市井沼方遺跡（小倉1980他）で特徴的な、組紐文が隆盛する段階の直前にあてた。したがって、関山Ⅱ期は貝崎第５・第６、井沼方の３段階となる。

2．土器の様相

本項では、古墳時代から平安時代にかけての土器の様相について概観する。基準としたのは土師器坏類と甕である。本遺跡の特徴として奈良時代以降においても須恵器が少ないことがあげられ、灰釉・緑釉陶器も比率は低いことから、これらについては搬出遺物として提示するにとどめる。

0期

本遺跡において集落として捉えられる萌芽期にあたるものである。遺構は特定できないが、住居跡の新旧関係から第47号住居跡などが考えられる。遺物は極端に少なく、脚部が「ハ」字に開く器台の破片が出土している。

Ⅰ期

第2・37号住居跡に代表される。器種は、碗、坏、高坏、坩、甕、壺、甑が見られる。

碗は、球状の体部で、口縁部との境がないもの、球状の体部で口縁部が外側に屈曲するもの、平底で底径が大きく、体部は内湾して立ち上がり、口縁部は大きく開くものが見られる。

球状の体部で、口縁部との境がないものは、第2号住居跡と第280号住居跡に見られる。第2号住居跡25は平底で半球状の体部から口縁部はそのまま内湾する。器壁は厚い。第280号住居跡1は丸底で器壁が薄く作られていること以外は、体部や口縁部は第2号住居跡例と殆ど変わらない。

球状の体部で口縁部が外側に屈曲するものは、碗の中で主体をなすものである。第2・37号住居跡に見られる。第2号住居跡のものは小さな平底で、体部は半球状である。口縁部は短く外方に屈曲する。第37号住居跡のものは外面底部中央が窪み、体部は直立気味に立ち上がる。口縁部の屈曲は第2号住居跡のものより弱い。両住居跡とも大型と小型が見られ法量分化している可能性がある。

平底で底径が大きく、体部が内湾して立ち上がり、口縁部が大きく開く碗は第64号住居跡2が該当する。

坏は、小型で平底の底部から体部は直線的に立ち上がる。中村氏（1999）の「元始坏」にあたる。第1号住居跡11は、平底で体部はやや内湾気味に立ち上がり口縁部は肥厚する。第64号住居跡4は、底径が大きいが器高は第1号住居跡例とほぼ同じである。

高坏は、脚が「ハ」字状に開き、裾部が屈折するものでいわゆる「和泉型」の高坏と有段高坏が見られる。第37号住居跡では貯蔵穴から小型甕、碗とともに14個体の高坏が一括出土している。

脚が「ハ」字状に開くものは、数量的に高坏の主体となっている。第37号住居跡5のように脚の開きがやや大きく、裾の屈曲が弱いものもあるが、殆どは脚が中膨れ気味になり裾の屈曲が強い。坏部は、底部と体部の境に稜をもち断面が逆台形を呈するものと、箆削りされて稜を残さないものがあり、後者が多数を占める。口縁部は殆どが丸みを帯びる。

有段高坏は、第37号住居跡3のように坏部の段が明瞭でないものがある。口縁部は第1号住居跡1のように角張るものや、第2号住居跡8のように口唇部が内側に強く屈曲するものがある。また、第37号住居跡2は脚中位に孔が3箇所開けられている。

甕は、資料が少ないが、第2号住居跡で出土しているものは球胴のものである。口縁部は「く」の字状を呈し厚めの器壁から口唇部はやや薄くなる。

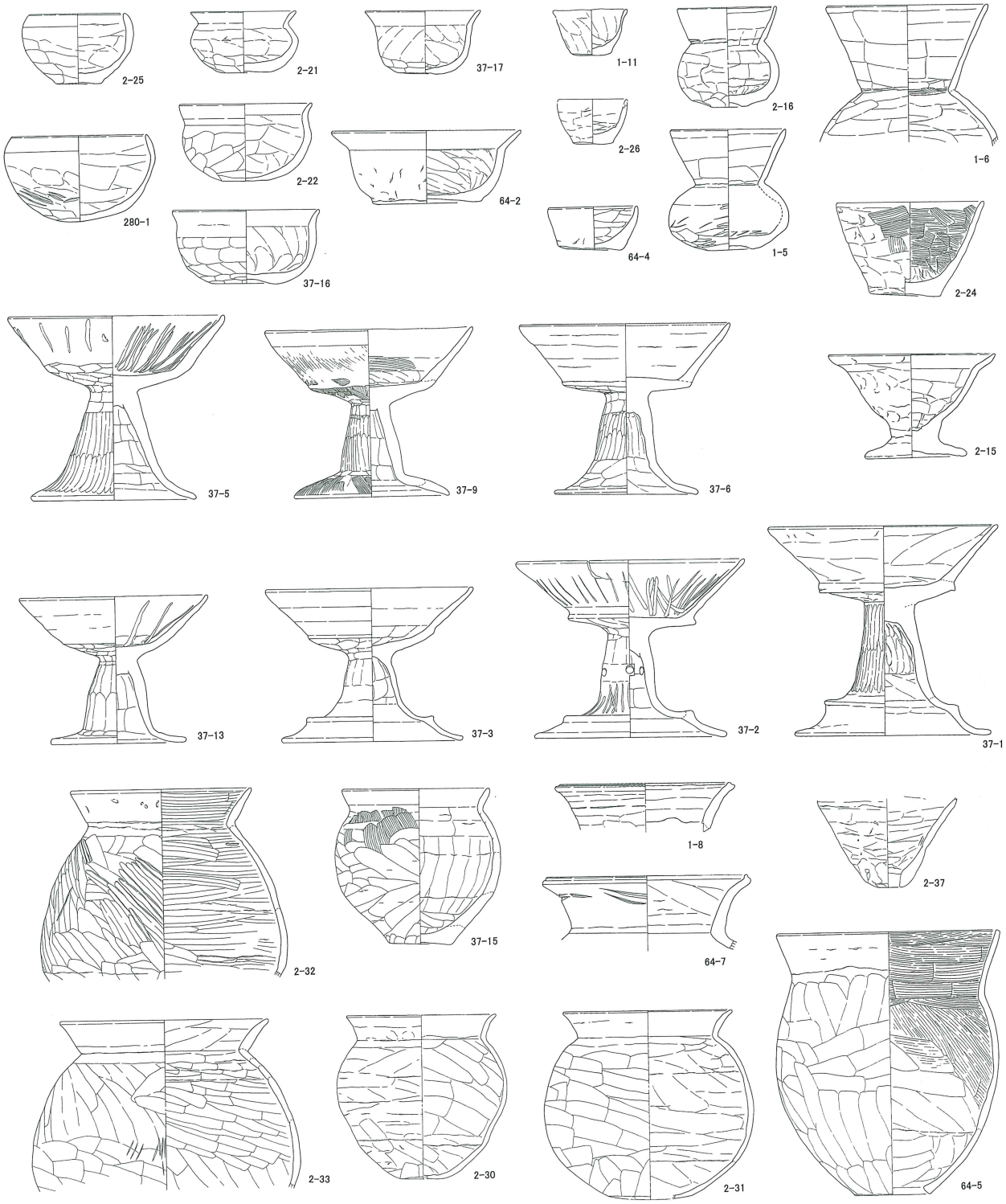
小型甕は球胴であるが、底部が丸底気味のものと、平底で突出しているものがある。

壺は、全体がわかるものはないが、口縁部は外反して立ち上がり、口唇部形態は断面が角張るものや口唇部内側を屈曲させるものなどがある。

坩は、胴部が球状を呈するものと、胴部が扁平なもの、大型のものが見られる。

胴部が球状を呈するものは、第2号住居跡16を充てておくが、胴部は本来の球胴ではなく、器壁は厚い。口縁部は短くやや内湾しながら立ち上がり、口唇部は丸く作られる。底部外面は窪む。

Ⅰ期



第457図　宮西遺跡Ⅰ期の土器

胴部が扁平なものは、第１号住居跡５、第２号住居跡17などがある。胴部は所謂算盤玉形を呈する。底部外面は窪む。第２号住居跡のものは口縁部を欠失しているが、第１号住居跡例は口縁部が長く、直線的に外傾して立ち上がり、口唇部は細く鋭い。

大型のものは、第１号住居跡で１点出土している。下半を欠いているが胴部は球状と思われる。口縁部は長く直線的に外傾して立ち上がる。口唇部は丸い。

甑は、甕形で口縁部が外反するものと小型で鉢形のものがある。

甕形で口縁部が外反するものは、第64号住居跡から完形で出土している。口縁部は外傾気味に立ち上がりやや長い。口径と胴部径はほぼ同じである。

小型で鉢形のものは、第２号住居跡から出土している。口縁部を欠くが、底部は小さく逆三角形を呈する。

Ⅱ期

器種はⅠ期に引き続き、碗、坏、高坏、脚付碗、坩、甕、壺、甑が見られる。坏では、所謂「元始坏」は検出していないが、新たに平底の底部から体部は直線的に外傾し、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる、中村氏の「原初坏」に相当するものが加わる。他に碗形の土器に脚を付けたもので、従来、脚付鉢と呼ばれているものが見られる。

碗は、球状の体部で、口縁部との境がないものと球状の体部で口縁部が外側に屈曲するものがある。平底で底径が大きく、口縁部が大きく開くものは未検出である。

球状の体部で、口縁部との境がないものは第71・161号住居跡から出土している。第71号住居跡３は丸底ではあるがやや平底に近く、体部から口縁部にかけての内湾は弱い。この他に半球状の体部から内湾せずに口縁部となるものがある。第210号住居跡８、第316号住居跡４などで底部中央は僅かに上げ底気味になる。前者は内面に篦磨きが施される。

球状の体部で口縁部が外側に屈曲するものは、引き続き量が多く主体となっている。小型は口縁部が短くなり、屈曲も弱くなる。大型は従来のものが引き続き作られるが、体部の湾曲が弱くなり開いてくるものが見られる。形態が多様化してくるものと思われる。

坏は平底の底部から体部は直線的に外傾し、口縁部がほぼ垂直に立ち上がるものと須恵器坏蓋模倣坏が出現する。小型で平底の底部から体部が直線的に立ち上がるものは未検出である。

所謂「原初坏」は一定の量が認められ、球状の体部で口縁部が外側に屈曲する碗とともに共膳具の中で高い比率を持つ。器高の低いものと高いものがあり、第210号住居跡６・７のように口縁部の立ち上がりが短いものも認められる。

須恵器坏蓋模倣坏は第188号住居跡２が該当する。

高坏は脚が開くものや柱状のものなど、多様な形態が見られる。坏部も口縁部が外反するもの、第210号住居跡18のように口唇部が肥厚するもの、第161号住居跡５のように口唇部が内側に僅かに屈曲するものがある。また、第210号住居跡19のように坏部の口径が小さくなり、深身のものが見られる。

有段高坏は第210号住居跡で出土している。脚はⅠ期より短くなり、口唇部は角張るものが多い。

脚付碗は、第210号住居跡で１点出土している。体部は碗Ⅲ類を深くしたような器形である。脚は短めで裾部は屈曲する。

甕は、球胴のものが主体で、長胴の甕が僅かに見られる。

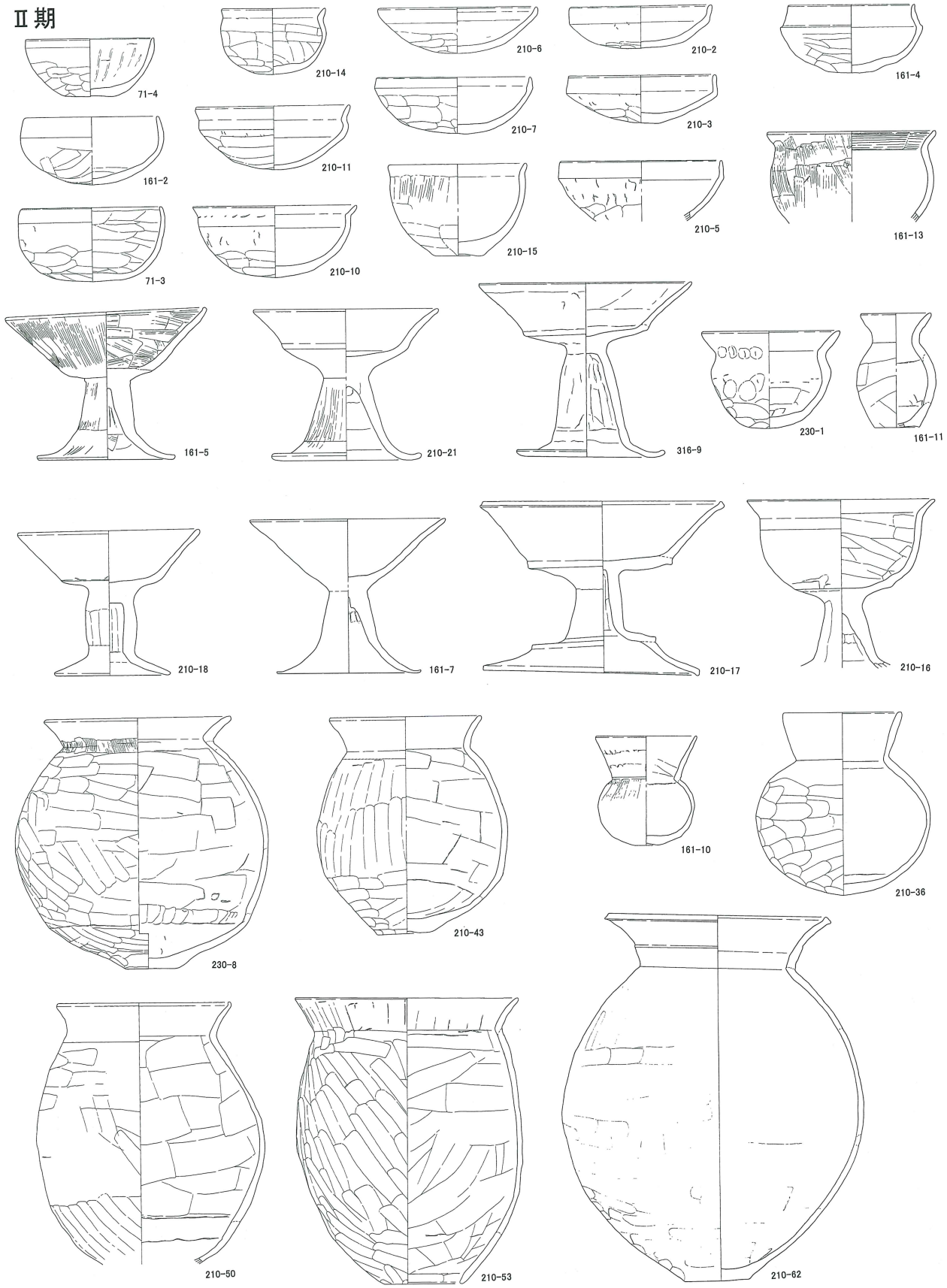
球胴の甕は、口縁部は「く」の字状であるが、器壁は厚く僅かに外反する。

長胴の甕は第210号住居跡で小数見られる。最大径が胴部下半にあり、50は口唇部が内側に小さく屈曲する。

小型甕は資料が少ないが、第210号住居跡で大型の甕をやや小ぶりにしたようなものがある。

壺は、第210・316号住居跡で口縁部が外反して立ち上がり、口唇部が角張るものが見られる。

有段口縁のものは、第210号住居跡で見られる。



第458図　宮西遺跡Ⅱ期の土器

口縁部外面の下半に、ナデ調整によって弱い段を作り出している。61は大型の壺で口縁部は外傾して立ち上がる。口唇部は僅かに外反し、丸く作られている。口縁部外面の段は、他のものよりも明瞭である。胴部は最大径が下半にある。

第210号住居跡のでは、口縁部は受け口状を呈し、大きく外側に開いてから外傾して立ち上がる。口唇部は丸く作られる。

口縁部が直立気味のものも第210号住居跡の破片資料である。小型の壺で6は球状の体部から口縁部はやや外傾して直線的に立ち上がる。口唇部は丸い。37は口唇部が僅かに内屈する。

坩は、胴部が球状を呈するものと大型のものが見られる。

胴部が球状のものには、第161号住居跡10を充てる。Ⅰ期と同じく、胴部は本来の球胴ではない。口縁部は直線的に外傾して立ち上がる。底部の窪みはⅠ期より浅い。

大型のものには、第210号住居跡36がある。口縁部は短く、直線的に外傾して立ち上がる。口唇部は丸く、器壁は厚い。胴部はやや扁平な球胴で、底部は丸底である。

甑は、甕形で口縁部が外反するものが第210号住居跡で出土している。口縁部はⅠ期より短く、胴部は長くなっている。孔内面は篦削りによって斜めに調整される。

Ⅲ期

第58・85号住居跡などが該当する。器種は碗、坏、高坏、脚付碗、坩、甕、壺、甑が見られ、組成に変化はない。

碗は球状の体部で口縁部との境がないものは、平底、丸底ともに見られる。両者とも器高が低くなり、平底は底径が大きくなる。体部が内湾して立ち上がり、口縁部は外反気味に直立するものが見られる。

口縁部が外側に屈曲する碗は前時期と同じく碗類の主体を占める。第85号住居跡で纏まって出土しており、Ⅱ期より口縁部が更に短くなる。

平底で底径が大きく、体部は内湾して立ち上がり、口縁部は大きく開く碗は、第107号住居跡4を充てておく。底部は上げ底風で体部は内湾し口縁部の開きは小さく短くなる。

坏は所謂「元始坏」と「原初坏」が見られる。須恵器坏蓋模倣坏は未検出である。

所謂「元始坏」は体部がやや外反しながら立ち上がり、口縁部は細く鋭い。

所謂「原初坏」はⅡ期と同じく口縁部が外側に屈曲する碗についで一定量見られる。第107号住居跡のように口縁部が外側に引き出されてから立ち上がるものや、器高が高く口縁部が内屈気味のものなど形態にばらつきがある。口縁部の立ち上がりが短いものもⅡ期同様に存在する。

高坏の組成は変わらない。

第314号住居跡の坏部が浅く底径が小さいものや、第55号住居跡の坏部の器高が深く口縁部が外方に内湾して開くものが見られる。また、第85号住居跡1のように坏部が箱型で脚が柱状のものも残るようである。

有段高坏は、坏部口縁部が外反し、口唇部は丸くなる。裾端部も同じように丸くなる。

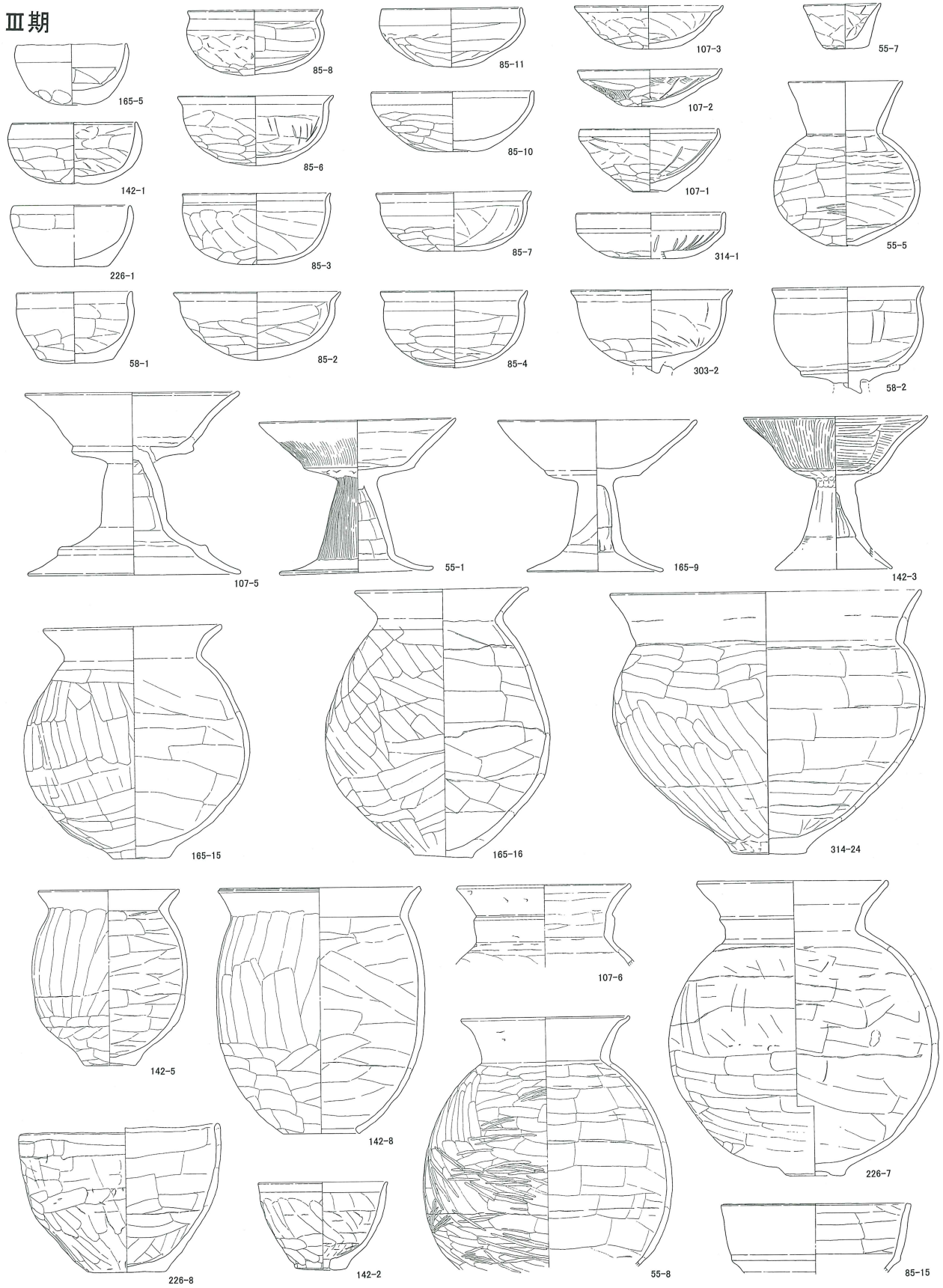
脚付碗は、第303号住居跡で1点出土している。外面下半は篦削りされ稜が消失し、丸底気味になっている。

甕は、長胴の甕が主体となり球胴の甕は減少する。また、本期には口径が非常に大きく、最大径が器高を越えるものが見られる。

球胴の甕はⅡ期の形態を引き継いでいる。

長胴の甕は、数量的に球胴の甕を上回り組成の中で安定した存在となる。第107号住居跡7や第165号住居跡16が典型的な形態である。口縁部は外反の度合いがやや大きくなる。底部は突出するものと、篦削りによって突出部の段を形成しないものがある。本形態は最大径が胴部中位に移行してゆく。

口径が非常に大きく、最大径が器高を越えるものは、本期に1点だけ見られる。第314号住居跡24は



第459図　宮西遺跡Ⅲ期の土器

口径が非常に大きく、底径比でも４倍以上となるため、必然的に最大径は胴部上位にあり不安定な形状となる。口縁部は長く、緩く外反する。

小型甕は、第55号住居跡、第142号住居跡などで出土している。最大径は胴部下半にある。

壺は、Ⅱ期に引き続き単口縁と、有段口縁のものが作られる。破片資料が多いが有段口縁が主体的に作られたと思われる。

単口縁のものは、第142号住居跡で球胴のものが出ている。第55号住居跡６は長胴化している。口縁部は外反して立ち上がり、口唇部は内湾する。

有段口縁壺は破片が多いが、口縁部形態は多様である。第226号住居跡７は球胴で、口縁部は段を境に上半が強く外傾する。底部は中央が窪む。第107号住居跡６は直立して立ち上がった後外反する。第165号住居跡18は緩く外反して立ち上がり、口唇部は直立する。外面の段は沈線状である。

第85号住居跡からは、一旦外側に開いてから長く直線的に外傾して立ち上がる口縁部が出土している。口唇部は角張っている。内外面とも丁寧なナデ調整が行われる丁寧な作りである。

坩は、大型のものが見られる。

第55号住居跡５は扁平な胴部で、口縁部は直線的に外傾して立ち上がり、口唇部はやや細くなる。底部は僅かに窪む。

甑は、大型で口縁部が外反するものは、第142号住居跡に見られ、形態はⅡ期と変わらないが、孔内面は篦削りされていない。第85号住居跡19は胴部内面に篦によるナデツケが行われている。

口縁部が短く外反するものには、第119号住居跡４がある。胴部下半が底部にむかって直線的であるのが特徴である。

第271号住居跡13は、口縁部の外反が弱く、最大径が口縁部にある。下半を欠失するが、胴部は筒状で口縁部は緩く外反する。

小型で鉢形のものは、第271号住居跡14がある。Ⅰ期のものより底径はやや大きく、立ち上がりも丸みを持って立ち上がる。口縁部は僅かに外反し口唇部は尖る。

Ⅳ期

器種は、碗、坏、高坏、脚付碗、甕、壺、甑が見られる。坩形は見られない。

碗の組成は変わらない。

球状の体部で、口縁部との境がなく平底のものが第212号住居跡にみられる。体部は内湾して立ち上がるが、口縁部は軽く外反して直立する。第315号住居跡７は大型で底部が突出する。体部から口縁部にかけては薄く作られやや古い様相を持つ。

口縁部が外側に屈曲する碗は体部の内湾の度合いが弱いものが増えてくる。第259号住居跡２や第212号住居跡3のように口縁部の屈曲が弱く、口縁部内面を斜めに調整しただけのものがある。

平底で口縁部が大きく開く碗は第212・315号住居跡で出土している。第212号住居跡７は器壁が厚く、底径が小さく口縁部の内湾も弱くなっている。

坏は、小型で平底の底部から体部は直線的に立ち上がるものは、浅く口縁部が平坦なものと、深く器壁が厚いものがある。

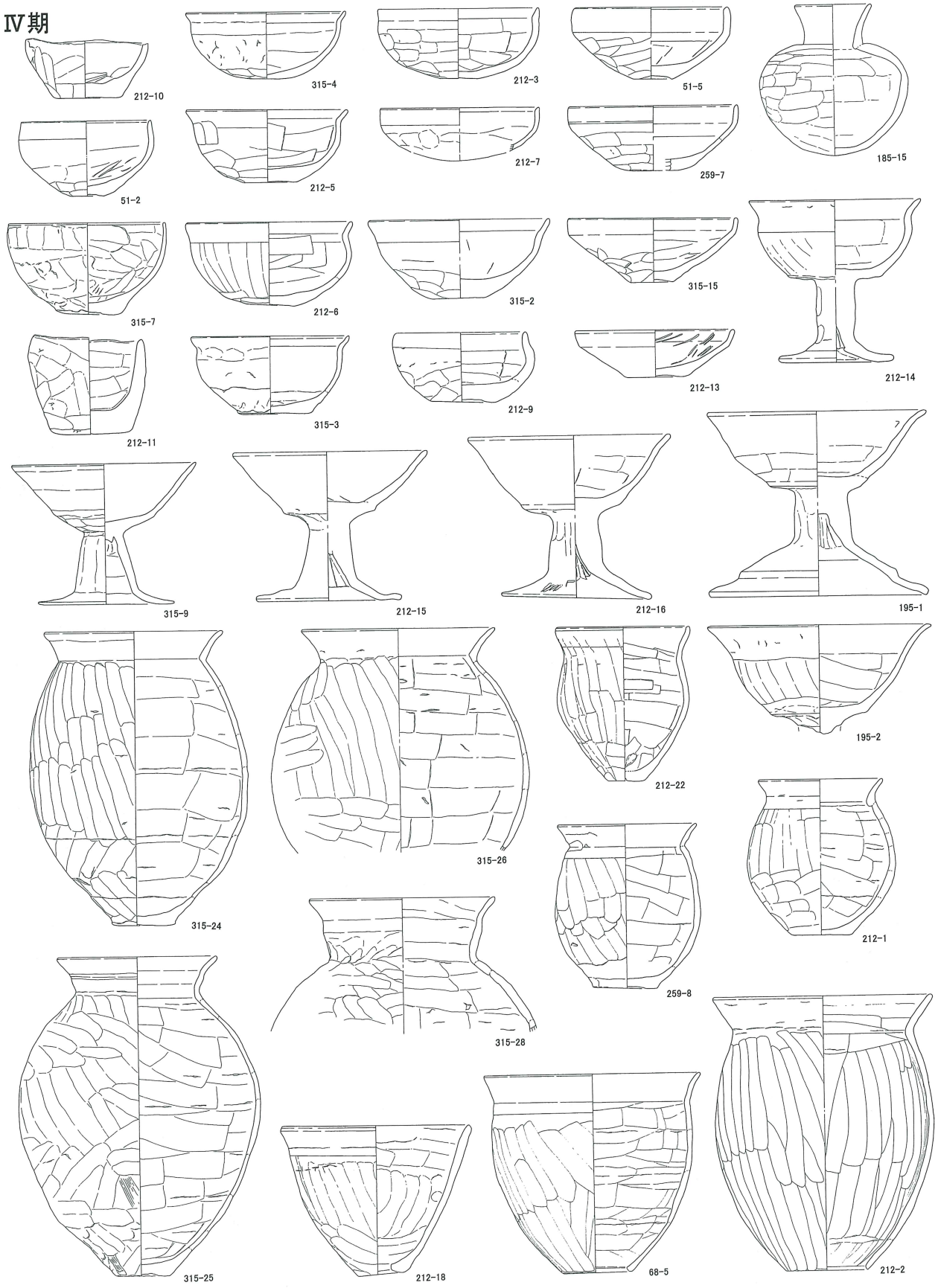
平底の底部から体部が直線的に外傾し、口縁部が立ち上がる坏は依然として一定量出土する。底部が小さく上げ底のものと、底部はやや大きめで平底と思われるものがある。

須恵器坏蓋模倣坏は破片であるが第315号住居跡２が該当する。内湾する体部から口縁部は直立し口唇部は内傾する。

高坏の組成は変わらない。脚の長さが短くなり、坏部は底径が更に小さくなる。Ⅲ期に見られた、坏部が深く口縁部が外反するものは、本期に坏部の深さが最も深くなる。第212号住居跡17や第315号住居跡15のように脚付碗に近い形態のものも現れる。

有段高坏も脚が短くなり、段は丸みを帯びて鋭さがなくなり、坏部は深くなる。

脚付碗は、第212号住居跡で１点出土している。体底部は平底で柱状の脚が付くが、口縁部の屈曲は



第460図　宮西遺跡Ⅳ期の土器

曲線的で鈍く、器壁は厚くなっている。

甕は、球胴のものは、まだ作られるが、客体的な存在となる。

長胴の甕は、Ⅲ期より長胴化が進む。長胴化の進行とともに最大径が胴部中位近くまで移行する。これは、成形の際に長胴化の処理を、底部から続く体部下段を高くすることによって生じた現象と考えられる。

小型甕は、第185号住居跡で球胴のものがまだ見られるが、大半は長胴である。大型品と同じく最大径が胴部中位に移りつつある。

壺は、単口縁のものは、出土数が少なく客体的な存在になると思われる。第315号住居跡29は胴部がやや長胴化しているものと思われる。口縁部は外反し口唇部は角張っている。

有段口縁の甕は、Ⅲ期と同じように口縁部の形態が多様である。第315号住居跡35のように口縁部が大きく外反し、段も明瞭に作られるのがある一方で、25は沈線状の表現となり、28は口縁部全体がＳ字状の曲線となっている。

折り返し口縁の甕が、第315号住居跡で口縁部破片が１点出土している。

口縁部が直立するものは、第185・315号住居跡で出土している。第185号住居跡のものは、Ⅱ期の第210号住居跡例の延長上にあるものと思われる。

甑はⅢ期に引き続いて同様のものが作られる。

大型で口縁部が外反するものは、第51号住居跡５が該当する。形態は変わらないが、口唇部が丸く作られている。第68号住居跡では小型のものが出土している。

口縁部が短い甕は、第58号住居跡３が該当する。形態はⅢ期の特徴を引き継ぐがやや細身である。

口縁部の外反が弱く、最大径が口縁部にあるものは、第153号住居跡７が該当する。器面調整以外形態的には殆ど変わらない。

小型で鉢形のものは、第212号住居跡18が該当する。器壁はやや厚く口唇部はごく僅かに外反する。

Ⅴ期

Ⅴ期は土器の型式からⅣ期との間に大きな隔たりが窺える。本期における土器の変化は僅かであるが、住居跡の重複関係から３期に細分した。

Ⅴ－１期

第177号住居跡に代表される。器種は、坏、高坏、鉢、甕、壺、甑が見られる。

坏は須恵器坏蓋模倣坏だけである。体部は既に浅くなっているが、口縁部は長く、直立して立ち上がり、口唇部が外反する。他に体部が深く鉢形を呈するものが見られる。

高坏は、模倣坏に脚を付けたものである。これとは別に第229号住居跡からは和泉型の高坏の坏部に短い脚の付いたものが出土している。第229号住居跡は他に遺物がなく住居跡との重複もないことから時期判断が難しいが本期に考えておく。

鉢は、底部を欠失しているが、体部は内湾して立ち上がり、口縁部が短く強く外反するものと、体部が緩く内湾し、口縁部も緩く外反するものがある。

甕は完全に長胴化している。最大径は胴部下半にあり、底部は突出する。口縁部は「く」の字状に軽く外反する。胴部の調整は縦方向の箆削りである。

壺は、口縁部が一旦直立してから外側に開く。口唇部を直下を両側から絞るようにしているものが見られる。

甑は、引き続き大型のものがある。口縁部は強く外反し、体部下半から底部にかけて急激に細くなる。

Ⅴ－２期

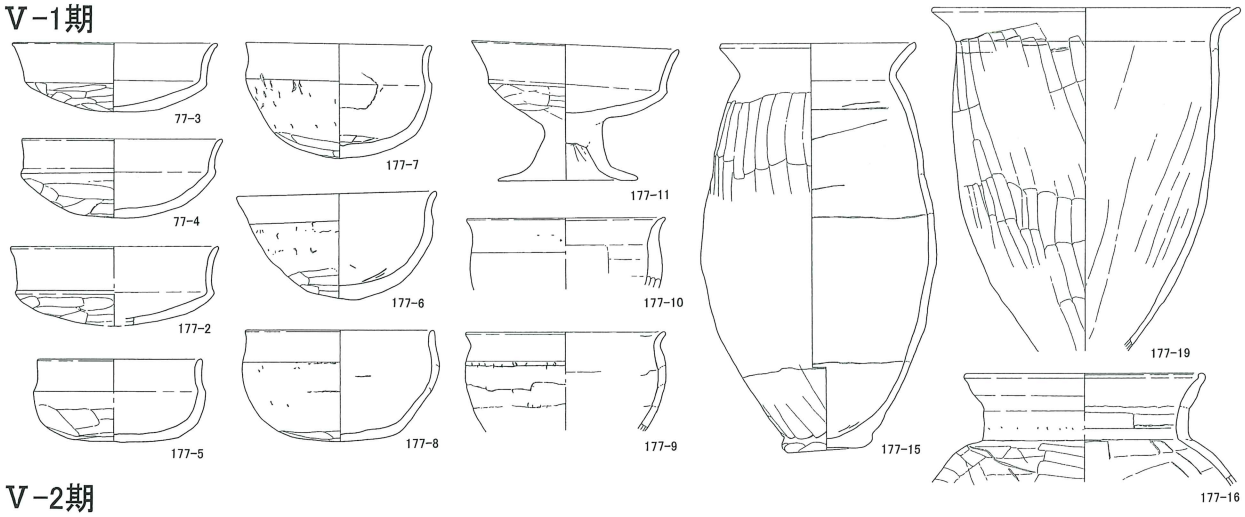
第312号住居跡に代表される。器種は、坏、甕、甑が見られる。

坏は、須恵器坏蓋模倣坏と須恵器坏身模倣坏が見られる。

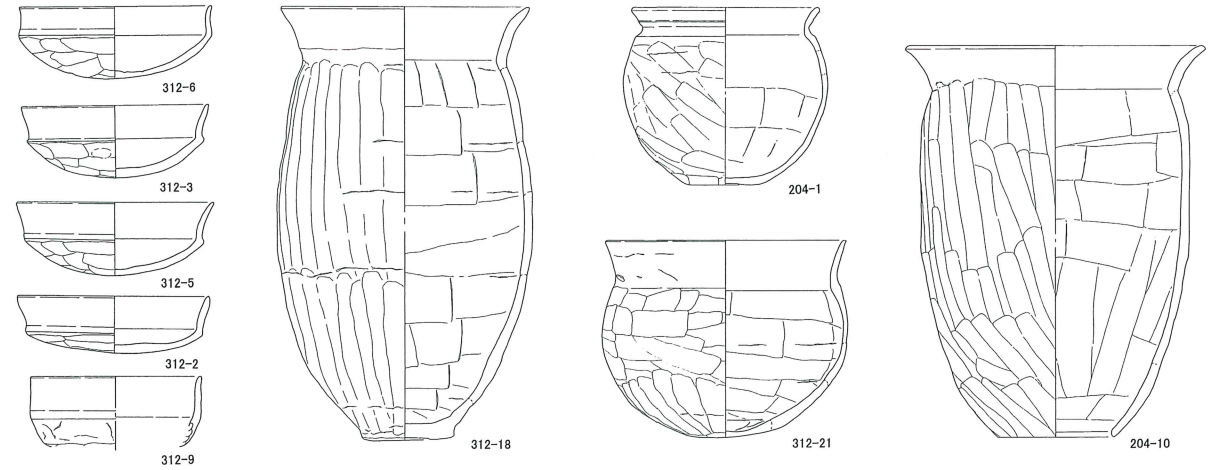
須恵器坏蓋模倣坏は口縁部の外反が弱くなり、立ち上がりの外傾が強くなって外側に開いてくる。

須恵器坏身模倣坏は第236号住居跡で纏まって出土している。体部は浅く口縁部は短くなっている。口唇部は丸く作られる。

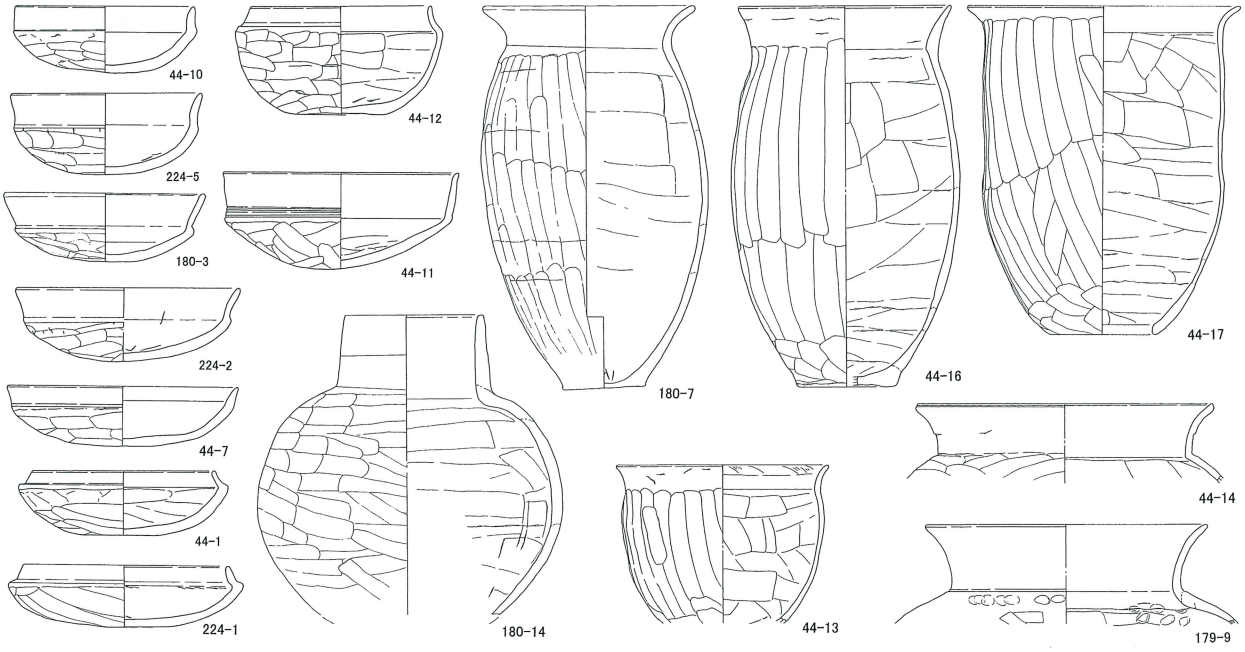
Ⅴ-1期



Ⅴ-2期



Ⅴ-3期



第461図　宮西遺跡Ⅴ期の土器

甕は基本的に変わらないが、最大径がやや上にあがるようである。

小形甕は基本的に長胴の甕の高さを詰めたものと考えてよいが、第312号住居跡21のように口径が非常に大きいものも見られる。

壺は良好な資料がないが、胴部の張りが弱くなるようである。

甑は第204号住居跡のものでは、口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は円筒状に近く、孔はやや大きめである。

V－3期

第44・180・224号住居跡などに代表される。器種は坏、甕、壺、甑がある。

坏は須恵器坏蓋模倣坏、須恵器坏身模倣坏に加えて口縁部に段を持つ所謂有段口縁坏が見られる。

須恵器坏蓋模倣坏は口縁部、体部ともに浅くなり外反も鈍く、器壁が厚くなる。特に第44号住居跡は器高が低くなり、より後出的な様相が見られる。

須恵器坏身模倣坏は口縁部が更に短くなり、内屈の度合いも弱くなる。

甕は、第180号住居跡７のように最大径が胴部中央にあり口縁部は［く］の字状に開く。底部は突出しない。第224号住居跡7のように最大径がまだ胴部下半にあるものも見られるが、底部の突出はなくなっている。

壺は、単口縁のものがいずれも口縁部破片であるが第44・59・179号住居跡に見られる。第59号住居跡の底部は突出し、底面は外縁が高く従来の作り方を継承している。

口縁部が直立する壺は第180・224号住居跡に見られる。球状の胴部で、口縁部は第180号住居跡では僅かに内傾している。第224号住居跡例はやや短く僅かに外反している。

甑は従来と変わらないが、第44号住居跡17は胴部上半がより円筒状で、下半から底部にかけて細くなる。小型で鉢形の甑はは第180号住居跡で出土している。外傾する体部から口縁部は僅かに外反する。

Ⅵ期

第197・198号住居跡などが該当し、器種は、坏、鉢、甕、壺、甑が見られる。

坏は、須恵器坏蓋模倣坏と坏身模倣坏が見られる。

須恵器坏蓋模倣坏は体部の扁平化が進み、口縁部の開きがやや大きくなる。口径は12㎝代から15㎝代までばらつきがあるが13～14㎝代が多い。

須恵器坏身模倣坏は口縁部の屈曲の度合いが更に弱くなる。

鉢は第197号住居跡10・11のように口径が18㎝を越えるもので、模倣坏を大きくした形態のものと、深身で体部は内湾して立ち上がり、口縁部が緩く外反するものがある。

甕は長胴で最大径が胴部中位にあるものが主体で、球胴のものが僅かに見られる。長胴で最大径が胴部中位にあるものは、口径と胴部径がほぼ同じくなる。口縁部は「く」の字に屈曲し、底部の突出はほとんどなくなってくる。これとは別に、第198号住居跡23のような口縁部の屈曲が弱く胴部最大径が下半にあり下膨れ形で、底部が突出するものが残ると思われる。

球胴のものは胴部の張りの弱いもので、外面は口縁部直下から縦方向に篦削りされる。

小型甕は、大形の甕と同様に口縁部が屈曲するもの（第198号住居跡17）と、屈曲の弱いもの（第198号住居跡18）がある。

壺は単口縁である。球状の胴部で、口縁部は直立してから開く従来の形態を引き継いでいる。また、第197号住居跡からは肩が強く張り口縁部の屈曲の強いものが出土している。

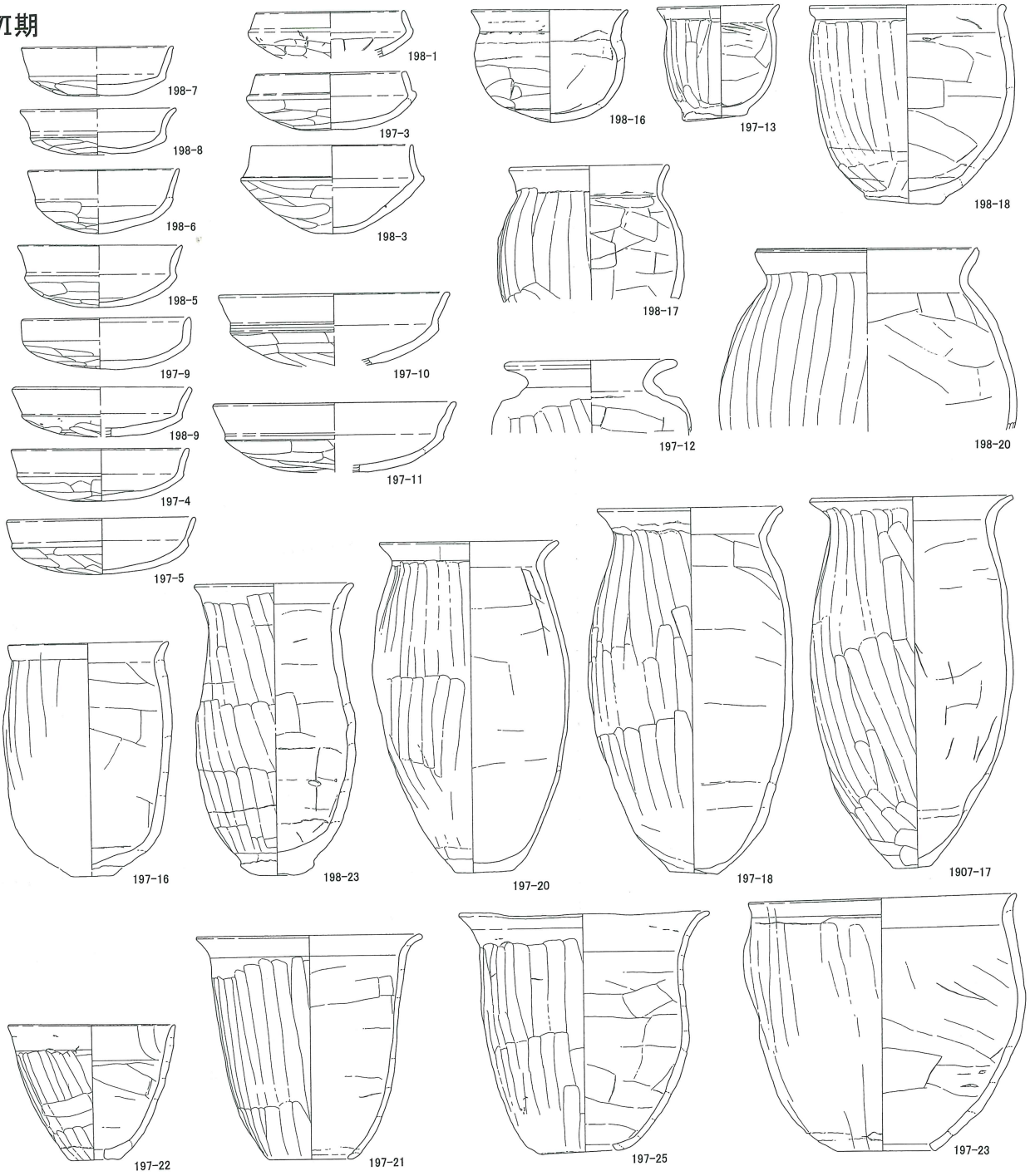
甑は、第197号住居跡から纏まって出土したが、形態は個体差が激しい。

小型で鉢形のものは第197号住居跡22が該当する。やや内湾気味の体部で口縁部は薄く作られる。孔は小孔である。

Ⅶ期

第26・57号住居跡などが該当し、器種は、坏、鉢、

VI期



第462図　宮西遺跡VI期の土器

甕、壺が見られる。遺物が少なく甑は未検出である。本期の特徴は、甕において最大径が胴部から口縁部に移行することである。

坏は須恵器坏蓋模倣坏のみの検出である。体部は依然として扁平化が進む。

鉢は模倣坏を大型化したもので口縁部が有段のものがある。

甕は本期に至って最大径が口縁部に移る。口縁部は外側に大きく開き、胴部の最大径は上位に移って、器壁も薄く作られるようになる。底部も径がやや小さくなる。他に胴部下半の残存であるが球状の胴部をしたものもあるようである。

壺は従来のものが作られていると思われる。

Ⅷ期

第62・287号住居跡などが該当する。器種は、坏、皿、鉢、甕、壺が見られる。甑は未検出である。本期の特徴は北武蔵型坏が出現することである。

坏は丸底で半球状を呈する。口縁部は第62号住居跡３・４などのように短く直立するものと第21号住居跡１や第62号住居跡１などのように僅かに内湾するものがある。口径は10㎝から14㎝代まであるが、12㎝代が欠落している。体部は浅めで、深いものはあまり見られない。器面調整は、口縁部は横方向に撫でられ、口縁部以下は篦削りされる。器厚は薄めである。

皿は第287号住居跡で出土している。口縁部が短く立ち上がる坏を大型化したもので、口縁部はやや外傾して開く。復原口径19㎝である。

鉢は丸底で、体部は半球状で深い。口縁部は僅かに外反する。

甕は、口縁部が強く外反するものが多く、外面は篦状工具による横方向の撫で調整である。一部には撫でが強く、頸部に段を形成するものがある。胴部の器面調整は縦方向の篦削りである。長胴の甕の他にいわゆる胴張りの甕がある。口縁部は［く］の字状に外反するが最大径は胴上位にある。外面の調整は胴部上半が横或いは斜め方向の篦削りである。第190号住居跡では胴部が算盤玉型をした大型のものが出ている。

壺は、第287号住居跡で口縁部破片が出土している。直立する部分が短く外面は外反しているように見える。

須恵器は第287号住居跡で高台付坏の底部がある。坏底部は高台より高いいわゆる「出尻」の坏である。

Ⅸ期

第38・43・162号住居跡などが該当する。器種は、坏、皿、鉢、甕、壺、甑が見られる。

坏は器高が低くなる。口縁部が短く直立するものは、体部と口縁部の境が不明瞭になり、口縁部の横方向の撫でと体部の篦削り調整の間にわずかに調整されない部分が残るものが見られる。口径は10㎝代後半、11cm代と14㎝代が見られる。

皿は扁平な底部から口縁部が短く直立するものと、浅い丸底状の底部から僅かに角度を変えて口縁部を形成するもの、浅い丸底状の底部から口縁部が緩く外反するものがある。

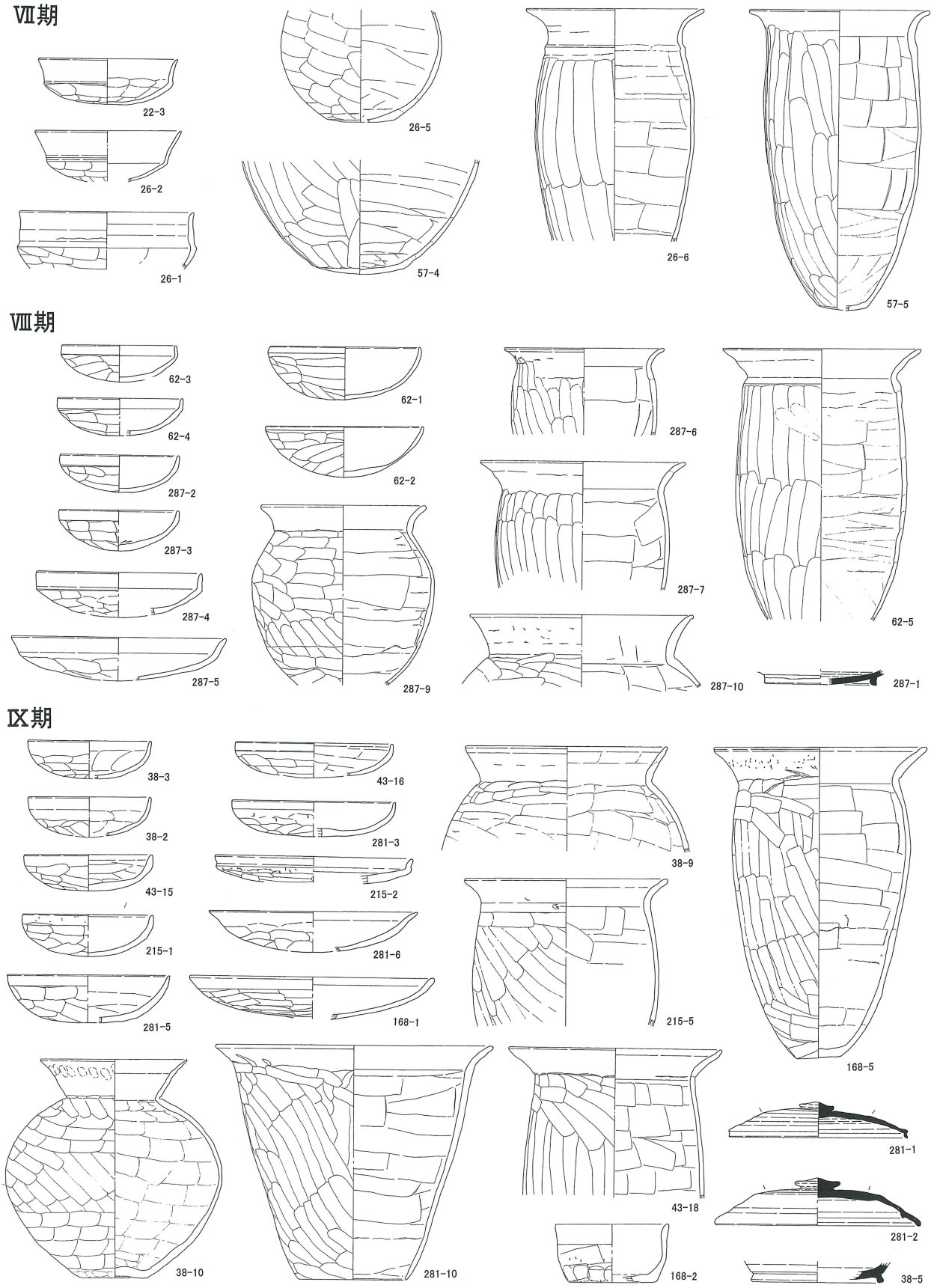
鉢は第162号住居跡で、底部が厚く体部が直線的に外傾して開くものが出土している。第281号住居跡では口縁部が薄く、体部外面の調整が雑なものが見られる。

甕は、器形に大きな変化はないが器面調整に変化が見られる。従来縦方向に篦削りされていたものが上位は斜め方向に削られるようになる。

壺は、第38号住居跡で口縁部が長く、上位が大きく開くものが出土している。角度が変わる部分は粘土紐の接合部に指頭痕が残る。

甑は、口縁部の外反が弱いものが第38号住居跡で出土している。復原実測のため口径が実際より大きくなっているかもしれないが、体部は僅かに外傾して立ち上がり、口縁部は肥厚しながら開く。口唇部内面は撫で調整によって段を形成し薄く作られる。第281号住居跡10は口縁部は単純に撫でられる。孔は無底である。

第293号住居跡では底部が出土している。単孔で



第463図　宮西遺跡Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ期の土器

底部中央に小孔が開けられる。

須恵器は坏、高台付坏、蓋、壷が出土している。坏は底部が全面篦削りされるものである。高台付坏は底部が丸みをもつが高台よりは出ないものと思われる。蓋は第281号住居跡で２点出土している。いずれも扁平な宝珠形の摘みで、１は天井部と口唇部の境に明瞭な稜を持ち内面の返りはない。２は天井部は水平で角度を変えて口縁部に続く。口唇部は丸い。返りは小さく退化しているが、全体の特徴は１より様相を示す。壺は頸部破片と比較的小型の球状の胴部および、平底の底部が出土している。

Ｘ期

第74号住居跡と第108号住居跡を主なものとして充てるが該当する住居跡が少ない。器種は坏、甕が見られるだけである。

坏は器高がやや低くなり口縁部と体部の篦削りされる部位の間に無調整部分が見られる。口径は12㎝代と14㎝代がある。

甕は、個体数が少ないが第74号住居跡では口縁部の外反が弱くなり、胴部上位が張って最大径は胴部に移っている。胴張りの甕もまだ残っているようである。

須恵器坏は器高が低く、底部は全面篦削りされるものと周辺篦削りとが見られる。体部は直線的に外傾して立ち上がりそのまま口縁部に続く。口径は13㎝代で、底径は８㎝代である。

ＸＩ期

器種は、坏、甕である。須恵器は坏と蓋が見られる。

坏は、扁平化が進み第98号住居跡３のような平底化したものも見られるようになる一方で第116号住居跡1のような丸底で器高のやや深いものも残るようである。器面調整は篦削りされる部位が体部中位まで下がる。口径は13㎝代前半が中心で14㎝も少量見られる。また、第113号住居跡5のように内面に暗文の施されるものも存在する。

甕は、従来より器高が低くなり、外面の調整は上位が横方向に篦削りされる。

須恵器坏は器高が深くなり、口縁部が僅かに外反する。底部は周辺篦削りである。蓋は第113号住居跡で宝珠形の摘みがより退化したものが出ている。

ＸＩＩ期

第152・250号住居などが該当する。また、土師器坏の特徴や遺構の重複関係から第114号住居跡も本期に含めておく。器種は少なく坏と甕、台付甕である。須恵器は坏、高台付坏、蓋、長頸壺が見られる。

坏は、より扁平化が進み底部は殆どが平底となる。外面の篦削りは下位まで下がり底部だけのものも見られる。口縁部は底部から直線的に立ち上がるものの他に、第79号住居跡３のように口唇部が内湾するものがある。口径は12㎝前後、13㎝前後、14㎝にまとまりが見られる。内面に暗文の施される坏も存在する。口縁部は直立気味に立ち上がり、口唇部は僅かに外反する。

甕は、胴部上位に最大径を持ち、小さめの底部まで直線的に移行する。口縁部は直立気味に外反し「コ」の字状口縁を呈してくる。

台付甕は破片が出土しているが詳細は不明である。

須恵器坏は、体部が直線的に外傾し、口縁部は僅かに外反するか肥厚する。口径は12～13㎝代で、底部は回転糸切無調整である。第114号住居跡では、破片であるが周辺篦削りされるものがあり、本期の古い段階と考えておきたい。土師器坏が平底化する段階では一部に周辺篦削りが残るのであろうか。蓋はボタン状の摘みで返りのないものである。

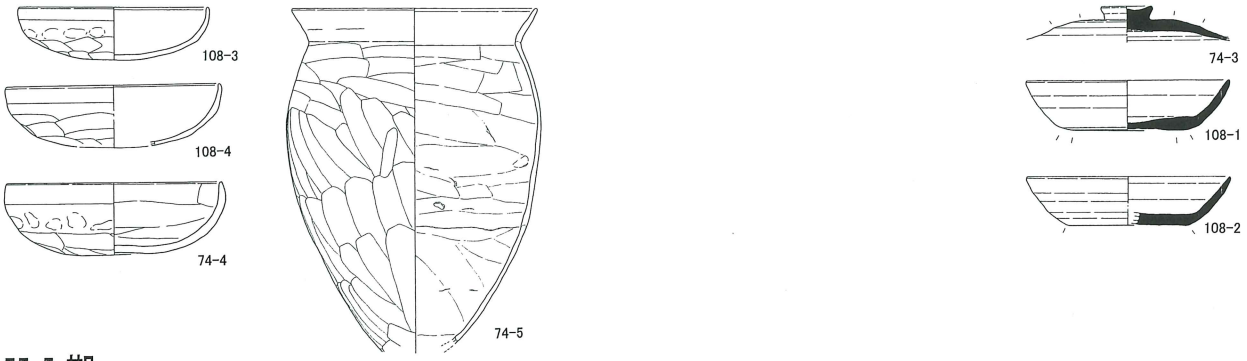
ＸＩＩＩ期

第257・266号住居跡などが該当する。器種は、坏、鉢、甕、台付甕が見られる。須恵器では、坏、高台付碗、皿、高台坏皿がある。

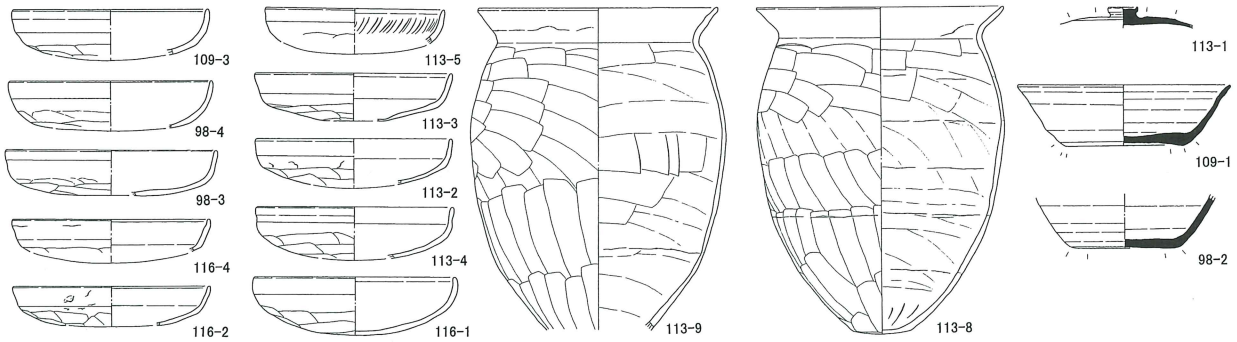
坏は、篦削りされる部位が殆ど底部だけとなる。口径は11㎝代後半～12㎝、13㎝代が多く、14㎝も少量見られる。また、第266号住居跡のように口径が小さめで器高が深めになるものが見られ始める。

鉢は、第257号住居跡で出土している。器壁は厚

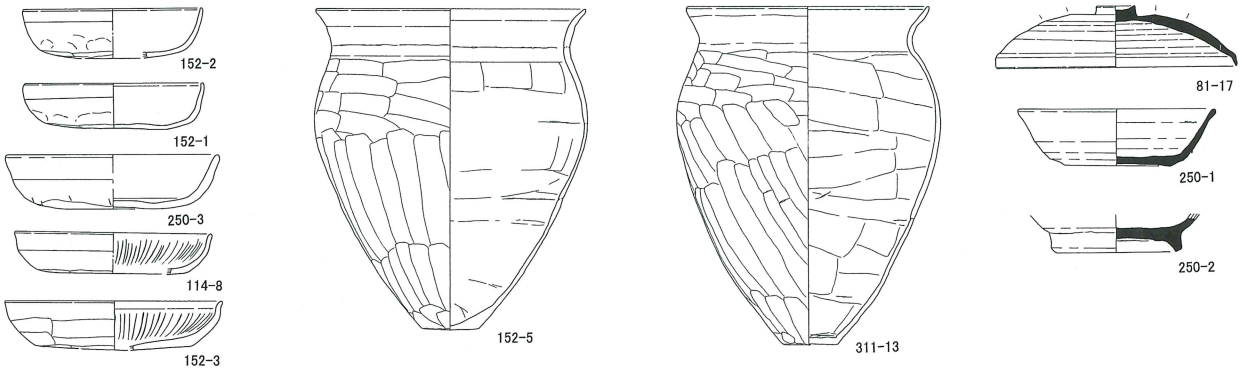
Ｘ期



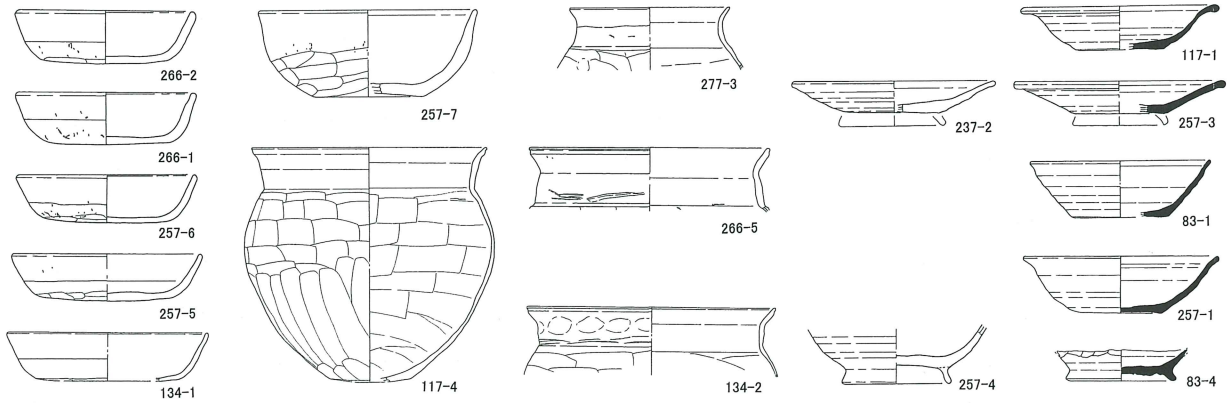
ＸＩ期



ＸⅡ期



ＸⅢ期



第464図　宮西遺跡Ｘ・ＸＩ・ＸⅡ・ＸⅢ期の土器

く平底で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部はやや外傾し薄くなる。外面は下半が篦削りされる。

甕は、全体がわかる資料がないが、口縁部は完全な「コ」の字状を呈する。第117号住居跡4はやや小型の甕で、口縁部が大きく胴部は球状に近い。

台付甕は、口縁部破片が出土しているが詳細は不明である。

須恵器坏は器高が増す。体部は内湾して立ち上がり口縁部は外反する。高台付碗は高台が外側に大きく張り出すようである。皿は深めで、口縁部は大きく外反し口唇部は肥厚する。高台坏皿は高台を欠失しているため詳細は不明であるが、体部は直線的に開き口縁部は短く外反する。

XⅣ期

第75・90・254号住居跡などが該当する。器種は、坏、皿、鉢、甕が見られる。須恵器は、坏、高台付碗、皿、高台坏皿がある。

坏は、前期に見られた深めのものが主流となる。底部から体部への移行は曲線的で、体部からそのまま口縁部に続くものが多い。調整は底部の篦削りが多いが、体部に指頭痕を残すものが僅かに見られる。これとは別に平底の底部で体部の立ち上がり部が明瞭なものが見られる。体部は直線的に斜めに立ち上がる。口縁部は、体部からそのまま続くものや僅かに外反するもの、内湾するものなどがある。器面調整は大きな単位で篦削りしている。いずれの坏も口径は11～12㎝代で13㎝以上のものはあまり見られなくなる。

皿は、第75号住居跡で出土している。体部は大きく開いて立ち上がり、角度を変えて鈍い稜を形成して口縁部に続く。口唇部は丸く作られる。

鉢は、引き続き平底のものがある。口縁部は薄くならず丸く作られる。第90号住居跡では器壁がやや薄く、口縁部が内湾してから口唇部が小さく外反するものがある。

甕は、口縁部が「コ」の字状に最も発達する。底径は従来より更に小さくなるようである。

台付甕は甕と同じく口縁部が良く発達している。第90号住居跡では小型の台付甕が出土している。

XⅤ期

第17・73・96号住居跡などが該当する。器種は、坏、皿、甕、台付甕、甑が見られる。須恵器では坏、皿、高台付碗があり、従来、轆轤土師器や土師質須恵器と呼ばれてきたものが相当量見られる。また、灰釉陶器も組成に含まれる。

坏は、器高が更に深くなる。体部の立ち上がりの丸いものと明瞭なものが継続するが、立ち上がりの明瞭なものは各住居跡に一定の割合で入ってくるようである。前者は体部に指頭痕が残るものが多い。口径は12㎝代が最も多く11、13、14㎝代も僅かに見られる。

皿は、第17号住居跡で1点出土している。浅く内湾して口縁部に至るもので、口径は12㎝とやや小型である。底部は丸底気味で篦削りされる。

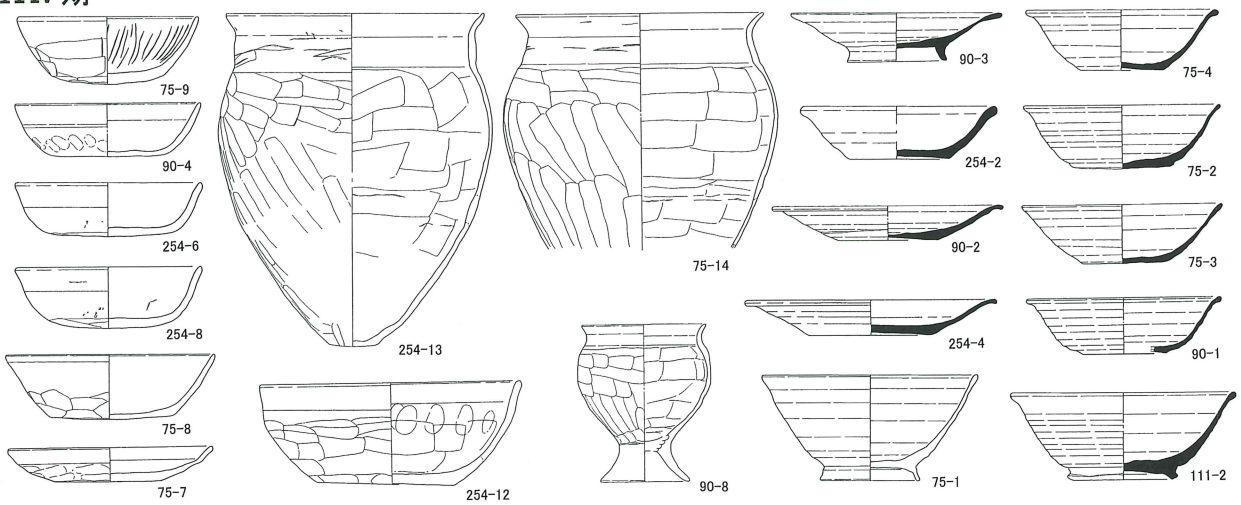
甕は、引き続き「コ」の字状口縁が発達しているが、一部に「コ」の字が崩れてくるものが混ざってくる。第73号住居跡7は口縁部形態が崩れている。また、第73号住居跡6のように口唇部が角張っているものも見られる。第135号住居跡15は口縁部が開いた後口唇部が上方に摘み上げられる形態で従来見られなかった特徴である。胴部の器面調整は上半の横方向に篦削りされる部位が最も広くなるようである。

台付甕は、引き続き組成に組み込まれており、甕と同じように口縁部の退化したものが見られる。

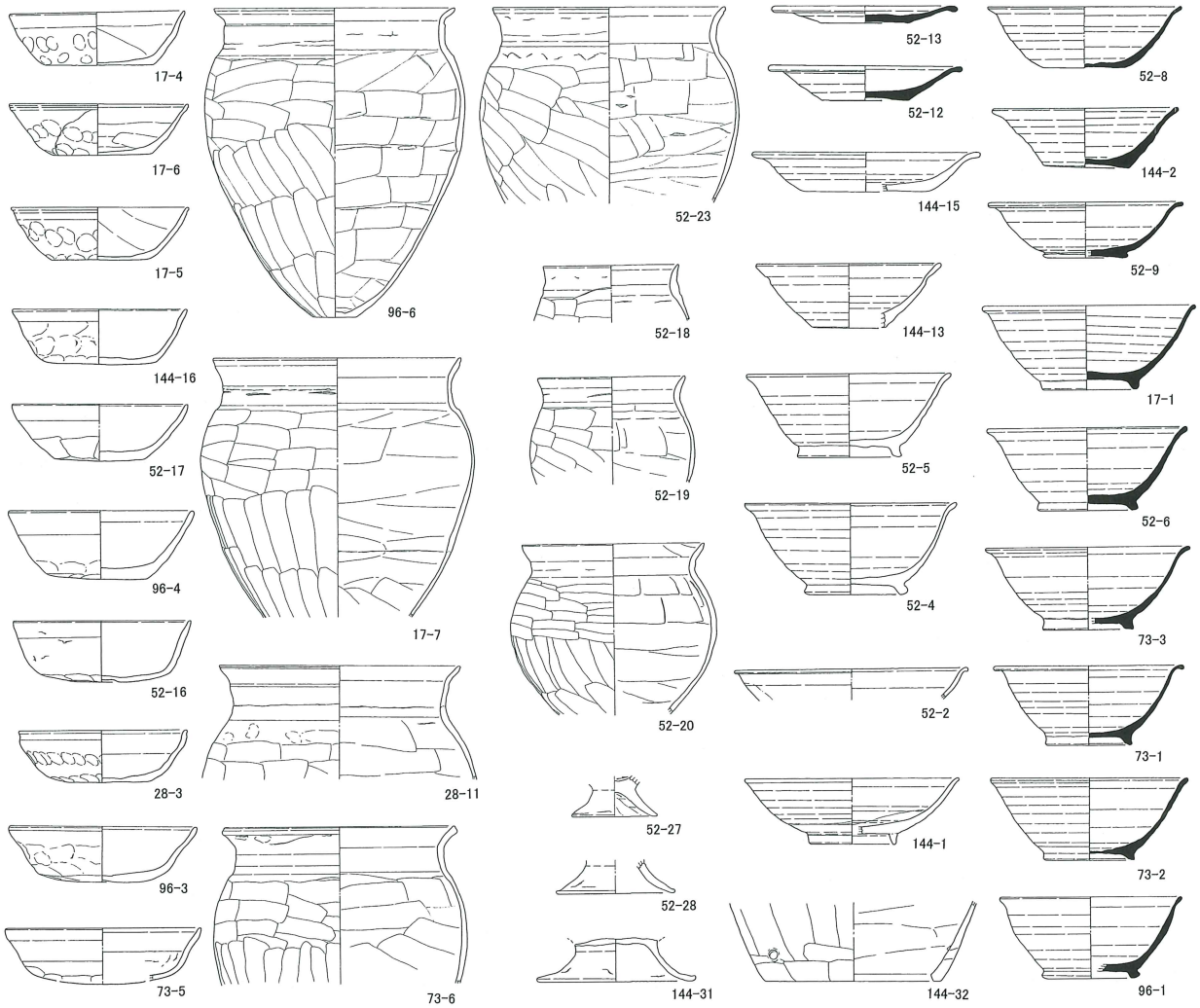
甑は、第144号住居跡に胴部下位の破片がある。無底で側面に穿孔される。

須恵器坏は、従来の内湾して立ち上がるものの他にやや外反するものがある。皿は浅いものとやや深いものがあるが、口径は13㎝代が多く前期より小さくなるようである。高台付碗は高径が13～14㎝代で皿と同じく小さくなっている。高台は短くなり丸みを帯びて作り全体が鈍い印象を受ける。所謂轆轤土師器はいずれの器種にも見られる。

ＸⅣ期



ＸＶ期



第465図　宮西遺跡ＸⅣ・ＸＶ期の土器

ⅩⅥ期

第95・101号住居跡などが該当する。器種は、坏と甕、台付甕が見られるだけである。須恵器などは前期の器種を踏襲しているが、本期になって羽釜が組成に加わる。また、緑釉陶器が見られる。

坏は、体部の立ち上がりの明瞭なものと曲線的に立ち上がるものが、数量的に逆転する。前者は体部外面は大きく篦削りされる傾向は変わらない。後者は依然として調整は下位に留まっている。口径は11㎝代から14㎝代まである。

甕は、「コ」の字状口縁が崩れ緩く外反するものになる。前期に見られた口唇部が角張るものは第95号住居跡に見られる。胴部の張りが強くなり口径も大きくなるようである。第101号住居跡16のように口唇部が直立するものも見られる。

台付甕は個体数が多い。第95号住居跡では甕と同じく口縁部が角張るものがあり、第101号住居跡ではやはり口唇部が摘み上げられるように直立するものがある。通常の甕と台付甕に同様の器形の組み合わせが窺える。

須恵器坏は器壁が厚く体部の湾曲がなくなり焼きも良くないものがある。皿および高台付皿は更に縮小化し、口径が12㎝代のものが多くなる。器壁も厚いものが目立つ。高台付碗は内湾する体部から口縁部が外反し、口唇部が肥厚する形態は変わらないが、体部が内湾せずに開くものも見られる。高台は退化し小さくなるものが多い。須恵器と轆轤土師器との判別が困難なものが多く見られる。　羽釜は第95号住居跡で出土している。酸化炎焼成であるが、均整の取れた胴部で口唇部は角張っている。鍔は断面が三角形で接合は丁寧である。外面の調整は下半部が篦削りされる。灰釉陶器は碗と皿が見られる。第267号住居跡では緑釉陶器稜皿が出土している。

ⅩⅦ期

第137・184号住居跡などを充てておきたい。土師器坏は未検出である。確認される器種は、甕、台付甕、壺、羽釜である。須恵器も坏はごく僅かと思われ、皿は検出していない。高台付碗は轆轤土師器とともに存在するようである。灰釉陶器も存在する。

甕は、口縁部形態が更に崩れて緩く外反するようになる。口唇部が角張るものは見られなくなる。新たに口縁部が短く「く」の字状を呈するものが現れる。器高は従来より高くなるようである。器面調整は、口縁部は横撫でされるが粘土紐の接合痕が残るものが多い。胴部は口縁部下が横方向の篦削りで以下は縦方向となる。

台付甕は、一部に「コ」の字状口縁が残るものの、殆どが甕と同じく「く」の字状口縁となる。胴部の張りも弱くなる。

壺は、第248号住居跡で１点出土している。小型で肩が強く張り、口縁部は短く外反気味に立ち上がる。体部下半は篦削りが顕著である。

羽釜は、寸胴で鍔の部分でやや細くなり、口縁部は僅かに開く。胴部は外面が篦削りされ、内面は軽く撫でられるが粘土紐接合部には指頭痕が残る。

須恵器高台付碗は、器壁が厚く体部の立ち上がりは直線的になる。轆轤土師器も同様で高台は小さく断面が三角形を呈する。

ⅩⅧ期

第103号住居跡などを充てておきたい。器種、出土量ともに少なくなり、坏、甕が見られるだけである。甕の口縁部形態から前後の時期と区別できると考えた。灰釉陶器は伴っている。

坏は、従来の形態を引き継いだものが残るようである。

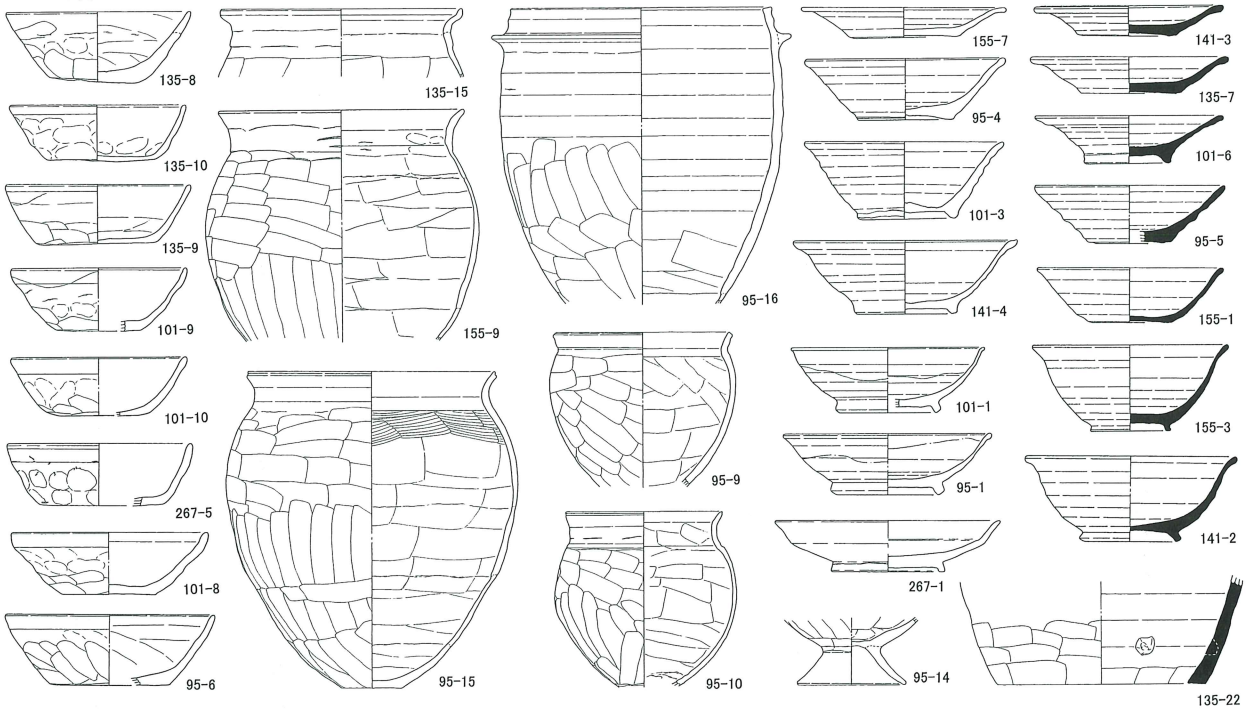
甕は、前期の「く」の字状口縁から直立気味の口縁となり、第150号住居跡２のようにやや厚く短くなるものも見られる。器面調整は上位が横方向に篦削りされ、中位以下は縦方向である。

須恵器及び轆轤土師器は、資料が少ないが、底径が小さくなり全体に縮小化するようである。

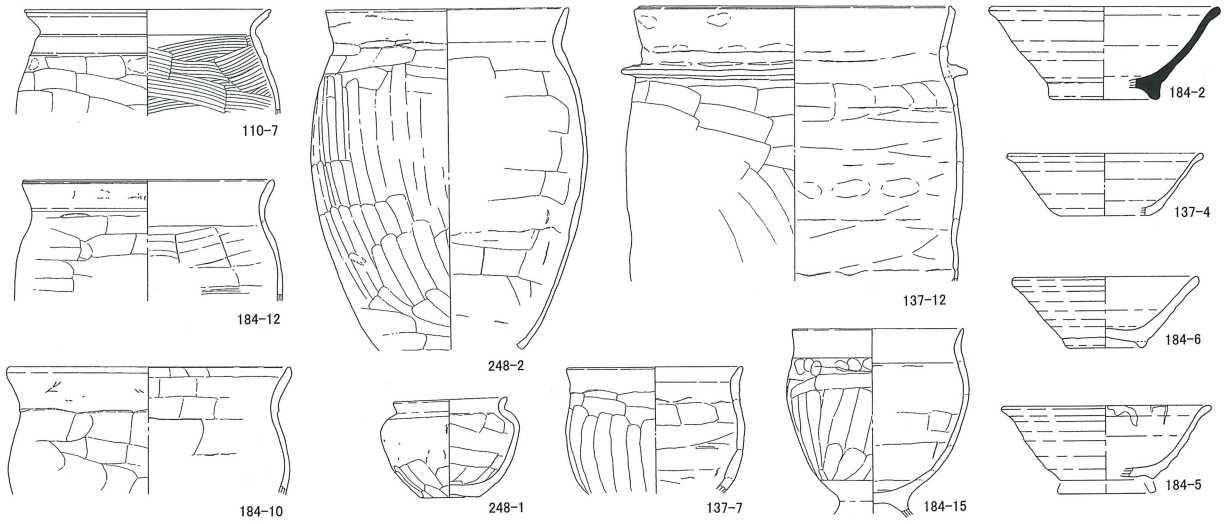
ⅩⅨ期

第214号住居跡に代表される。土師器坏は見られない。器種は甕と羽釜である。轆轤土師器も出土数

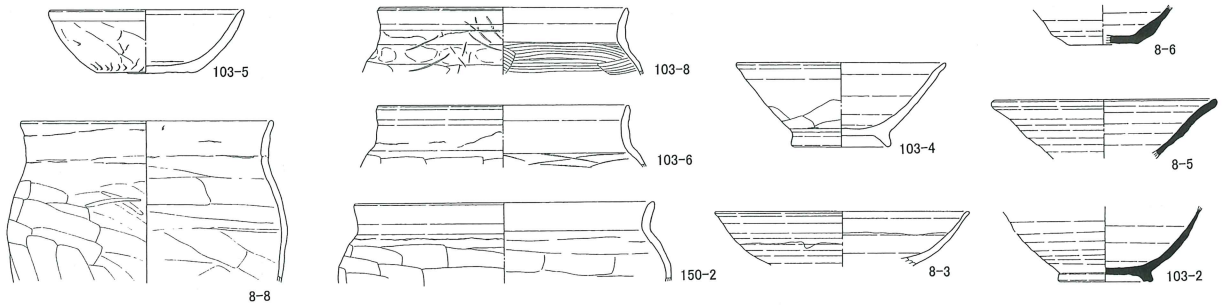
ⅩⅥ期



ⅩⅦ期



ⅩⅧ期



第466図　宮西遺跡ⅩⅥ・ⅩⅦ・ⅩⅧ期の土器

が極端に少ない。大寄遺跡ではこの段階で小皿が伴うようであるが、本遺跡では明確に伴うものは検出されていない。

甕は、口縁部が更に短くなる。第214号住居跡２・３のように口縁部が非常に厚いものがある。口縁部と胴部の接合は、口縁部が胴部より一回り小さく、従って接合部で小さく強く肩が張るようになる。器面調整は口縁部下から直接或いはやや間をおいて縦方向に篦削りされる。器壁は全体に厚くなる。

羽釜は、口縁部の破片資料であるが、膨らみを持った胴部が内湾し、口縁部は直立気味に内傾する。鍔の短いものである。

高台付碗は底径が小さく、高台がやや高めのものが見られる。

ＸＸ期

第７・13・87号住居跡を充てておく。器種は、小皿と甕である。轆轤土師器も少量見られる。

小皿は、第７号住居跡２を充てておく。体部から口縁部にかけて直立し、外面には指頭痕が残る。従来の坏が矮小化したものと捉えることもできよう。１は轆轤土師器の皿の底部破片であるが、これとは明らかに異なる。

甕は、口縁部が極端に短くなり、僅かに外反するか直立する。口唇部は第87号住居跡３のように角張るものと、第13号住居跡４のように細くなるものがある。肩は前期に見られたような張りはなくなる。器面調整は、前期と同様に外面は縦方向に篦削りされるが、口縁部直下から調整されるものが多い。

ＸＸＩ期

第３・291号住居跡などを充てておきたい。これらの住居跡は、器種が少なく組成が不明なため、わからない部分が多い。小皿のみ出土している住居跡もあるが、ここでは、これらを一括したため、不確実な部分がある。器種は甕、羽釜、小皿に轆轤土師器の坏類が伴うようである。

甕は第291号住居跡で出ている。胴部が僅かに内湾しそのまま口縁部となるが、口唇部は細く、僅かに内側に入る。器面調整は外面全体が篦削りされる。口縁部には通常施される横撫ではなく、胴部との区別が不明確である。ＸＸ期の甕とは形式的に差があるように思われる。

羽釜は第３号住居跡で出ている。甕と同じように胴部が僅かに内湾しそのまま口縁部に続く。鍔は高い位置に着けられる。

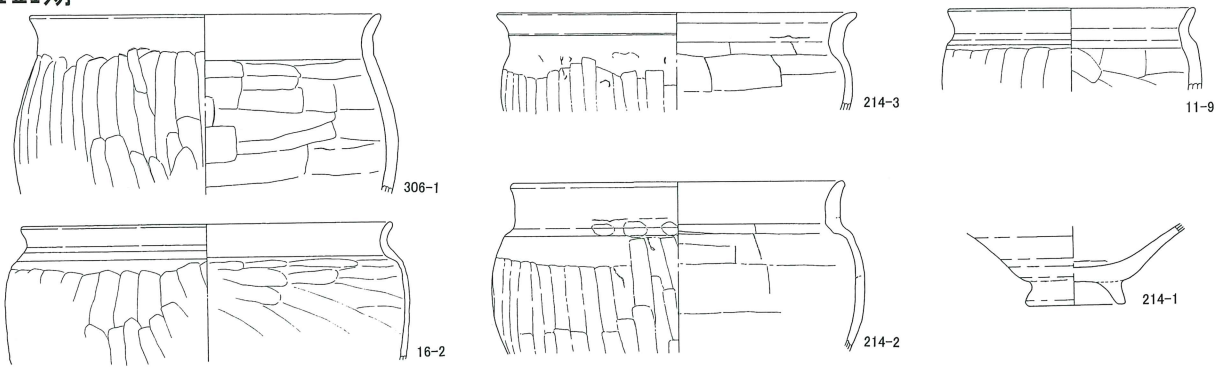
轆轤土師器坏は、第３号住居跡で体部がやや直線的に開くものがある。第227号住居跡では器高が浅く、体部が内湾し、口縁部が軽く外反するものがある。高台付碗は、高台がやや高く器高が浅いものがある。体部は内湾しそのまま口縁部となる。口唇部は細くなる。

轆轤土師器小皿は、第３号住居跡で３点出土している。立ち上がりが内湾するものと外反するものがある。器高もやや深めのものと浅めのものがある。図示した小皿は単独で出土したものが多く、他の時期に遡る可能性があるものも存在すると思われる。

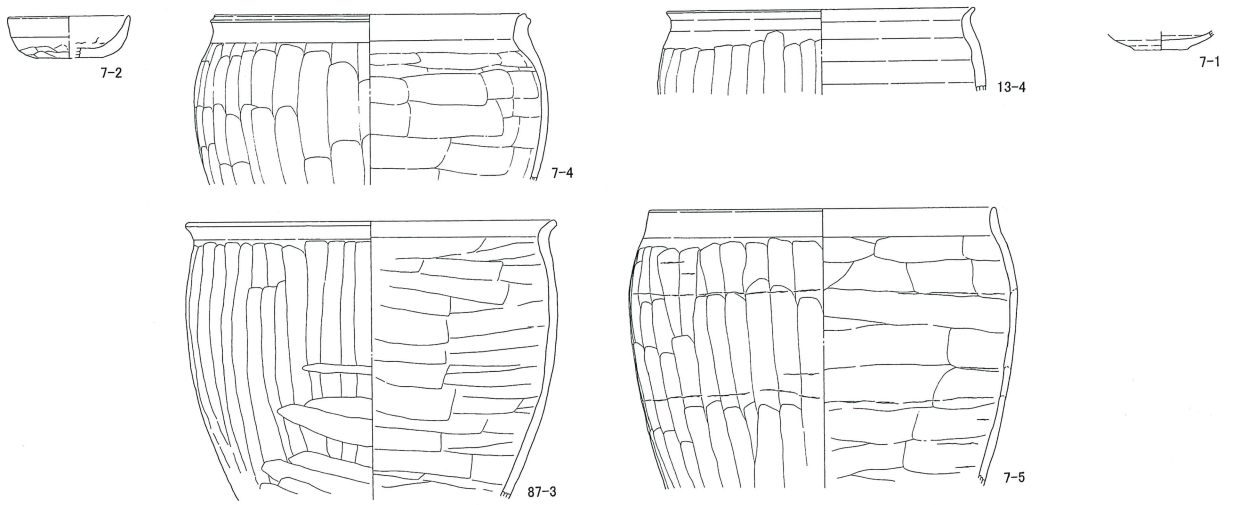
以上のように、土師器坏と甕を基準としてＸＸＩ期に区分した。この区分を他の遺跡と対比すると、概ね以下のようになると理解している。

Ⅰ期はまだカマドを持たず炉の段階である。辻堂遺跡のⅢ－２期に相当するものと思われる。Ⅱ期はカマドが出現する段階で、まだ壁から離れているものがある。Ⅲ期はカマドが壁に固定してくる段階である。Ⅱ期とⅢ期は、初期カマドの段階と定型化してくるカマドの段階で、土器形式や組成に変化があるのかないのかを具体的に検証するために、敢えて分期したが、結果的にはその変化を十分に抽出できたとはいえない。Ⅳ期は他の遺跡では模倣坏が既に見られる段階と考えられ、辻堂遺跡Ⅳ期、砂田町遺跡Ⅲ期に該当すると思われる。Ⅴ期は、今井川越田遺跡Ⅱ期、如意遺跡Ⅳ期に相当する。Ⅵ期は今井川越田遺跡Ⅳ期、如意遺跡Ⅴ期、大寄遺跡のⅠ・Ⅱ期に相当する。Ⅶ期は如意遺跡のⅥ期頃、Ⅷ期は如意遺跡Ⅷ期、大寄遺跡Ⅴ期、古井戸・将監塚遺跡３期、熊野遺跡Ⅱ期古相に相当する。Ⅸ期は如意遺跡Ⅸ期、

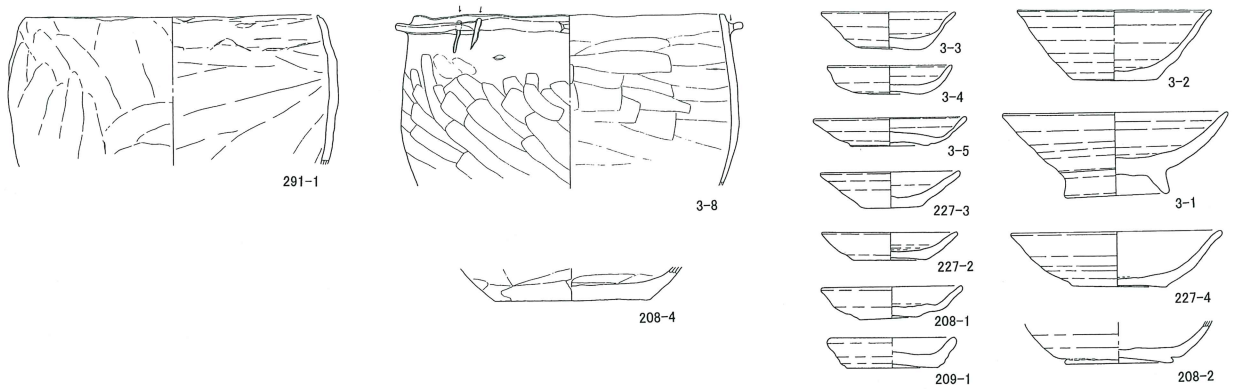
XIX期



XX期



XXI期



第467図　宮西遺跡XIX・XX・XXI期の土器

大寄遺跡Ⅵ期、古井戸・将監塚遺跡４期、熊野遺跡Ⅱ期新相に相当する。Ⅹ期は如意遺跡Ⅹ期、大寄遺跡Ⅶ期、古井戸・将監塚遺跡５・６期、熊野遺跡Ⅲ期古相に相当する。ⅩⅠ期は如意遺跡ⅩⅠ期、大寄遺跡Ⅷ期、古井戸・将監塚遺跡７期、熊野遺跡Ⅲ期新相、中堀遺跡Ⅰ期に相当する。ⅩⅡ期は如意遺跡ⅩⅡ期、大寄遺跡Ⅷ期、古井戸・将監塚遺跡８・９期、熊野遺跡Ⅳ期新相、中堀遺跡Ⅱ期に相当する。ⅩⅢ期は如意遺跡ⅩⅢ期、大寄遺跡Ⅸ期、熊野遺跡Ⅴ期、中堀遺跡Ⅲ期に相当する。ⅩⅣ期は如意遺跡ⅩⅣ期、大寄遺跡Ⅹ期、古井戸・将監塚遺跡10・11期、熊野遺跡Ⅵ期、中堀遺跡Ⅳ・Ⅴ期に相当する。ⅩⅤ期は如意遺跡ⅩⅤ期、大寄遺跡ⅩⅠ期、古井戸・将監塚遺跡12期頃、熊野遺跡Ⅶ期、中堀遺跡Ⅵ期に相当する。ⅩⅥ期は如意遺跡ⅩⅥ期、大寄遺跡ⅩⅡ期、中堀遺跡Ⅶ期に相当する。ⅩⅦ期は大寄遺跡ⅩⅢ期頃、ⅩⅧ期は富田（2000）Ａ期。ⅩⅨ期は縦方向の篦削りを施す甕の存在から、大寄遺跡ⅩⅣ期、中堀遺跡Ⅷ期、富田Ｂ期に相当すると考えている。ⅩⅩ期は富田Ｃ・Ｄ期。ⅩⅩⅠ期は富田Ｅ期に充てておきたい。

年代については、９世紀段階までは各報告書ともおおよそ一致していると考えられるが、資料が少ない10世紀以降に関してはまだ共通した年代観が形成されているとはいえない。ここでは９世紀段階までの年代は以下のように押さえておきたい。

Ⅰ期を５世紀前半、Ⅳ期を５世紀中葉～後半にかけて、Ⅴ期を６世紀中葉、Ⅵ期を６世紀後葉～末、Ⅶ期を７世紀前葉、Ⅷ期を７世紀第４四半期～８世紀初頭、Ⅸ期を８世紀第１四半期、Ⅹ期を８世紀中葉、ⅩⅠ期を８世紀第３四半期、ⅩⅡ期を８世紀第４四半期～９世紀初頭、ⅩⅢ期を９世紀前葉、ⅩⅣ期を９世紀中葉、ⅩⅤ期を９世紀後葉～10世紀初頭。

ⅩⅥ期以降に関しては定見を持たないが、ⅩⅨ期に現れる縦方向に篦削りされる甕については、10世紀後半になって出現するという見方がほぼ一致しているようである。

３．住居跡の分布について

以上の土器の様相から、住居跡の分布についてきわめて大まかに概観する。なお、図を掲載する余裕がないために非常にわかりにくくなったがご寛恕願いたい。

Ⅰ期からⅣ期にかけては、５軒から10軒ほどの住居跡が散在している。Ⅰ期には第２・37号住居跡のように大型の住居跡と、第１・64号住居跡のような中型の住居跡が見られる。住居跡数がもっとも多くなるのはⅢ期で、この時期には第235号住居跡のように比較的小型のものが見られる。

住居跡の断絶期間を挟んで、Ⅴ期以降は住居跡の規模はⅠ期に見られた第２号住居跡のような大型のものは殆どなく、中型、小型のものが多い。Ⅶ期では第57号住居跡のような中型のものと、第26号住居跡のような小型の２種類がある。住居跡の分布は様相が一変する。Ⅶ期までは住居跡は極端に西側に偏在しているのである。Ⅴ期からⅦ期までの住居跡は、殆どが46グリッドから西側に構築されている。第20号住居跡は、河川によって西側が流失していることからもわかるように、集落はもう少し西側に広がっていたと考えられる。もう少しというのはあまり適切な表現ではないが、西側には沖田Ⅲ遺跡との間に河川の存在が推定できるため、広く分布していたとは言えないという意味である。この現象から、５世紀代には住居の構築空間が広く確保できたのに対して、集落の空白期間である６世紀前半を含んで７世紀代までは、東側には住居跡を造ることができない状況があったのではないかと思われる。そのように集落域を規制する要因として古墳があげられる。調査区東側には円墳である第１号古墳跡が検出されているが、古墳は単独で存在していたとは考えにくく、さらに東側の大寄八幡大神社の方まで古墳があった

のではないかと思われる。このことは10世紀以降の住居跡で、埴輪が竈構築材として盛んに用いられていることからも、周辺に埴輪を持つ古墳が複数あったことが窺えるのである。これらの古墳を避けるようにして、この時期、住居跡は西側に寄っていると考えられる。そして、住居跡の分布状況から、Ⅷ期・Ⅸ期頃までは、古墳に対する意識がまだ残っていたと考えられる。

Ⅹ期以降は、再び住居跡が散在するようになる。ⅩⅡ期には住居跡軒数が増えるが、分布は調査区の北から南まで広がる。ⅩⅢ期にもその傾向は継続する。ⅩⅣ・ⅩⅤ期では南側への広がりはほとんど見られなくなるが、ⅩⅥ期にいたって再び南側まで分布を広げ、ⅩⅦ期まで継続する。ⅩⅧ期以降は住居跡数の減少が見られ、住居跡の規模も小型化したものが多くなる。

参考文献

赤熊浩一　1991　「古代武蔵の土師器理解のために」『研究紀要』第８号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
赤熊浩一　2000　『宮西遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第250集
赤熊浩一　2000　『熊野／新田』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第251集
石岡憲雄他　1981　『六反田』岡部町六反田遺跡調査会・埼玉県立歴史資料館
礒崎　一　1997　『今井川越田遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第191集
今関久夫　1990　『むじな塚遺跡群』寄居町文化財調査報告第８集　寄居町遺跡調査会
今村直樹　2003　『四十坂遺跡』岡部町遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書第11集
岩瀬譲・大谷徹・栗岡潤　2003　『如意遺跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第285集
大里郡市文化財担当者会　1993　「大里地域の遺跡Ⅱ」『埼玉考古』第30号　埼玉考古学会
小倉　均　1980　『大間木内谷・和田西・吉場・井沼方遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第13集
木戸春夫　1998　『沖田Ⅰ/沖田Ⅱ/沖田Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第231集
木戸春夫　2003　『宮西遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第288集
黒坂禎二　1984　『深作東部遺跡群発掘調査報告』大宮市遺跡調査会報告第10集
黒坂禎二　1999　「八幡台遺跡」『小川町の歴史』資料編１　小川町
劔持和夫　2000　『築道下遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第245集
恋河内昭彦　1996　『辻堂遺跡Ⅰ』児玉町文化財調査報告書第19集
小出輝雄　1978　『打越遺跡』富士見市文化財報告第14集
佐藤康二　1998　『砂田前遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第198集
佐藤忠雄　1983　『西浦北・宮西』岡部町教育委員会
下村克彦　1981　「新田野段階花積下層式土器と二ツ木式土器について」『奈和』第19号　奈和同人会
末木啓介　2004　「北武蔵の羽釜」『研究紀要』第26号　埼玉県立歴史資料館
鈴鹿良一　1999　『摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅷ』福島県文化財調査報告書第351集　福島県教育委員会　福島県文化センター
竹島國基　1975　『宮田貝塚-昭和48年７月発掘調査報告』小高町教育委員会
田中広明　1992　『新屋敷東・本郷前東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第111集
田中広明・末木啓介　1997　『中堀遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集
富田和夫・赤熊浩一　1985　『立野南・八幡大神南・熊野大神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第６集
富田和夫　2000　『大寄遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第268集
富田和夫　2002　『熊野遺跡Ａ・Ｃ・Ｄ区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第279集
鳥羽政之　1995　『中宿遺跡』埼玉県岡部町埋蔵文化財調査報告書第１集
鳥羽政之　1997　『中宿遺跡Ⅱ』埼玉県大里郡岡部町遺跡調査会発掘調査報告書第５集
中村倉司　1999　『岡部条理／戸森前』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第217集
西井幸雄　2004　「大宮台地北端の縄文前期集落-行田市馬場裏遺跡の調査-」『埋文さいたま』№44　埼玉県立埋蔵文化財センター
昼間孝志　1984　『三ヶ尻林（２）・台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第34集
福田　聖　2002　『大寄遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第280集
藤巻幸男　1984　『賀茂遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
宮田　毅　1981　『大塚・間之原遺跡確認調査の概要-第２次調査（白金・榎戸・大塚・高原地区）-』太田市教育委員会
山口逸弘　1992　『五目牛南組遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書第139集